

地域交流研究

年報第14号



都留文科大学地域交流研究センター

2017年度

地域交流研究

2017年度

年報第14号

目 次

— 第13回地域交流研究フォーラム —

平成26（2014）年山梨県大雪をふりかえる

— 2017（平成29年度）年度活動報告 —

平成26（2014）年山梨県大雪をふりかえる	3
I. 2017年度の活動について〔概況〕	38
II. 各部門の活動	41
II-1. フィールド・ミュージアム部門	
II-2. 発達援助部門	
II-2-1. 地域教育相談室	
II-2-2. 地域情報教育	
II-2-3. 地域美術教育	
II-2-4. 地域インクルーシブ教育	
II-3. 暮らしと仕事部門	
III. インターフェイスとメディアの活動	60
III-1. 第13回地域交流研究フォーラム	
III-2. 各種講座の開催	
(1) 都留文科大学現職教員教育講座	
(2) 都留文科大学子ども公開講座	
(3) 県民コミュニティーカレッジ講座	
III-3. 『地域交流センター通信』の発行〔第29号〕	
III-4. 学部共通科目の開講	
(1) 「地域交流研究Ⅰ」－地域交流活動を普遍的な文脈で考えるにはどうすればよいか？－	
(2) 「地域交流研究Ⅱ」－生きもの地図をつくる－	
(3) 「地域交流研究Ⅲ」－「山梨」を知り、歩き、知らせる－	
(4) 「地域交流研究Ⅳ」－地域の交流誌をつくる－	
IV. 地域貢献活動	70
IV-1. 山梨県南都留地域教育フォーラム	
IV-2. 都留市放課後子ども教室事業	
IV-3. 文大ボランティアひろば	
IV-4. 地域交流研究センターサテライト	
IV-5. 文大名画座	
IV-6. 学級づくりの向上をめざす実践講座	
V. 地域交流研究教育プロジェクト	77
V-1. 田んぼクラブ	
V-2. 食育つる推進プラン	
V-3. 都留市十日市場・夏狩地区における桂川を中心とした水環境の経年変化の把握	
V-4. 谷ニラボ	
VI. C O C 推進機構	85

第13回 地域交流研究フォーラム

『平成26（2014）年山梨県大雪をふりかえる』

2018年2月24日

都留文科大学

平成26(2014)年 山梨県大雪をふりかえる

平成26年2月に起こった大雪は、交通網のマヒ、建物の崩落、ライフラインの切断による住民の孤立など、山梨県内外に甚大な被害をもたらしました。こういった経緯を踏まえ、本学COC推進機構ではこの大雪について、当時の様子について平成29年度に市民に対してアンケート調査を実施しました。

本フォーラムではアンケート調査で分かったことの報告や大雪を実際に体験した地域住民の方や行政の方の話を聞き、参加者の皆様のご意見もいただきながら、大雪災害について学問的に考え、経験を語り継ぐ場としたいと思います。

当時大雪の被害にあった方、自然災害について興味のある方、地域防災について活動している方等、多数の皆様のご参加をお待ちしております。



日時：2018年 2月24日(土)13:30～16:00

受付13:00～

会場：5号館101教室

話題提供者：益子邦子氏(都留市在住教員)
山口哲央氏(都留市役所企画課長)

参加無料

解説：山口 博史(都留文科大学COC推進機構准教授)

申込方法：①大学ホームページの専用ページ(イベント情報)から申し込む
②下記の申込先に電話で申し込む(お名前、住所、連絡先)

都留文科大学地域交流研究センター
☎0554(43)4341(内線606)
電話対応時間は、平日9:00～16:30

地域交流研究センターサテライト
(まちづくり交流センター内)
☎0554(43)1321
電話対応時間は、火～金9:00～16:30



平成26(2014)年 山梨県大雪をふりかえる

1. 地域交流研究センター長挨拶

竹 下

みなさん、こんにちは。本学地域交流研究センター長の竹下でございます。今日は本当にお忙しい中、こちらにご参加いただきまして、ほんとうにありがとうございます。また、本センターの活動に日頃いろいろご協力いただきまして、本当に感謝しております。この場をお借りして、お礼を申し上げます。フォーラムに先立ちまして、お願いがございます。主催者側として会場の発言を録音させていただきます。これは、センターで発行する年報に活動記録を掲載しているためです。なお、主要な発言をいただいた方には、後日原稿をお送りして、ご発言の趣旨が適切かどうか、ご確認いただいたうえで、掲載させていただいております。よろしくお願いたします。それでは、第13回地域交流研究フォーラム「平成26(2014)年山梨県大雪を振り返る」を開催いたします。ここからは、本学COC推進機構の山口博史准教授に進めていただきます。では、山口先生お願いいたします。

2. フォーラムの企画趣旨と話題提供

山 口

いま、ご紹介にあずかりました山口でございます。今日は三人にお話をお願いしました。そのうちの一人が私なのですが、最初に「平成26(2014)年山梨県大雪を振り返る」ということで、去年の1月になりますか、都留市民のみなさま宛てにアンケートをお願いしまして、その結果の概要について報告を行ない、それから都留市の生活者の立場から、次に対応にあたった方から、当時どうだったかな、というお話をしてもらいます。こういう記録作りというのは、私は大切なことだと思っていて、そういうことの第一歩になればいいなと考えているものであります。

ちょっと皆さん、あのとき何をしていたかということを少し思い出してください。ちなみに私は都留にいませんでした。外国で研究をしておりました。外国でも山梨の大雪というニュースには触れて、日頃降らないところで大雪となるとそれは大変ではないかと思っていた記憶がございます。皆さんいかがでしたでしょうか。後でフロアの方々と語れる時間があると思いますので、その時に、当時どういうことをお感じになったか、どういうことをなさっていたかということをご発言くださればと思います。それで、こういう大雪の研究をしようと思ったひとつの大きなきっかけというのが、少なくとも今、元気で都留に暮らしている方にとって、これほどの雪はまず記憶がなかった、というのが実感だったのではないか、ということです。それで、先ほど「記録って大切だよね」という話をいたしました。いま直接の意義がよくわからないことであっても、ここにいる人たちも200年生きるということは難しいのではないかと思

ますが、200年後の人たちにとって、もしくは300年400年後かもしれませんが、昔の人はこのように大雪に対処したのであるという記録が残っているということは、やっぱり大切なことなのではないかと思って、この研究をスタートしたという記憶がございます。

私の専門は社会学です。社会学を専門とする人が、なぜ大雪なんて研究するのでしょうか。ここに、あの雪のことを非常に詳しく研究した新潟大学チームの研究成果の報告書¹がございます。あとでご覧に入れますが、非常に詳しいですね。これを参照しますと大雪の研究、もしくは気象の研究というのは、基本的に理学、工学、農学といった専門の人たちが中心になっているように思います。そして、この研究成果を見ていると、非常に詳しいことが書かれているのですが、まだ私が貢献できる余地があるかもしれないと思いました。だから、この研究を始めました。

雪をどうとらえるか、結論を先取りしてというようなことになりますが、雪というのは、こないだもこれぐらい積もったんだと思うんですけども、水の凍ったものが上から降ってくると、そういうふうにとらえればそうなんです。しかしそうではなくて、人間の暮らしとか、そこに住んでいる人々が作っている社会とか、そういうものとの関わりの中で捉える、そういう見方もあるのだと思います。その方面では、私でもこの新潟大学チームの詳細な研究にまだなにか積み上げることはできるんじゃないかと思って、「雪の性格には多面性があるよ」というお話を今日ではできるとよい、と思っています。

それで、いま放送大学で放映中ですが、『地域と都市の防災』（目黒公郎・村尾修（編著）放送大学教育振興会、2016年刊）という本があるんですけども、その中でも出てくる教科書的な話ですが、災害研究では、ハザードとディザスターを分けます（同書、41ページ）。ハザードというのは、自然現象の脅威そのものです。ディザスターというのは、自然現象がもたらす災害ということです。図式的に申しますと、たいへんだっ広いところがあって、人は住んでいないところに、仮に50メートルの積雪があったとします。これは災害とは言わないんですね、おそらく（とはいえ、非常に長い目で見れば何らかの災害につながるのかもしれませんが）。つまり極端な自然現象というのは、そこに住んでいる人たちと会うことによって、災害になったりならなかったりするのです。これが、災害に関する研究者の立場であります。東北大学で、震災被害の聞き取りをした人が、「自然の力がどんなに大きくとも、人がいなければ、村や町がなければ、災害とはならない。災害化するの、自然の外力（ハザード）が人間の暮らしと遭遇するときである」（高倉、2012: 23）と述べておられます。ハザードが、ディザスターに変わる。社会というのは、その一種の変換の機構といいますか、メカニズムみたいなものを含んでいます。

何を言っているかわかりにくいという方があるかもしれないのでひとつ例をご覧に入れます。これは三重県の関というところ、旧東海道です。こちらの写真（写真1）が三重県の関です。で、こちらの写真（写真2）が滋賀県の柏原、中山道です。鈴鹿山脈の北と南、6~70kmくらい離れているかな。柏原の方の屋根には、都留近辺にもありますが、雪止めがついています。柏原では雪は降るのですね。新幹線で京都へ行くときに関ヶ原から米原あたりで新幹線で徐行するほど雪が降ったりします。柏原はあのあたりです。それで、雪止めがついていたりする。関の方はそれほど降らないのですね。雪に対する手立ては柏原ほどには考えられてはい

1 和泉薫（研究代表者）、2014、『2014年2月14-16日の関東甲信地方を中心とした広域雪氷災害に関する調査研究』、平成25-26年度科学研究費助成事業（科学研究費補助金）（特別研究促進費）研究成果報告書。



写真1 三重県・関 (写真 山口)



写真2 滋賀県・柏原 (写真 山口)

ません。都留近辺でいうと雪が降ったとき、雪止めがないと落雪で大変なことになったりとか、雪も下に落ちてくるより屋根の上にあったほうがかえって始末がいいという声もあるようです。仮に同じような雪が降ったとしても、柏原と関では、備えのあり方が違いますからその意味合いというはずいぶん違ってくると思います。

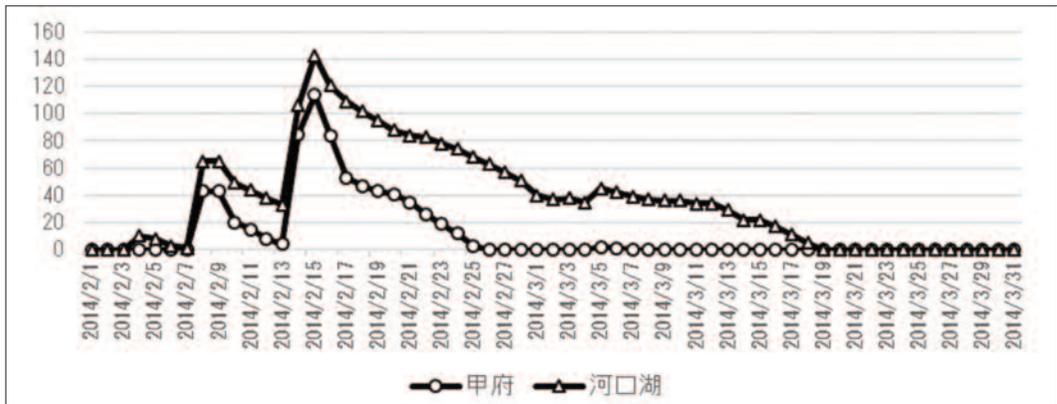
このように同じ自然現象がどうい
う変換メカニズムをとって災害化する
のか、これはやっぱり重要なこと
だと考えています。そこで、いろいろ
と既存の教科書をあたってみたんで
すけれど、雪害についてはそれほど
記述は多くないようです。日本でお
こる災害で、注意を引くのは何とい
っても地震、それから風水害といっ
たことなのだろうと思います。

ただ、先ほど、柏原と関の写真をご
覧に入れましたけれども、自然災害
がもたらした被害を研究するという
ことは、その地域はどういう特性を
持っているのか、ということを自然
条件とか、社会構造の面から、深く理

解することとつながっているものだろうと思います。ですので、私は、ここではもちろん災害の研究をしているのですが、それを通じて、この地域を理解する、そういう作業もあるのだと考えているところであります。

今回の事例ですけれども、まあ気象的なところで、これはハザードですね、そちらの方の話をまずはしておくべきかなと思います。以降「2014年2月豪雪」と申し上げますけれど、2月中旬に山梨県をはじめとして関東甲信越地方に記録的な雪がありました。甲府や河口湖で観測開始以来最深の積雪を記録しました。交通途絶があちこちで発生して多くの被害が出ました。生活面でもいろいろ被害がありました。2014年以前の最大の値は甲府で49cm、河口湖で89cmだったということです。この、以前の大雪も都留でもよく知られていまして、それを大きく上回る災害だったということです。

どれぐらい降ったかということですが、記録では甲府で114cm、河口湖で143cm降ったということです。実はその前の週にもけっこう降っているんです。前の雪がとけきらないうちに次の雪がドサッと降ってきたという格好ですね。そのうえで河口湖データ(グラフ1)を見てみましょう。積雪が日を追うにつれて減っていつて、3月になってもまだ残っているけれども、



グラフ 1 2014年2月～3月 日毎の積雪深
(出典 気象庁ウェブサイトのデータ²⁾ (山口, 2017:176)

またちょっとそこで降って、消えたのが3月19日です。おそらく、3月19日に消えたといっても、それは手を付けずに置いてあった雪が3月19日に消えたというだけで、雪かきで横へのけた雪はもっとうずと残っていたと思います。まあしかしデータ上はこのようなになっています。甲府では記録上49cmが最深だったのが倍以上降っているわけですからこちらも相当なものだったというわけですね。山梨県の持っているデータ、それから都留市でまとめたデータを示します。市町村被害集計表(山梨県防災危機管理課2014/3/2付)を参照しますと、亡くなった方が5名、重軽傷者が107名、家屋全壊が13棟、半壊42棟、一部破損が非常に多くあったということです。よく言われているのが、ハウスの破損が非常に多かった、ということですね。それから、都留市内では帰宅困難者が相当な数出て、2月15日の時点で都留市役所の集計では、帰宅困難者303人でした。250、227、90人と日を追うごとに減っていくんですけども、かなりの帰宅困難者が出たということになります。



写真3 無雪期の文大(写真 山口)



写真4 大雪時の文大
(写真 杉本光司本学特任教授)

それで雪がどれくらい降ったのかというと、ちょっと見るのも嫌だという方がいるかもしれませんが、ご覧に入れます。これは、都留文科大学の普段の様子(写真3)ですね、階段がご

² 気象庁のウェブサイト (<http://www.data.jma.go.jp/gmd/risk/obsdl/index.php>) のデータより作図。(2015/6/8)

ざいます。これが、雪が降った時にはどうなったかと、これくらい(写真4)になったということです。

これは、都留文科大学の杉本光司先生に写真を頂戴したのですが、ここまで来ることができたことにご注意ください。降った直後はもっとひどかったんだろうと思います。大学の中を、後で歩いてくださればどんな程度のものだったかということがわかるのではないかと思います。これ(写真5)は4号館と1号館の間の通路を見たところですね。普段もまあ狭い通路ですが、どうするのかというくらい雪が降っております。

この写真(写真6)は、今いる部屋の横の駐車場ですね。私たちがいる建物、この建物の裏側に駐車場があるんですけど、これは、おそらく車だと思えます。どうしようもないですね、これね。何度も繰り返しますが、ここまで来ることができた、ということですから、降った直後はもっとひどかったでしょう。これは、校舎の窓から外を見たところですけど(写真7)、

写真が黒くなって何が写っているのかよくわからない状態なんですけど、雪が窓ガラスのところへやってきて、ちょっと手の打ちようがないというような形です。

市民の方から、1枚写真の提供をいただきました(写真8)。これは、朝起きてすぐくらいの様子だそうです。多分これくらいが最大の積雪で、画像で寸法を計ったらこれは何cmくらいかわかるんじゃないかと私は思うんですけど。そうとう降っていますね。まあ大変なことです。市役所の方から頂戴した写真(写真9)ですけどこれはその都留の中を走る

幹線道路のようすであります。帰宅困難者が車に取り残されて、国道に連ならざるを得ないような状態になっています。なんでこんなことになったか、ということをやっぱり考えないとい



写真5 大雪時の文大
(写真 杉本光司本学特任教授)



写真6 大雪時の文大
(写真 杉本光司本学特任教授)



写真7 大雪時の文大
(写真 杉本光司本学特任教授)



写真8 大雪の早朝
(写真 都留市民) (山口, 2017:179)



写真9 渋滞の様子 (写真 都留市役所) (山口,
2015:91)



写真10 都留市の様子 (写真 山口)

のとおり、谷の合間にずっと町が細長く続いているのが都留です。ですから、どうしてもここを通らざるを得なくて、ここで車が1台引っかかると全部後ろが繋がってしまいます。災害というのは、土地の持っているそういう特徴が最も先鋭的に表れる一面があるといえます。都留でそういうことが起きたというのは、他のところでも起きていますけれども、この自然条件

けない。それには、山梨県都留市はどういう地勢のもとにあるか、ということを考えないといけないだろうと思います。ちょっと、この地図(国土地理院・2万5千分の1地形図『都留』)を皆さんに回してください。

適宜ご覧くださればと思いますけど、山梨県都留市というのは、ちょっと小さくて申し訳ないけれども、地図で申しますとここに当たります。富士山に抜けるここしか道がないんですね。まあ、抜けようと思えば抜けられるんですけども、大きな道はここしかないです。結構前になりますけれど、山梨県立博物館で展示を拝見していたときに気づきましたが、山梨県の道というのは基本構造はあまり近代以前から、そんなに大きくは変わっていないようです。なにかというと、甲州街道、それから、甲州街道から南、山中湖の横をぬけるいわゆる鎌倉往還と書いてありましたけれどもそういった道、それから、この、富士川の横を抜けていく、そこに駿州往還でしょうか。他にもあるんですが、その3つが、山梨県の道の基本構造としてあるようです。それで、災害などで交通途絶が起こると横に逃げようがない、というのが山梨県の特徴かと思えます。

もちろん、横に逃げられたら車が詰まるようなことにならなかったか、そうは言えないと思うのですが、逃げ道がないことで渋滞の程度が甚だしくなるでしょう。こういう自然条件のもとにあるかな、と思います。そして、都留市についてです。大学の裏のその山に登って写真を撮ってみたのですが(写真10)、ご覧

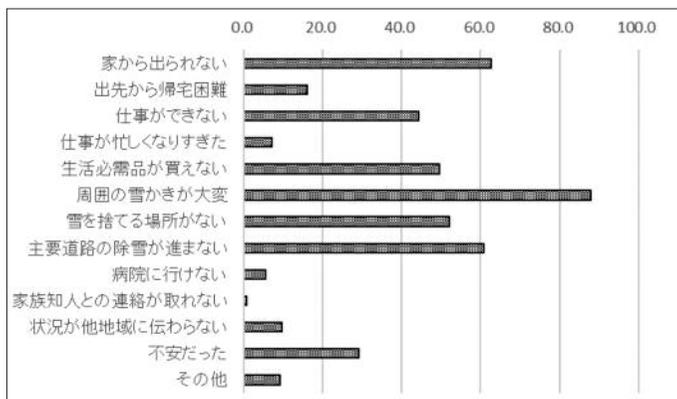
のひとつの帰結であるだろうと思っています。

自分で、あちこち歩いたり、様子を聞いたりすると、そういうことがわかってきました。ただ、ここに住んでいる人たちが、そもそもどうお感じになって、それは、その人の社会的属性ごとにどう異なるのかということは、ずっとインタビューを続けるだけではその傾向まではなかなかはっきりは分かってきません。そのため去年の1月にアンケートをとってみました。20歳から79歳までの都留市住民を対象にして、住民基本台帳から系統抽出で対象者を選定して調査を行ないました。回収率は51.4%で、近年の調査としては高めだと思います。このような調査を量的調査といいますけれども、この量的調査でとらえられない個々の事例を把握するために、インタビュー調査を、これ以前からずっと続けていますけれども、実施しているという格好です。

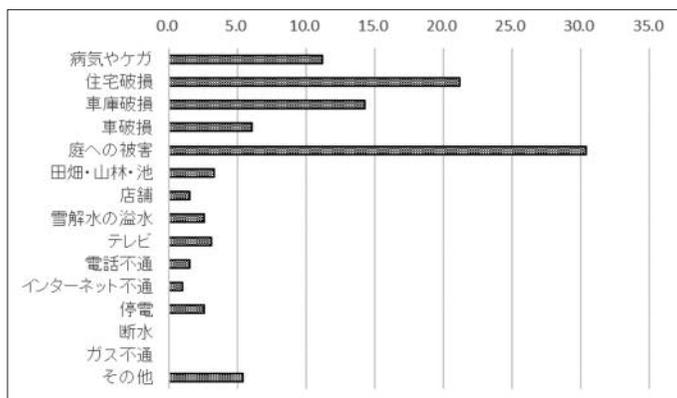
グラフ2に示したのは雪で困ったことです。ざっと単純集計でみていきますが、家から出られないというのが6割くらい、出先から帰宅困難だというのが2割いかないくらい、仕事ができないというのが5割いかないくらい、仕事が忙しくなり過ぎたというのがこれくらい、主要なところだけかいつまんでいきます。周囲の雪かきが大変というのが9割近くと、除雪が進まないとか雪を捨てる場所がないというのがこれくらいということで、かなりお困りになった様子がわかってまいります。

グラフ3は被害についてです。先ほどのグラフとパーセンテージが大きく違うので、ちょっとお気を付けください。一番大きかったのが、家の木が折れたとかそういうことでしょうか、庭への被害というのが3割ぐらいいあった、あとは病気、ケガをした、住宅が破損した、それから車庫が破損したというのがある程度みられる、そういう結果でありました。

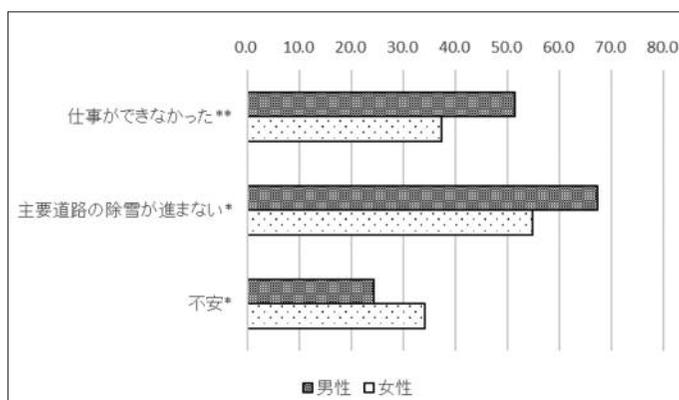
さきほどふれた、立場によってどういうふうに被害状況と積雪による困りごとと、どういうふうに関わりがあったかということについて少しお話をいたします。アンケート調査というのはこぼれ落ちる要素も多いのですけれど、ただ、カテゴリーごとに比較を行なうことが可能なので、大枠どのように違っていたのかということをお話するにはいいですね。まず、男性と女性で雪で困ったことはどう違ったか。男性と女性を比べてみましょう(グラフ4)。男性は仕事ができなかった、それから主



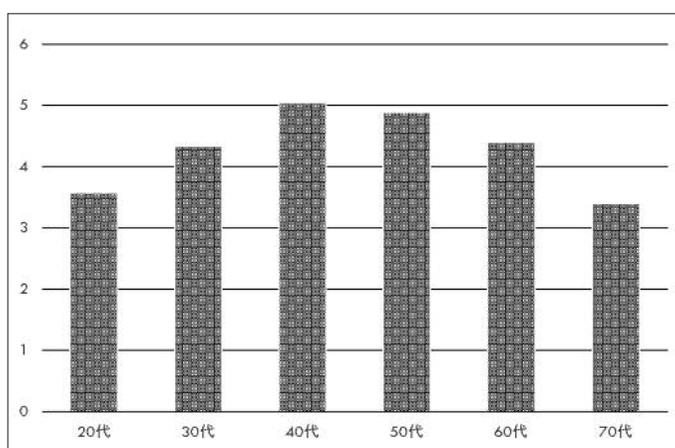
グラフ2 雪で困ったこと (山口, 2017:178)



グラフ3 雪の被害 (山口, 2017:179)



グラフ4 男女別雪で困ったこと
(%, 統計的有意差があるもの) (山口, 2017:180)
*p<.05 **p<.01



グラフ5 年代別・雪で困ったことの項目数 (平均)
(山口, 2017:182)
p<.001

要道路の除雪が進まないという
ことで困ったという回答が、
統計的にみても多いというこ
とです。これは、統計的に意味
のある差があったというふう
にお考えください。仕事ができ
なかったということと、主要道
路の除雪が進まない、というよ
うなことが男性の方では高く
なり、女性の方では不安という
こと、これが男性より高かった。
ただこれも、男性が先天的にこ
ういうふうなことを感じやすい
とか、女性が、もともとこうい
うふうに受け取りやすい、とい
うのとはちょっと違うだろうと
みています。やはり、その方々
が置かれた社会的な立場が異な
っているがゆえに、こういう帰
結をもたらすのではないでしょ
うか。

参考までに、仕事ができなか
った、という困りごとについて、
男性と女性というだけで区分し
てみるとこのような結果なので
すが、例えば現在仕事を持って

いるかとか自家用車を持っているかといった要素を考慮に入れてみますと、この仕事ができなかったことに関する男女の差というのは統計的には意味のない程度に小さくなってしまいます(山口, 2017:188-189)。ということは、当然ですが、男女差よりも仕事を持っているかといったことの方が仕事ができないことで困る影響は大きいのだということになると思います。

よく一般に言われていることとちょっと様子が違っていると思ったことは、年代別に見てきたときであります(グラフ5)。一般には、災害の被害というものは、小さな子どもや年配の方に非常に多く見られるものと言われることが多いです。行なった調査では困ったことそのひとつひとつの内容についてどれくらい困ったか、例えば家から出られないことでどのくらい困ったかということまでは調査が及んでいないので、そこは今後きちんと考える必要があります。しかし、困ったことの項目数を足し上げて平均をとってみますと、世間でよく言われる、年配者が困ったであろうというのとは違う結果になります。これは何でしょうか。こういうのを考えるのが研究の興味深いところですね。40代、50代がポコンと増えています。ということで、年配者、中ほど、若い人ということで3つに分けて分析をしてみました。

60代以上の人の回答を表すのが白い帯で、20歳から59歳までの人の回答を表すのが黒い

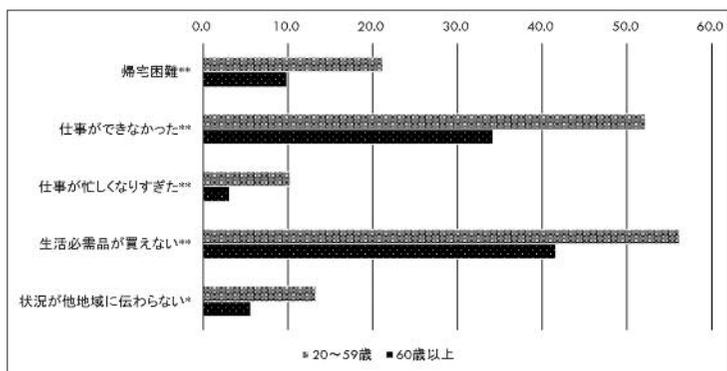
帯です(グラフ 6)。60代以上というのは、先ほどのグラフからわかるとおりで、統計的な有意差が見られたものだけに限りますが、全体に他の年代と比べると困ったと答えた方の割合が低いのですね。このグラフに示していない、他のところ

ではほかの年代と変わらないです。帰宅困難と答えた人は低い、仕事ができなかった人も低い、仕事が忙しくなり過ぎた人も低い、生活必需品が買えないと答えた人も低い、状況がほかの地域に伝わらないと答えた人も低い。30代から若い人をピックアップしてみましょう(グラフ 7)。

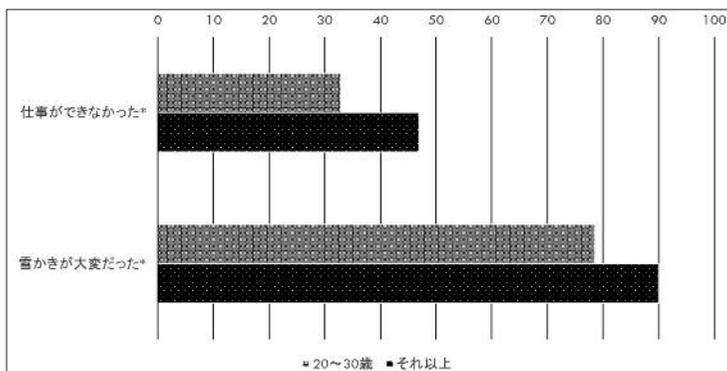
仕事ができなかったと答えた人が低い、雪かきが大変だったと答えた人が低い、それからちょっと数が少なく、30代以下から1人も回答がなかったので注意して扱う必要がありますが、病院に行けなかったと答えた人の割合も若い人では低かったです。40代、50代ではどうでしょうか(グラフ 8)。

これは他の年代と比べると困った割合が軒並み高いですね。仕事ができなかったと答えた人が高い、忙しくなり過ぎたという人の割合も高い、生活必需品が買えないというのも高い、除雪が進まないと答えた人も高い、状況がほかの地域に伝わらないと答えた人も高い、ということです。

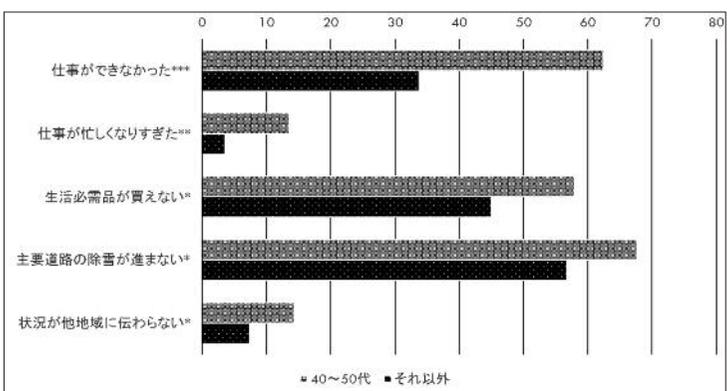
最初の方に戻って見ますけれども、考えてみますと、20代30代の若年層、それから60代70代のシニア層と比べると、40代50代というのは「忙しい」年代なのではないかと私はみています。家庭、職場、地域、そういったところで、いろいろ頼られて、雪に関しても、率先



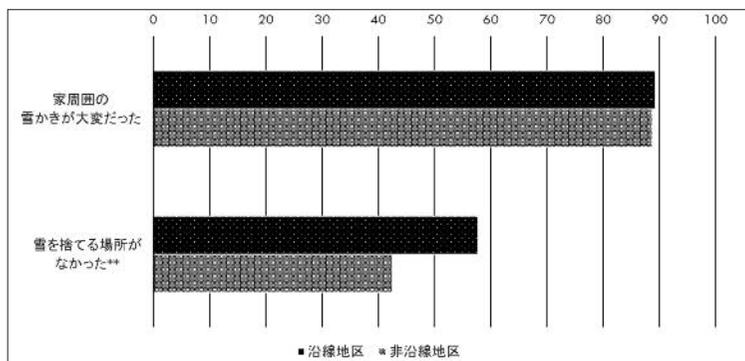
グラフ 6 年配者の認識 (%) (山口, 2017:180)
*p<.05 **p<.01



グラフ 7 若年層の認識 (%) (山口, 2017:181)
(病院に行けなかったことについては事例が少ないので慎重に解釈 *p<.05)



グラフ 8 30~40代の認識 (%) (山口, 2017:181)
(家族知人と連絡が取れないことについては事例が非常に少ないので慎重に解釈)
*p<.05 **p<.01



グラフ9 地域特性と雪被害 (%) (山口, 2017:185) **p<.01

して雪かきをされたりとかですね、仕事などでも重要な役目を担っておられたりとか、どうしてもその負担が集中してくる、そういう年代なのではないかと今のところ私は考えています。この点についてはもちろんもっと深く追及してですね、

研究を進めなければいけないと思います。

今日都留以外のところからいらした方はおられますか。何人かおられますね。ちょっとお考えください。富士急の沿線地区とそうでない地区で雪処理の大変さについて比べてみます(グラフ9)。雪による困りごとのうち家周辺の雪かきが大変だったということについて、富士急の沿線と非沿線で比べても、大変だったと答えている人の割合は同じくらい高いです。ただ、雪を捨てる場所がなかったというのが富士急の沿線と非沿線で統計的に意味があるくらい回答の割合が違ってきます。都留の人はこれは当たり前だとお考えになると思うでしょう。都留以外からいらっしゃった方、なにか、思い浮かぶことはございますでしょうか。ご意見がないようなので、都留の方に聞いてみましょうか。お答えいただけますか。東桂、谷村、禾生、田野倉の方が雪を捨てる場所がなかったと答えた人が明らかに多いです。なかなか、都留の人は近すぎてよくわからないかな。

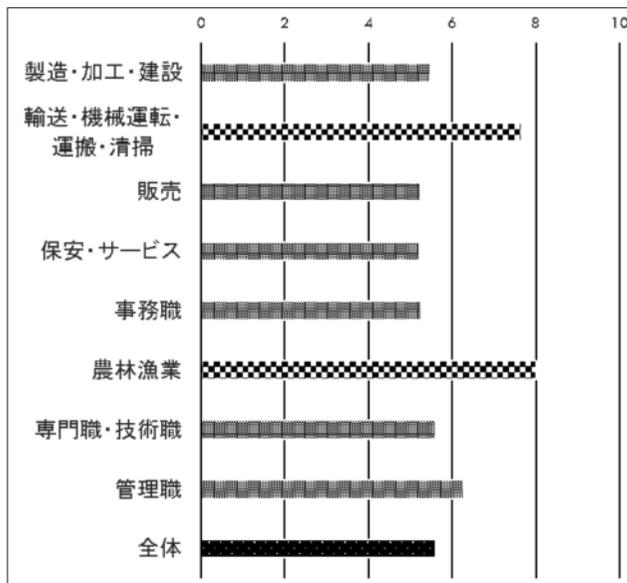
写真をご覧に入れます。こちら側(写真11)が谷村です。富士急の沿線地区ですね。こちら側(写真12)が非沿線地区の宝です。そちらから回覧するのは都留の地図です。谷村というのは谷村町の駅の周囲です。それで、宝というのは、地図の左上の比較的家があんまり混んでないところですが、お手もとにない方も後でご覧ください。谷村のような家が建てこんだ場所で雪処理するのと宝のような比



写真11 谷村地区の様子(写真 山口)



写真12 宝地区の様子(写真 山口)
(山口, 2017:176)



グラフ 10 現職がある人の雪認識 (山口, 2017:182)
 (雪で困ったこと/暮らしや建物・設備への被害項目数の平均)
 $p < .05$

較的広い空間がある場所で雪処理するのとは、その大変さは違ってきます。沿線地区は家の建てこんでいる地域が少なくないということだと思います。こういうのもアンケートでわかるんですね。現地の様子はそこまで行ってみればすぐわかるのですけれども、行ったことがないと、なぜ同じ市内で雪処理の大変さがこれほど違うのか分からないかもしれません。

続いて職業別にいろいろ見てみましょう (グラフ 10)。後に見ますけれど、農業関係者は、都留では軒数が少ないので慎重に扱わないといけません。輸送機械運転・運搬・清掃関係の方々と農林漁業の方々と、

被害が大きくなっています。輸送・機械運転・運搬・清掃関係の方々とともに農林漁業関係の方々の被害は大きかったと見てもいいのではないかと思います。農業関係者について後からひとつ聞きとりの結果をご覧に入れます。一点、ご注意をお願いしたいのは、山梨県では非常に農業が盛んだという見方があります。それは、全県を見渡しているゆえの見方です。ところが、この都留のあたりというのは農林漁業に関わる方々の人口の割合というのはかなり低いんですね。2010年の国勢調査で1.4%くらいです。これが、例えば勝沼を擁する甲州市では農林漁業従事者の割合が23.2%と都留近辺とは全然違うんですね。地域構造がまったく異なります。こういった地域性の違いがあるところで、同じように雪が降ったとしても、それぞれ出てくる被害の様子はおのずと変わってくるであろうということで、細かく見ていかなければいけません。最初の話に戻りますが、類似のハザードであっても、ディザスターがどのようなものであるかは地域の事情によって異なるということでしょう。

当然ながら、都留で農業を営んでいる方に被害がなかったかということはないんです。大被害です。ちょっと長くなるけど読みます。「去年の2月14、15日あたりに大雪が降った。積算で1メートル40センチくらい降ったと思う。ひとつのハウスのほうでは、雪をおろすところがなくなってしまうような状態になった。もうひとつのハウスの骨に使用しているパイプが22ミリと太く、また大雪を予期して内部に雪の重みを支える棒を入れてあったので、そちらに登って雪を移動させるような格好になった」(山口, 2017: 183)。ということで、雪をどけないと、ハウスがみな押しつぶされてしまう、ということですね。次のところですが、「夜も雪下ろしをしたり、電熱を入れて少しでも融かそうと試みたりしてみたが、結果的に言えば雪の重みが出てくるほうが早く、どうしようもなかった。少し食事に行っている間に、どさっと音がしてダメだと思って見に行ったら、雪でつぶれてしまっていた」(山口, 2017: 183)ということ。大被害であります。ただ、都留では、こういった農業に携わっている方が国中と比べるとずいぶん少ないので、同じように被害を受けた農業関係者であっても、被害が表面に

出づらいといえますか、そういった声がなかなか地域の中で表面に出てこない傾向はあるかもしれない。こういうことが、地域構造から言えるのではないかと感じています。最後の結論の方に参ります。

ここまで様々なこととお話してきました。雪というのは誰にでも平等に降るものだ、という言い方がありますが、今日の話ではこれは違うということになります。積雪の深さだけみれば同じところにはだいたい同じくらい降るのかもしれませんが、その被害も万人に同じとは言えないのですね。もちろん雪は自然現象なのですけれども、それがどう感じられるか、どうとらえるか、これは、その人の立場、社会的属性と申しますけれども、社会的属性によっていろいろ異なります。

先ほどいくつかグラフをご覧に入れました。大規模な災害では年配者や子どもに被害が集中する傾向があると言われますけれども、2014年2月豪雪ではちょっと違うかもしれません。それはもちろんその災害の程度とか範囲とかいうものを色々加味して考えないといけません、今回の調査データを見る限り、被害や雪によって困ったことが年配者に集中しているとまではいえない。そういう可能性を考える必要がありそうに思います。それから、都留市の地域特性を考慮して、例えば、農業に関わる人が少ないであるとか、地勢がこういったものであるということも考慮して雪害を深くとらえる必要があるだろうと思います。

また、地域というものを見ていくときに年配者に焦点を合わせる人が多いように思います。しかし同時に地域を支えている主力の年代のひとつであります、40代、50代前後、そういう人たちの職業生活とかライフコースとか地域社会での役回りなどを考慮して、いろいろ研究を進めていく必要があるのではないかと考えています。

研究というのは、大変時間がかかります。ですので、追って成果を発表していきたいと思えますので、今後ともよろしくお願ひしたいと思います。最後に今回調査にご協力くださった都留市民の方々にお礼を申し上げたいと思えます。また特に断りがない限り、報告で示されたグラフや語りは、私が都留文科大学の紀要に書いた論文（山口、2017）の中におさめられています。それから、都留文科大学の研究費を使ってこの研究を行なっていますので、それについてもお礼を申し上げます。私の報告は以上です。

小 林

どうもありがとうございます。それではここで、10分ほど休憩を入れたいと思えます。

参考文献

- ・高倉浩樹, 2012, 『『とうしんろく』の経験：個人的・主観的な体験と記憶の価値』, 東北大学震災体験記録プロジェクト（編）, 『聞き書き震災体験：東北大学90人が語る3・11』, 新泉社.
- ・山口博史, 2015, 「2014年2月山梨県豪雪被害と地域社会の対応：都留市住民に対する聞き取りからの予備的考察」, 『都留文科大学研究紀要』, 82:85-98.
- ・山口博史, 2017, 「2014年2月豪雪と住民の被害経験：都留市民への量的調査の結果から」, 『都留文科大学研究紀要』, 86:175-190.

小 林

お待たせしました。それでは後半にうつらせていただきます。それでは次に、住民の方からいろいろお話を聞こうということで、都留市在住の教員の益子さん、それから都留市市役所企画課長の山口さんに順次お話を聞いていこう、ということになります。よろしく願いいたします。

山 口

こういう場で話せるというのは、それはそれでひとつの特技で、そういう人たちばかりではないのですね。ですので、益子さんには、私が質問をしながら呼び水を向けるような形で行きたいと思います。2014年の大雪のときはどちらにおられて何をしておられましたか？

益 子

はい、私は自宅におりました。下の子どもが大学生で、友達と京都の方に夜行バスを使ってでかけていて、帰ってくる前の日にあの大雪でバスが運行しなくなった、ということで、泊まる方がいいか、それとも、新幹線で帰方がいいか、という相談の電話がありました。まあ帰れるのなら、新幹線で帰ってくれば、と言ったら、お金を送ってくれって言われたんです。(笑い)それは無理、それができるくらいだったらこんなに止まったりしないよ、なんて言いました。じゃあカード使っているか、って言うから、どうぞお使いください、ということで、たまたま友達が東京に下宿していたもので、彼女は電車が動くまでそちらに一週間ほど泊めていただいて、バイトにせつせと励んでいたようなんです。上の子どもはもう勤めておりましたけれど、仕事がIT関係だったもので、会社に行かなくても企画書とかがどんどんメールで送られてきて、本人は会社にいるより忙しいってぶつぶつ文句言いながら仕事をしておりました。ただ、今回は3.11のときと違って水道・ガス・電気が全部使えたので、わりと心穏やかに暮らせたというのがあります。一番困ったのが、外に出られないので周りの状況が全然わからないということです。

私趣味に買いだめがあるもので、食べるものも一切困らなかったし、うちのガス屋さんというのがとても気の利く方だったので、雪が降りそうというと、ガスとか石油を前もって補充しておいてくれたので、そういうものも全然困らなかったです。一番困ったのが、犬だと思いません。外に出られなくて。

私前の晩に朝出かけられないと困ると思って一応雪をかいておいたんですね。で、次の日の朝に玄関を開けて、とびあがりました。こんな雪みたこともないって感じで。ただ、車がつぶされちゃ困るので、車のそばまでは何とか雪をどけていって、車の雪下ろしだけはしました。そしてまわりをかかかないとドアも変形してしまうからというものもあったので、そこだけはして、あとはずっと家に籠っておりました。で、近所のおじさんが心配して、生きてるか一つて様子を見に来てくれまして、それから、少しずつ周りの方と協力して、雪をかいたんです。たまたま私の駐車場の後ろ側に畑があったので、そこに積みあげることができましたけれど、それでもすごい量だったので、雪の持っていき場所にとっても困りました。

うちのまわり、ちょうど国道へ出るまでに家が5軒あるんですね。その中で私が一番若いんです。あれからもう何年かたっているわけですから、今度大雪が降ったら、どうしようか、私ひとりじゃとっても無理という思いがあります。友達から後で話を聞いたら、やはり自分の家

の周りがお年寄りばかりで、業者の人を頼んだら、本当に人が歩けるだけの道路をかいでもらって、1軒1万円ずつ取られたという話も聞きまして、えーどうしようと思いました。

山 口

ありがとうございます。ちょっといくつか教えてほしいのですが、お金を送ってほしいといわれたときに、なぜ送れなかったのかというところをもうちょっと詳しくご説明ください。

益 子

うちから4、5軒先に郵便局があるんですけども、雪が多すぎてその郵便局までたどり着けなかったです。私の胸のあたりくらいまで雪があったので、もうこれは絶対無理だって、あきらめちゃいました。

山 口

通れるようになるまでどれくらいかかりましたか？

益 子

1週間くらいです。

山 口

1週間くらい。大変でしたね。あとご趣味が買いためというお話があったので、普段からいろいろ備えられて買いためることがおありということですね。

益 子

そうですね、なんか1個なくなると補充しとかなきゃって気持ちが強いもので、ちょっと収集癖があるのかもしれないけれども。冷凍食品とか、それからいろいろなもの、乾電池なんかも1つ使うと1つ必ず補充するっていう。そういう意味では、それが今回は役に立ちました。

山 口

面白い視点ですね。あとは、雪には泥とか石とかくっついていると思うのですが、畑に積み上げられた後でお困りになったりしなかったのでしょうか？

益 子

しました。でもほんとに表面に歩ける範囲までの雪をそちらにやって、積み上げられるだけ積みました。

山 口

なるほど。ご近所の様子はいかがだったのでしょうか？

益 子

入口のところのおうちとは大変親しくしていたもので、そこのおじさんが、私は何日も顔を

出さなかったので、心配して様子を見に来てくれました。

山 口

普段から行き来はある方ですか。

益 子

そうですね。たまにお茶を飲みに行ったりとか、そういう関係だったので、よかったと思います。

山 口

その他ご近所の方から世話をされたりとかあとお世話をしたりとかそういうことはあったのでしょうか。

益 子

お世話はされた方です。やはり女一人で大変だろうという思いがあったのか、両隣のおうちとかが、一生懸命雪を掃くのを手伝ってくれたりして、なんとか車を出せるように手伝ってもらいました。

山 口

車でも出られるようになったのは、1週間よりさらに後でしょうか。

益 子

後です。はい。私の仕事がスクールカウンセラーなので、富士急行線が動かない限り学校はあり得ないので、私もお休みになりました。しばらくは車が通れるようになっても仕事場まで電車で通いました。

山 口

それはどうしてですか？

益 子

ちょっと怖かったからです。

山 口

下が凍りついているから、もしくは道が狭いから、いろいろな理由がありそうですけれども、いかがでしょうか。

益 子

両方ですね。当時私の仕事現場が全部河口湖だったもので、ここよりさらに雪が多かったので、無理をするのはよそうと思ひまして、河口湖まで電車で通って、そこから先はタクシーを使いました。

山 口

なるほど。公共交通機関の電車が動き始めたのはかなり後でしたね。

益 子

かなり後でした。家が富士急行線のそばだったもので、ちょうど高架にあたる所の雪をかくので、夜中おじさんたちが話をしながら通ったりしているのがよく聞こえました。

山 口

そんなに頻繁に雪を掻いていましたか。

益 子

掻いていましたね。最終的にそれに懲りたらしくて、富士急行はラッセル車を買ったと聞いています。

山 口

ニュースで見ましたね。ありがとうございます。そのほかお困りになったことはどういったことがあったでしょうか。

益 子

やっと出られるようになって外に出てみたら、庭の池にすごく雪が積もっちゃったので、息ができなくて鯉が何匹かやられたり、それから庭木が折れていたり、それから家の駐車場に停める前に、車を止めさせて頂いたお宅が半分倒壊していたりとか、そういうのを見てびっくりしたのと、スーパーに行っても棚に何もなかったというのがびっくりしました。

山 口

ちなみにスーパーに行かれたのは何日くらいたってからでしょうか。

益 子

1週間くらい経ってからだと思います。

山 口

1週間くらい経った時点で行ったら生鮮食品はもとより保存食品も何もないような様子でしたか。

益 子

そうですね。残っているのはお砂糖とかそういう物でしたね。

山 口

その間、買いだめをされていたということですが、買いだめの分で回るような状態でしたか。

益子

はい。何とかまかかっていました。ただ、生鮮食品は困りました。

山口

ちなみに、その時の食事でこれが1番欲しかった、というものは何がありましたか。

益子

やっぱり野菜が欲しかったです。

山口

野菜は供給が滞ると、どんどん無くなっていきますからね

益子

無くなってしまいますね。

山口

なるほど。庭の池の鯉とか庭木に被害があったというお話でしたが、家屋に被害は無かったですか。

益子

築50年の家なのですけれど、その割には被害がなくて、それは助かりました。

山口

なるほど。雪全般についてですが、雪が過ぎ去ってから、平常の生活に戻るまでどれくらいかかったのでしょうか。

益子

やっぱり3週間くらいかかったと思います。

山口

それはどういう影響がどの時期どの時期で出てきたもののでしょうか？

益子

最初はもうとにかく、この量の雪は搔けないと思ったから、家に閉じこもってテレビを見ていました。それから意外と県外の友達や親戚から、お見舞いの電話がたくさん入って、その対応が大変でした。で、荷物を送ろうかって言うから、送ってくれて届くなら、表に出ています、っていう話をしました。

山口

実際届くような状態だったということなののでしょうか。

益 子

届かないと思います。

山 口

多分送ったとしても届かないからって元の送り主に戻ってしまうような状態でしょうか。

益 子

たぶんそうだったと思います。

山 口

その後、どのように展開していったのでしょうか。

益 子

そのあとは物流が動くようになってから、雪見舞いをいただきました。

山 口

物流が動くようになったところに、特にこれは参ったな、ということはありませんか。

益 子

動くようになってからは、ちょっとホッとしました。で、ますます買いだめがひどくなりました。

山 口

先ほどグラフで皆さんにご覧に入れましたけれど、その前の週にも降っていて、それで大雪が来たので、もう一度降るのではないかという懸念がおりになったということですかね。

益 子

そうですね。だからテレビで弾丸低気圧って聞くと、ぞくっとします。

山 口

あの時は盛んに弾丸低気圧みたいによく言っていたわけですか。

益 子

そうです。

山 口

3週間のうち2週間経って、最後の1週間はどのような格好で過ごされたのでしょうか。

益 子

最後の週の頃は、やはり仕事にも行かなくてはならないので、電車を利用して外に出て、都

留文科大学前駅で降りて、その頃はもうオギノとかおかじま食品館も品物がある程度揃ってき
ていたの、買いながら帰りました。

山 口

普段と比べて、公共交通機関の電車に乗っている人は多かったですか？

益 子

多かったです。富士急行線はわりと災害に強い電車というイメージがあったので、ああ富士
急行線も雪にはダメかって思いました。

山 口

具体的にいうとどれくらい乗っていたのでしょうか。

益 子

倍くらい乗っていたと思います。

山 口

席が全部埋まってしまうような状態ですか。

益 子

そうですね、そんな感じでした。いわゆる通勤時間帯というのは、普段は学生が主体ですけ
れど、そうじゃない方もかなり乗っていたと思います。

山 口

そうじゃない方も、ずいぶん公共交通機関で行かれたということなんですね、その時は。確
かに富士吉田の方に向かうときは暮地の坂がありますからね。

益 子

あれは無理だと思います。

山 口

あれを車で登るのは、特に雪の中、容易ではなかったということでしょうか。

益 子

みなさん暮地の坂、暮地の坂っておっしゃるけれど、実際は、十日市場の坂の方がカーブを
していて、上りにくいんです。

山 口

あっ、そうなんですか。(笑い) 実際、ちょっと話が飛んでしまいますけれど、都留にお住ま
いの皆さん、私は十日市場の方が長いという印象がありまして、そこまでは細かく見ていなか

ったんですけれども。いかがでしょうか？坂について、どちらが登りにくいかご発言いただければと思います。

杉本（都留文科大学特任教授）

いいですか？

山口

はい。

杉本

私はその十日市場の坂の真ん中に住んでいるのですけれど、(笑い)、確かにあそこに止まる車が多いのですね、曲がれなくて。特にチェーン巻いていないトラックとか冬のタイヤじゃないトラックが頑張ってるヨロヨロしながら登っていく途中で止まっちゃう。そして、ずっと繋がっちゃう例が非常に多い。今はね、雪が降った時に早めに道路を封鎖しますと書いてありますけれども、あれは多分、あの時の教訓なんじゃないかなあと思うんです。意外と雪を甘く見ている人たちが多くので、そういう現状が無くなるといいなと思います。

益子

パッと見にはそんなに急じゃないから大丈夫な気がしちゃうんですね。

山口

私暮地の坂は歩いて登ったことはないのですが、十日市場の坂は歩いて登ってみると、けっこう堪えますよね。だから傾斜が相当あって、長いという印象があります。先ほど統計などを参照しながら、細かい地域性がどうなっているかということ調べるのが大事だというお話をしましたけれども、たぶん統計では捉えられないくらいそういう微妙な地形というのが、最近NHKなどでその手の番組が非常に人気と聞きますけれども、微妙な地形が人の暮らしに与える影響は大きくて、それによって暮らしが相当規定されているところがあるので、災害の時にはそれがはっきり目に見える、ということになるのではないかと思います。後、最初にご発言になられた、除雪に1軒1万円でしたか。

益子

はい。びっくりしました。

山口

それはどれくらい雪かきをすると1万円ですか？

益子

5軒お宅があったそうなんですけれども、大きな通りにつながるところまでだから、時間と雪の量を考えると妥当かな、とは思いますが、3時間か4時間掛かりますからね。でもやはり、年金で生活しているからきつかった、とおっしゃっていました。

山口

その他、そういった雪処理の相場についてどなたかご存知の方があつたらお教えいただきたいと思いますがいかがでしょう。私は先ほど雪の多くない地方の出身だと申しましたが、あちらでは雪かきをそこまでやらないんですね。おそらく翌日にはほとんど溶けてしまうので、そこに力を使うより、別のことをした方がいいというような格好だったと記憶します。こちらに来て私が非常に驚いたのは、雪が降ると立ち所に除雪車が来るというのは、いわゆるそれについても都留市民の中でいろんな声があるというのは知っていますけれども、除雪車が来るといっただけで、雪があまり降らない地域から来ると、びっくりです。ですので、こちらの方が寒いのだなというのが実感です。まあでもその除雪車の来るところまでつなげるのにも、その手間賃を支払わなければいけないということですね。

益子

そうなんです。

山口

難しいですね。

益子

ただその時に文大生が、あその三ノ側公園のところを除雪してくれていたのを見て、ああ、こういう人たちに頼めばもっと安くやってもらえたかなーって（笑い）思いました。

山口

文大生というのは、山梨県人率 10%強で全国から学生が来ておりますので、雪に非常に強い地方から来ている学生たちは雪処理の仕方も堂に入ったものではないかと思うのですが、ただ文大生は都留全域に住んでいるわけではないですね。この谷村周辺と、ちょっと東桂地区にいるかなというような格好です。都留市全域に雪かきに行くというには、なかなか、あのと移動が難しかったですね。

益子

そうですね。

山口

当時の学生は、もう皆卒業してしまっていますね。私もそういうことがあったということは、時々耳にしています。それは私が都留文科大学に勤めているからみんなそうやっておっしゃるのかなと思っていたんですがそういうわけではないのかな。

益子

そういうわけではないと思います。結構楽しそうにやっているのが目立っていました。（笑い）

山 口

まあ都留市としても雪に関する経験というものを、文大生から吸収していくというのもひとつ大学と地域の関わり方として面白いかもしれませんね。

益 子

そうですね。だからもうちょっと他のところにも入ってくれるといいな—なんて思ったりしました。(笑い)

山 口

ちょっと無理すると心配ですが、若いから元気でやっているのも、そのあたり上手くやれると良いのではないかと思いますね。いくつかあと質問をして、終わりにしようと思います。大雪の被害の後、心がけるようになったことはございますか？

益 子

やっぱり家族間の連絡をとる方法をちゃんと確認する、ということと、NTTの災害用伝言ダイヤルですか、あれを勉強しました。

山 口

なるほど。雪予報が出た時にスーパーに買い物に行きますと、若干スーパーの人出が多いような気がするんです。

益 子

そうですね。あれからみんな怖いと思っています。

山 口

みんなあれは気を回して買いに行くのでしょうかね？

益 子

いや、もし無くなったらって思うと、パンとかが一番先に無くなりますから、買います。

山 口

それは、雪のあと顕著にそうなのか、もともとそういう習慣だったのか、どうなのでしょう。

益 子

雪の後の方が顕著だと思います。

山 口

ありがとうございます。まあ、そういうことでひよっとするとその地域生活に多少の影響を与えているのかもしれない。

益子

そうですね。あの何もない、開いてはいるのだけれど、棚ががらんと空いている状況っていうのは、やっぱり異様です。

山口

これは益子さんにお伺いしてもちょっと何ともならない質問だと思うんですが、何を売っていたのですかね、その状態で。

益子

なんでしょうね（笑い）

山口

調味料とか。

益子

そうですね。醤油のようなものは並んでいたし、若干入ってくるものもあったようなんですけど、入るとすぐに無くなってしまいうってスーパーの方はおっしゃっていました。

山口

さっきからスーパーの話が中心ですが、（笑い）燃料とか、その手のものはあんまり欠乏をきたしたということはなかったですか。

益子

うちの場合は、さっきお話したようにいつも購入する業者の方が、雪の予報が入ると、前日に必ずプロパンガスの様子を見てくれて、石油を運んできてくれるので、それは心配しなかったです。

山口

あの雪の中で燃料がなくなったりすると大変ですものね。石油とか、プロパンは比較的こう一か所に固めておけるから、いいのでしょうかね。

益子

そうですね。この地域は昔から寒いので、今はもう禁止されているのですけれど、昔は、家にある大きい石油缶で買っておくって習慣があったので、そういう意味では、わりと備蓄しているのではないかな、と思います。

山口

はい、ありがとうございます。それから最後に、今までの質問とは変わった具合のことを伺って終わりにしたいと思います。この雪害以前に、この手の大きな災害が都留であったというお話は聞かれたことはあったでしょうか？雪に限らず、他のことについても。

益 子

災害というよりも、私が幼稚園生くらいの頃に、谷村の大火というのがあったというのがひとつあるのと、それから、もういま生きていけば100歳くらいになる母たちに、昔、長安寺さんの裏の山が崩れてうちのお墓が下に来たんだよってという話も聞いたり、それから、田町の坂のところの山も、昔崩れたって話とかは聞いたことはあります。

山 口

急傾斜地が多いから、山崩れというのが時々あるんですかね。

益 子

山崩れは多いのだと思います。

山 口

谷村の大火は事例が大きいのですが、それと比べてもこの大雪は、経験の無いようなものだったと見てもいいのでしょうか。

益 子

そうですね。子どもの頃、降っても50cmくらいだったと思います。都留文科大学の今は公園みたいになっている、小さなピーヤのある所で、私たちは子どもの頃にスキーをした記憶があります。

山 口

まだ、都留文科大学の建物があそこに無かった時代ですか？

益 子

無かった頃です。

山 口

それくらい降ったと。

益 子

だから、全然降らなかったわけではないと思います。

山 口

積雪量というのは、時代ごとにいろいろ記録が残っていたりするのですが。ただ、100cmを超えるような雪はね。

益 子

雪は初めてです。

山 口

どうもありがとうございます。(拍手)

小 林

それではここで、10分間の休憩を入れたいと思います。益子さんどうもありがとうございます。

小 林

それでは時間になりましたので、都留市市役所の方からお見えになりました、企画課長の山口さんの方からパワーポイントを使って、お話をいただきます。よろしく願いいたします。

山 口

こんにちは。ご紹介に預かりました、総務部企画課の山口と申します。当時は総務課、行政管理課って名前でしたけれど、行政管理課の法政安全室というところで、防災を担当しておりました。その時役所にいた私たちの立場で、役所から見ていて起きていたこととお話いただければという願いを受けましたので、今日は来させていただきます。

山口先生と都留市役所の事業で、事業評価提案会といったもののコーディネーターをお願いしていることもありまして、そういうご縁があって、そのお願いした日の帰りに今日の話ができないかといわれたので、ちょっと断れない(笑い)タイミングでのお願いだったので、今日は万難を排してきたんですけど、市役所の中でどんなことが起きてたのか、我々がどんな動きをしていたのか、それはまあ反省のことも含めて、ひょっとしたらこんな話をしたら、皆さんの中ではなんでもっとしっかりしなかったんだっていうような感想をお持ちになる、かもしれませんが、私もちょっとその4年前の記憶をなくならないうちに、年に数回、先生とこういうお話をさせていただいたりして、記憶が薄れないうちに、何かしら記録としてまとめられればいいのか、と思っております。まあ、そういう意味でも、あれ以上の雪はしばらく降らないことを祈って、今日お話をさせていただければと思います。

普通はですね、我々が災害っていうと、まあ、地域ですね。これ、地べたっていうか、場所の話っていうふうに考えていただいてもいいです。で、住民の方々が普通の災害で、まあ、避難してる。皆さん災害のときに、避難っていう言葉をよく聞くかと思えますけれど、この住民の方々が、避難をするっていう、ことですね。こういう関係性が、基本的にはあります。この街中で起きていること、ある地域で何かが起きる、そして、住民が避難者になる、で、役所の中で、本部として、災害対策をしていくっていう、こういう関係性が普通はあります。で、その中で、まあ地域でいえば、自主防災会であり、消防団であり、もっと言えば事業所であったり学校であったり、そういう組織、人の繋がりがあって、ま、これは個々の家庭とか、人っていうふうに考えていただければいいと思いますけれども、一般的にはこれがあって、まあ県と広域であれば県と連携をしてくっていう関係性があります。で、今日の前提は、まず、そこにこういう帰宅困難者っていう、我々が、災害、まあ30数年役所にいましたけれど、こういう概念がまるっきり、災害という中に無かったですね。観光地ならありますけれど、この街で帰宅困難者がおきる、まあ、東京とかのもうほんとに公共交通が発達していて、全ての、ほとんどの人がそういったもので動いているっていう街は、あるのかもしれませんが、この

街において帰宅困難者っていう、定義概念がまるっきり我々の中にはなかったっていう、これが、今日の話の前提になるのかな、というふうに思います。

まず、我々が役所の中で何をしていたか。14日の金曜日です。世間はバレンタインデーでした。あとはソチオリンピックですね。日本中で羽生君が金メダルだとかそういう話をしていました。あとは受験シーズンですね。当時そういう、世の中の動きというのがあったように覚えています。

この街にとっての災害というのは、さっき山口先生のお話にもありましたけれど、基本的には、やはり台風、大雨、それと土砂災害が、一番身近に感じている災害だと思います。私は3年間防災の担当をしていたのですけれど、1年目に、移動してくる前の月に3.11がおきました。で、避難の方々の対応を経験して、その9月にですね、台風が2回来たんです。台風12号と15号が連続できました。で、その時に、都留市は初めて災害対策本部を立ち上げました。実はこのエリア、すごく雨が降りました。で、都留文科大学のことが全国に放送されて、親御さんから、うちの娘は息子は大丈夫なのかっていう電話を、非常に多く受けました。その時に、楽山にあるアパートのところが裏山が崩れて、ガラスを突き破って怪我をされた方も実際にいたりしました。この街で災害というと土砂災害、先ほどの3.11等を踏まえた地震、あとは最近でいうと富士山噴火ですね。この3つが自然災害という意識としてあったのだと思います。で、それらの災害でいうと人的な被害ですとか物理的な被害ですね、何かがこわれた怪我をした、そういった事ならあるのですけれど、今回の雪害というのは、先ほどの先生の話だとやはり機能に障害が起きてしまう、そういうことが非常に他の災害と違うのかな、と思いました。

で、もう1個びっくりしたのが、モスバーガーのところに鹿が出たっていう話があったことです。そんなことあんのかって、見間違いじゃねえか、トナカイじゃねえかっていう話もあったくらいで。(笑い)2月の14日にトナカイは出ないですよ。我々は中から聞いていただけなので、半分朦朧とした人が言っていたのかもしれないですけど、鹿が出たって、まあそんな話もありました。たぶん野生動物にとっても想定外のことが起きていたのかなと思っています。

あとは10年に1度の寒波が2週間連続。これ、前の週に実は50cm位の雪が降ったんですね。それも実は10年に1度の寒波だったんですね。30cmから50cmぐらい降っていて、確かその時は学校も1時間遅れか2時間遅れになったと思います。その時にですね、実は数年ぶりに豪雪対策本部を市役所で作りまして、小学校児童の対応ですとか、ごみ処理の対応ですとか、高齢者は大丈夫か、という対応をやりました。

で、実は20年前に同じような大雪が成人式の日にありました。それで成人式の時に成人式が中止になってしまったので、先日、20年後成人式というのを40歳の方々が成人式と同じ日にやりました。親子で成人式を同じ日にやった人もいるということで、新聞などにも取り上げていただきました。

その大雪が確か平成10年、私が市役所に入って、1番大きかった。今回の雪以外で言えば、あれが1番の大雪でした。あの時も確か前に降った分がまだ無くならないうちに続けてダーツと降ってしまって、あの時、実は降った翌日が日曜日で役所に日直でいたのですが、「殺す気か」なんていう電話が来たりしました。(笑い)あとは、当時あったピザ屋さんから「雪が店の前があると、営業できないので道に出しておきました」って電話があったりして、何を考えているのかな、と思った覚えがあります。そのくらい多分雪ということに関して慣れていない。先ほ

どの質問もそうですけれど、除雪といっても、避けるだけなのですね。で、今回の雪で初めて排雪、要は雪捨て場ですね。そういったことを、考える必要があるというのが出て来るのだな、とその時本部にしながら思いました。

住民の皆さんの中で、その時すぐく命の危険を感じた方もいらっしゃると思います。丈夫な家に住んでいる方は良かったかもしれませんが、本当に家が壊れるんじゃないかって電話をかけてきた一人暮らしの高齢者の方もいらっしゃいました。後は屋根がみしみしいついているとかまだ雪が降っているのだけどどうすればいいとか、どこに逃げれば良い？外はもう雪で動けない、動けないって言われたらじっとしててくださいとしか言いようがないんですけど、まあ、そういった声に対して丈夫なところにいてくれとか、狭くて崩れないようなところにいてくれとか、声をかけられる人が近所にいたら声をかけてくれ、というような対応をした覚えがあります。

さっきスーパーの話で盛り上がりましたけれど、食糧の話ですね。食糧は、当時は調味量ぐらいしかなくなったとか、野菜でいえばセロリぐらいしかなくなったとか、その時に、やっぱりセロリってそんなに食べる人いないのかなって話を、確か山口先生の論文に載っていたという覚えがあります。あと、セブンイレブンがですね、2日後ぐらいにヘリコプターで広い土地があるところに独自で出荷をしてきた。もう輸送が途絶えていましたので、セブンイレブンだけはさすがに強くなって言った覚えがあります。

あとは燃料の話ですね。車がまだ動き出してなかったからよかったのですが、タンクローリーがまだ来られないので、動き出しのときに燃料が枯渇するのではないかという話がありました。この街は、中央道と国道を封鎖されてしまうと、出られるのが県道都留道志線だけなのですね。山の道は忍野へ行く道などがありますけれど、基本的にはやはりその道しかないというところで、そこが非常に弱いのかなと感じました。で、燃料はガソリンスタンドと協定を結んでいまして、まず市役所の車で作業する車に、優先的に燃料を与えてくれと、協定を結んでいて、組合の方に言って、そのお願いを確認しました。それをやらないと、例えば除雪車が動けないとか、役所の車、警察の車、消防車が動けないということがあっては困るので、そういったことを直ちにやった記憶があります。

後は命の危険というと、通院ですね。実際に透析をされている患者を乗せて救急車が河口湖まで行ったとか、当時都留市立病院は産科分娩をしていませんでしたので、出産間近の方を日赤まで連れていったよ、という話も伺いました。

都留市では毎年地域防災計画をつくっているんですが、これの一番弱いところは、今BCP(ビジネスコンティニューイングプラン)といった、実際に被害が起きた時、何を一番最初に優先してやっていけばいいんだという、防災計画よりも先のもっとリアルな計画が非常に取りざたされていますけれども、そういった所ですね。そういう意味では、職員自身も被災者になってしまうということですね。

あの雪は金曜日の夜に降り出したんですね、さらに。ですから、土日休みになってしまうって前提だったんですよ。で、我々も前回の雪が残っていて、さらに金曜日に降り始めた。もう当然帰れずに、建設課の職員や我々はずっと残っていた。30分ごとに窓の外を見るとどんどんどんどん積もっていて、これは本当に降っているの？というくらい、もうどんどんどんどん積もってきました。ですから、職員自身も帰れなくて、立ち往生のいた方の中には職員も数名入っていたということも伺いました。

で、先ほどお話しした帰宅困難者ですね。まるつきり我々の中に定義も概念もなかったもので

す。もちろん言葉としては知っていましたけれど、帰宅困難者が発生してしまった。これは主に車ですね。なぜ発生してしまったか。もちろん夕方、帰る車が動けなくなったということもあります。実はあの時、10か所避難所を開けましたが、すべて、いつも市がいわゆる避難所として指定する避難所ではない、道沿いの公共施設でした。というのは、消防署に、トイレ貸してくださいというようなことを言うてくる人たちが来始めて、夜になっても動けなくなった。普段は学校を避難所に指定して公開していますが、そんなところまでとても動けない、道沿いの車の中にいらっしゃった方が、避難するということ前提の避難所です。ですからまるつきりもう、我々が普段想定している避難所ではない、対応をせざるを得なくなった、ということがおきました。避難所として消防署や市役所に泊まっていただきましたし、まちづくり交流センターにも、泊まっていただきました。国道沿いの禾生コミュニティーセンターですとかそういうところを開いてですね、臨時的な避難所として対応してもらいました。その時に約300人の方が避難したわけですが、県内の方や市内の方はほとんどいませんでした。10数名ですね。で、県外が150人とかだから、3分の1以上が県外の方でした。なぜ、県外の方だったかという、これ、数日後にNHKのクローズアップ現代で都留市の事をちょっと取り上げていただいたんですが、実は中央道は東京方面で中央道へ車を乗せていたんですね。車を乗せていたくせに、我々からするとこういう言い方になってしまうんですけど、くせに、笹子トンネルを抜けさせなかったんですね。全部降ろしちゃったんでよ。降ろしたらどうなるかといえば、当然、降りたあとは国道20号を上がっていくか、この都留市を上がっていくかしかないわけです。それで、ほとんどの方が、もうどうにも身動きが取れなくなるし、雪はどんどん降ってきた、という現実がおきました。車がまず物理的に動けない。で、情報が少ない。皆さんラジオとか、当然携帯電話とか持っていますけれども、バッテリーを充電する物を持っていたかどうかわかりませんが、とにかく動けないから、じゃあ避難所に移動するか、食糧が大変だ、トイレが困った、とかっていう話がある。情報がありませんから、まず、SNSですね、私はあまりやったことがなかったんですけども、とにかく、職員でtwitterをやっている人間がいればどんどん情報を発信してくれと。もうこういう時は目の前にある情報をどんどんどんどん発信してくれということをお願いしました。後は、防災無線を流したときに、その文面をテキストで、市にメールアドレスを登録している方に送信するというのを、ちょうどこの大雪の数か月前から始めていました。それは、台風12号15号の教訓であったり、3.11の教訓であったりします。防災無線の中身がわからない、だったらメールアドレスを登録していただければメールで防災無線の内容を文章で送信しますよ、という取り組みですね。その送信した文章と同じ文章を市のホームページにあげておけば、情報をインターネットで検索すると引っかかるんですね。そんなことで、どんどん防災無線の内容を流しました。ただ困るのは、登録している人しか情報を拾えないということです。この大雪のちょうど1年前に、エリアメールというのができました。エリアメールは、当時auとDoCoMoとSoftBankですか、この3つの大きな代表的なキャリアで行っているもので、災害や避難情報がでた際に指定したエリアにおいて、皆さん聞いたことあるかもしれませんが、ピロリンピロリンって非常にびっくりする音で携帯を鳴らしてお知らせします。で、それを、災害時に皆さんに対して必要な情報であれば発信していいよという契約を市の方でさせていただきました。それがちょうど1年前で、それが大雪の時に非常に役に立ちました。ですから、土地勘のない人、市にメールアドレスを登録されていない人に対して、情報の取り方としてこうなっていますよというようなことを、エリアメールを

使って、お知らせしました。

避難された方が名簿に載っているだけで300人ですけど、車の中にいたがその何倍という方が、都留とか大月とかこのエリアにいらっしやっただと思います。実際にJRも1800人ですか、あの日、取り残されたという報道もあつたりしました。そういう意味では、多くの方が情報も少なく、土地勘もないという中で、非常に命の危機を感じたような方も多くいらっしやっただのではないのかなというふうに思います。先ほども話にありました、食糧とか燃料とかそういったこともありますし、体力的な部分や精神的な部分もあつたりしたと思います。

で、役所の中で我々が何をしていたか、役所の中で何が起こっていたかという、役所という立場ではなくて、災害対策本部の人間としてという話になりますけれど、いろいろなことが起きていました。3.11のあとに、特別警報っていう新しい定義ができたんですね。これは、運用が平成23年の8月からですが、あれだけの雪が降りながらこの時にこの特別警報が出なかったんです。特別警報を出すための定義が何かというと、数十年の1度の大雪。この定義を満たすための要件が、まず広い圏域で降っていること、50年に1度、でもう1個が1日中降り続けること。この3つを網羅しないと、特別警報を出さないという決まりがあつたらしいです。ですから、あの時大雪警報で止まっていたんですね。そんなことまったく考えないじゃないですか。あれだけの雪が降ったら、もっと上の警報が出るだろうって当たり前だに思っていたんですけど出なかった。その未発だったことがたぶん気象庁の反省点だったと思いますが、丸1日以上降り続かなかつたんですね。前の日から、朝にはもう1回やんでいるという感じ。で、この警報が出なかったというのが、まずリアルに我々の動きを鈍らせたとか判断をちょっと躊躇させたりしたところも部分的にはあつたと思います。

もう1個は、本部への動員です。先ほども話に出ましたが、職員も被災者になっているということが実際に起きていて、人員が集まらない。集まらなないと機能しない。我々は市の職員でありますけれど、災害が起きて、災害対策本部が設置された段階で、例えば企画課でいえば企画課の人間ではなくて今度は企画班の人間になる。それで、災害の中で、災害の事務文書に基づいた動きをしていかなければならないというのが、課ごとに決まっているわけですけども、まず人が集まらない。先ほど言った防災計画の何が駄目かということ、みんなが被災したらどうなるのかについての対策が一切無いんです。みんなが元気で健康で役所へ来て、みなさんの災害対策本部としての動きができるという前提で全てができていますので、まずそれが機能しないんだな、ということを変えて痛感しました。そうすると、まるっきり想定していない動きの中で、本来の役割ではない人間が、いろんな役割をしていかななくてはならないということが起きました。例えば夜、じゃあもう今日は帰っていいかなということで人が1人2人減ったりするわけです。当然公務員ですから本部に誰かしら人はいますけれども、そうすると、夜家が潰れそうだって市民から電話がかかってくるたら誰が出かけるのとか、そういう問題がおきてくるわけですね。我々も1週間とかずっと通して詰めていましたけれど、お昼に鐘が鳴ったらご飯食べに行こうねというような流れがあつたりして、やはり我々も雪害ということに対して、これから起きてくること、住民が不安になっていることとうまく感覚のマッチングができていなかったことを感じました。そういう意味では、本部というのが、非常に慣れない雪害という災害に対して非常に未熟な感じで動いている、動き始めてしまったということもあります。まず県との連携。我々は金曜の夜に、災害特別対策本部、防雪対策本部を、そして災害対策本部を朝に設置しました。県の方の設置は、土日を挟んで月曜の朝です。月曜日の朝に初めて県の対

策本部ができました。これはもう当時散々叩かれたので、当時の記憶のある方はご存じだと思いますけれど、災害対策本部が月曜日に立ち上がったので、そのタイミングで色々な報告を我々に求めるわけですね。それに忙殺されてしまいました。警察もしかりなのですから、警察も、家の倒壊はないですか、被害はないですか、怪我した人はいないですか、そんなことを我々に聞いてくるわけです。我々は我々で、県の合同庁舎の方に連携を取りながら決まった時間に決まった様式で報告をしているわけですね。ですのでそこに聞いてくれって言ってるんですけども、まあリアルな時間にオンタイムで情報が欲しいという思いがあるのかもしれない。警察が、その後どうなりましたかという電話をよこした。あなたの言っているその後ってなんですかという話です。こちらは忙しくて何言っているのかまったく分からない。その後どうですかと抽象的にいわれても、何時に電話した、いくつの数字が、どうなったかと具体的に言ってくれないと、こちらは答えられないし、その情報は全部県に流しているから県に取りに行ってくれというような、喧嘩みたいなことがありましたね、ということです。ちょっと大人じゃなくなった瞬間もありました。実際そういう事務的な本部としての作業に忙殺されたということがありました。もうひとつは、県と連携しなくてはならないことがいっぱいあるんです。災害救助法を受けるかとか、指定を受けるかということですよね、応急住宅の対応を受けるかとか、緊急車両をどうしますかとか、県から許可をもらって連携を取らないとできないことがあったんですね。多分マニュアル通りに県の方も聞いてくるんでしょうけれど、災害救助法の適応を受けますかというわけですよ。我々もちろん勉強はしていたつもりですけども、受けますかと言われて、受けるとうどうなるんですか、と質問をしても返事が返ってこないんですね。これは、応急住宅の処置もそうです。雪で住宅に困っていると。潰れそうだという人に対しては、県も例えば県営の住宅ですとか、提供することができるという仕組みがどうもあるんですね。で、それを使いますかと県の住宅の担当が電話をよこすんですけども、それを使うとうどうなるんですか、負担はどうなりますか、どういう手続きをすればいいんですか、使いたい人たちとの連絡はあなた方がとってくれるんですか、と言ってもそこで会話が止まっちゃうんです。簡単に言うと、制度の無知、知識がそれほどないのに色々なことをやっていかなければならなかったということが実際に起きていたということが、ありました。

あとは緊急車両ですね。中央道は閉鎖されていたのですが、やっぱり一番初めに除雪が進んだんです。で、緊急車両の手続き、要は、県とFAXのやり取りを何回かして、OKが出たら、回転灯を自分たちが用意すれば、どこからどこまでナンバーいくつの車が、何の目的で何時ごろに中央道を走っていいという許可を取ることができたんですね。医療機関とかそういったところは。そういうことが何件かありましたけれども、しまいには県の人も忙殺されて、手続きを取るのに数時間かかってしまって、もう御坂峠は通れるようになったからもういいですなんて怒られた覚えもあります。そのくらい、県の方も慣れてない手続きをせざるを得なかったということがありました。

あと、先ほどちょっとお話しましたが、大雪における避難所、この定義が、避難所というものがまるっきり無くなってしまったということですね。土曜日の朝ですね、災害対策本部の会議をして、道沿いの禾生コミュニティーセンターだとか市役所だとか、いくつかのところを避難所にすると。車で帰れない帰宅困難者がいっぱい出ているので、いける人は歩いていけと。で、とにかく避難できるような対応をしてあげてくれと。行きながら道端の止まっている車の方々に声をかけて、あそこが避難所になるよ、ということを書いてくれというような、ま

るつきりマニュアルにないことをやらなきゃいけないというようなことがおきていました。

まあこんなふうに一生懸命やっていました。県の方も一生懸命です、我々も一生懸命やっていたつもりではあります。しかしながら、やっぱり直面したことがあった。これを、それ以降の災害対策に当然いかしてきているつもりではいますけれども、こんなことが実際に起きてしまっていたということがありました。

で、もう1個は、さっきの話で、帰宅困難者の3割、3分の1が県外、さらに3分の1の県内の人もほとんどの人が市内じゃない。これ何が起きてしまうかという、除雪が進まない。除雪が進まないと、車はどうしようもならないですね。どう対応したらよいか災害対策本部の中で本当にいろいろ議論されました。まず、除雪をするために何をするか。チラシを作りました。車を置きっぱなしに絶対しないでくれと。置いておく場合は鍵をつけてくれ。鍵がついている車は我々が責任を持って動かすから災害対策本部に聞いてくれと。我々はそのチラシを全ての車に配りました。配って、盗まれるようなことがおきてしまうかもしれないけれども、それはもうその時だと。とにかく除雪して皆さんのライフラインとしての道を確保していかなくてはならない。でその時に、山梨中央銀行さんですとか、夢庵さんですとか、合同庁舎とかJAとか、色々なところとにかく1回、国道にある車を停めるための臨時的な駐車場として貸してくれというお願いをして、貸していただくためにまずそこを車が動けるように除雪して、とにかく車を動かして、その鍵を、動かした職員がまた本部に持ってきて、これはナンバーいくつのどこにあった車で、いまどこにあると。それで本部に鍵箱を作っておいて、そこに車の鍵を入れておいて、照会があったらその人に連絡をして渡す、というようなまるつきりマニュアルになかった話なんですけれど、そんなこともやった覚えがあります。たぶん大月市さんはそれが最初できていなかったらしくて、もう国道20号ってほんとによその方が多かったらしくてですね、とにかく除雪に苦勞して、国道139号より除雪に時間がかかったなんてこともあったようです。

いくつかの色々な流れの中で我々も、その対応に対していくつか勉強をしていったこと、または先に対応した先輩方が、こんなことをしておくといいよねと覚書を残しておいたことがいくつかあったおかげで、よそと比べて若干対応がスムーズにできたことがありました。それがさっき言った、平成23年9月の大型台風です。これは、台風12号と台風15号っていう2つの台風が9月にきました。あの時は八朔祭も中止になったんですね。その日から、雨がずーっと降っていて、鹿留から忍野のへんにずーっと雲があって、1週間ほど雨が止まなかった。その日が台風12号で、あの時は市内でも数か所の避難所を開放して、皆さんに避難していただいた。で、20何日かの方でもまた同じような大雨が降って、あの時玉川の、その今バイパスとクロスするところですかね、あそこの橋、ガードレールがどーんと落ちてしまって、何か月も工事がかかったということがあります。そんな、対応があったので、本部のあり方とか、命令伝達とか、そういった経験がこの大雪のときに活かされて、命令系統については割とスムーズにできたところもあります。

で、もう1つ大きかったのが、実は平成14年に除雪対策要綱、除雪対応マニュアルが作られていたようです。これが先ほどの多分平成10年の雪害ですかね、ああいったものを踏まえて、どんなふうにしていく、この町ではそんなに雪が降らないけれど、いざ降った時に困るということが事実として起きたので、そういう中で、こういう風に対応していくべきだということをマニュアル化していた。その中には高齢者の対策ですとか、児童・生徒の通学の対策、ごみ処理の対策、そしてさっき言った排雪ですね、雪捨て場の対策、そういったことをこうや

って、やっていこうねということが決められています。そのマニュアルの中に、例えば積雪が30cmになったら除雪対策本部を設置しろ、積雪が60cmになりそうだったら豪雪対策本部を設置しろ、で積雪が15cmのときにはあらかじめ委託しておいた業者に除雪の対応をするように連絡を下さい、というようなマニュアルがあります。そういったもののひとつとして、スムーズにできていたということもあります。

で、スライドの一番下に書いてある言葉ですね。公務員として、先ほども言ったように対策本部になった時、我々は対策本部員です。公務員でありながら対策本部の人間になります。何が言いたいかというと、これはフランス語の noblesse oblige (ノブレス オブリージュ) という言葉らしいのですが、簡単に言うと地位あるものの義務というような訳方をされるんです。いわゆる公僕と呼ばれる公務員の義務、心構えとしてよく使われる言葉です。有事には命を落としてでも、住民の生命財産を守る、そういう覚悟を持って、公務員はやっていかななくてはならないという、公務員の心構えとして使う言葉です。いざというとき公務員は自らや家族を犠牲にしてでも住民の生活を守らなければならない。私はこの大雪という災害が終わった後にこの言葉を知ったのですけれども、あなるほどな、こういうことってまさに災害の時に感じた言葉だな、と思いました。皆さんご存知の通り、3.11の時に南三陸の防災無線をずっとしゃべり続けていた職員がいらっしやいましたね、その職員の方が波にさらわれてお亡くなりになられた。(追記：南三陸町職員 遠藤未希さん) まさに、あの時はもう職員ではないです。災害対策本部員としてこの街を、そしてみなさんの命を、財産を守り続けていた結果、あのような悲しいことも起きてしまったという事実もありました。

私がちょっと行って写真を見た中で、心に残ったいくつか写真を持ってきました。この町でおきた雪害という概念の中で、初めて起きたことをいくつか添えたいと思って持ってきました。まず災害対策本部を37回やりました。災害対策本部というのは大体、設置しよう、どんな感じだ、そろそろ閉めよう、というように、普通の災害では土砂災害とか地震にしても開くのは3回4回です。これは本当に、毎日毎日いろんな現場に出て、いろんな問題が起きて、新しい課題が出来ていて、というようなことがあったので、これを述べ37回繰り返しました。こんなことはまるっきり初めての体験でした。で、ここにある情報収集ですが、普通はいろんなカテゴリーで簡単な情報収集、被害がどうだとか、台風でいえばどこどこがどんな感じで崩れているかということなのですから、この時は本当に、鉄道はどうなっている、高速道路はどうなっている、ガソリンスタンドはどうなっている、先ほど雪かきの話がありましたけれど、雪かきをやりたいという人がいますよ、やってくれないかという人がいますよ、お金がかかりますよ、ボランティアでやりますよ、ボランティアセンターを設置しましたよ、とか本当に色々な情報があり過ぎて、我々も整理しきれない。これは1階のロビーの壁なんですけれども、壁にどンドン貼って行って、とにかくみんなで共有しようということで動かしてきました。でもう1個は、これはcoopさん(生協さん)ですね、雪で配達が出来なくなって、これを使ってくれないか、ということで提供をしていただきました。これは市役所のロビーですね、牛乳卵ハムチーズヨーグルト、いろんなものがありました。ありがたくいただいて、高齢者の1人暮らしをしている方や外に行けない方に連絡を取って職員の方に配っていただいたり、民生委員の方をお願いをしたりして、使わせていただきました。またこれはヘリコプターなんですけれども、ここに段ボールを落としている途中の絵です。これは住吉球場です。輸送が途絶されていましたので、入院している方にですね、どうしても病院食を届けなくてはならない、という民

間の病院から連絡があつて、いろいろな手続きを終えてですね、とにかくじゃあ住吉球場なら行けるということで、これは当時建設課の職員だったかな。若手の腰が強そうな職員を派遣して、雪かきも何もしていないところですから、回収するのも大変だったそうです。後でこんなところに落とすなよ、もっと上手に落とせよ、というような文句を言っていましたけれど、とにかくヘリコプターから落としてもらった病院食を、事業者さんに届けて、病院に持って行ってもらって、なんとか間に合ったということも実際ありました。最後の写真です。これは、帰宅困難者の方と禾生のコミュニティーセンターの入り口です。こんなことは当然今までやったことがないのですが、このように表示をしていただきました。これは県外の人の車なのですね。文字とかメールとか言葉で伝えられる部分が限られているので、工夫をしながら対応をしたということです。で、実際にここにスキーに行こうとして行けなくなった横浜の家族の方からお礼の手紙があつて、私も大人になったら困っている人を助けられるような大人になりたいです。本当にありがとうございます。なんていう手紙をいただいたりもしました。

もう1個、これも初めてのことで、ボランティアセンターを設置しました。これは社会福祉協議会と連携をしてですね、その中で19日の水曜日から9日間開設をして、この都留文科大學にもサテライトを作っていただいでですね、延べ387名、県外の方が約90名来ていただいて、高齢者の除雪とか、先ほど益子さんはお金を取られた方もいたというお話をされていましたが、困っている方のために無料で除雪の対応をしていただきました。本当に初めてのことですけれど、いろんな人たちの善意を、何とかこうマネジメントしないとならないんです。整理しないとならなくて、そういったことを社協に中心にやっていただいで、なんとか困っている人たちへの対応が出来たということもありました。

話がまとまらないですけれども、みなさんが体験した街の中で起きていたこととか家庭で起きていた大変だったことと同じように、今先生の研究とか益子さんのお話の中でありましたけれど、役所の中でも、本当に一生懸命動いていただいで、難しいことや判断に困ったこと、やったことがないことなど、どう対応してもそれが正解なのかわからないことがいっぱい起きていました。6日間家にも帰れずに対応していかななくてはならないような状況が起きてしまった。ですけれども、そういう中でも、幸いこの街では亡くなった方がいなかったとか、帰れずに困った人がいなかったということは幸いで、その時に沿道の方がコーヒーをくれたとかラーメンを作っていただいたとか上谷あたりの自治会館の中では地域の方々がね、おにぎりを作って差し上げたとか、そのような地域の力というのも、後からいろんな報告を受けて感じました。そういう意味では、共助、いわゆる公助ですね、公の力なんていうものはちっちゃいもので、自分で何とかするといういわゆる自助も大事ですけれども、災害の時には共助の意識が大事なのかなと思ったのと、この街にはそういう共助の力がすごくあるのかなということを感じた災害でもありました。今後まだ先生の研究が続いてくださるということなので、なにかしら我々も教訓とする中でまとめさせていただいて、今後の災害対策に活かせればいいなと感じています。どうも長い時間ありがとうございました。

小 林

山口さん、ありがとうございました。これで、第13回地域交流研究フォーラム「平成26(2014)年山梨県大雪を振り返る」を終了いたします。長時間ありがとうございました。

活 動 報 告

2017年度

活動報告

2017 (H29年度)

1. 2017年度の活動について〔概況〕

1. はじめに

本年度、地域交流研究センターの運営体制が一新し、センター長に竹下勝雄（学校教育学科教授）、また事務局スタッフとして3名の職員（小林泰憲氏、亀澤舞氏、中村吟子氏）が加わり、これまで各部門を支えてきたメンバーと一丸となって「地域の大学」としての蓄積をもとに、地域と向き合い、地域との共同的研究・教育や連携協力した事業運営に取り組むことができた。

2. 地域交流研究センターフォーラム開催について

平成30年2月24日（土）に第13回地域交流研究フォーラム「平成26（2014）年山梨県大雪をふりかえる」を開催した。この企画を提案された山口博史准教授（本学COC推進機構）が、平成26年2月に山梨県内外に甚大な被害をもたらした大雪を取り上げ、事前に市民に向けて実施したアンケート調査で分かったことの報告や大雪を実際に体験した地域住民の方や行政の方の話を聞き、参加者の意見を募りながら、大雪災害について学問的に考え、経験を語り継ぐ貴重な機会となった。（詳細は本誌5頁～43頁参照）

3. 各部門の活動

3-1 フィールド・ミュージアム部門

地域の自然や文化を観察し、記録し、学び合う場を創ることで自然との関わりのあり方や文化のありようを探究する部門である。生きものに親しむキャンパスづくりに取り組んだ研究・教育活動、展示活動、地域の自然や生活の記憶を収集・保存し活用する活動など以下の①～④の事業を行った。

- ①学科・学年の枠をこえた学生が参加し編集する機関紙『フィールド・ノート』の発行（年4回、各号700部発行）。
- ②当部門のこれまでの取り組みの成果を活かした地域の小学校の授業や地域インクルーシブ教育のクロボ活動への参加。
- ③ムササビを学生と市民が現地で直に観察することで都留の自然の魅力や共生のあり方について考える「ムササビ観察ツアー」の開催。
- ④富士急行と連携した駅舎での展示及び富士急行と都留市が連携した「駅からハイキング」事業の運営。

いずれの事業も市内外から多くの参加者が集まり、当部門の活動に留まらず、センター全体の取り組みを広く多くの人びとに知って頂く契機となった。（詳細は本誌49頁参照）

3-2 発達援助部門

・地域教育相談室

本年度で15年目を迎えた当相談室にとって、大変厳しい運営となった。担当者の病気休職に伴い、後期より活動を休止した。従って、前期の活動をもって報告とする。

なお、当相談室の今後の運営体制については、現在検討中である。

①来室、訪問、電話・ファックス、電子メール等による相談活動

②教育関連講座・研修会の実施

・公開講座の開催（1回）

③山梨県内の教育委員会及びその他の教育関係団体との連携

・都留市教育研修センターと連携した現職教員及び市担教員の学級経営・授業サポート（1回）

・南都留教育相談ネットワーク会議（1回）

（詳細は本誌56頁参照）

2017年度より特別支援学校教職課程が開設されたことに伴い、初等教育学科の授業と地域インクルーシブ教育分野の事業との連携がはじまった。（詳細は本誌64頁参照）

・地域情報教育

当部門に「地域情報教育」が誕生して、10年目を迎えた。

周囲の環境の変化に対応した特色ある活動を展開してきた。今年度は、図工・美術と情報の連携した教育システム作りプロジェクト（たからばこ作戦）の活動を継続して取り組んだ。

①図工・美術と情報の連携した教育システム作りプロジェクト（たからばこ作戦）

・旭小学校、子どもアトリエ（兵庫県西宮市）を協力校・組織とする

・保護者への説明、作品の撮影及び利用に関する許諾を得る

・交流支援

・地域美術教育

地域美術教育では、本学初等教育学科及び学校教育学科の図工・美術教室の教員と学生が主体となり、地域の子どもたちを対象としたアート活動の企画運営を行っている。

地域の方の協力を得て、本年度も様々なアート活動を学生とともに考え、取り組むことができた。また、当センターの「地域インクルーシブ教育」と連携したクロボ・アート活動においても経験を重ね、充実した運営が実現した。

①クロボ・アート活動の指導・運営（4回開催）

②都留市立旭小学校での出張授業の開催

③都留市保小連携事業「宝保育所造形教室」の指導・運営（5回開催）

都留市文化祭「七里祭り」への作品展示（都留市立宝小学校）

④谷村第二小学校土曜体験学習「陶芸講座」の指導

⑤都留市教育委員会主催「子ども公開講座」の指導・運営

・地域インクルーシブ教育

本活動は特別なニーズのある子どもたちへの教育・心理的支援とインクルーシブな地域づく

りを推進することを目的として平成27年4月にスタートした。

- ①特別なニーズのある子どもたちを対象にした地域の居場所づくりの活動“クロボ”
- ②思春期・青年期の特別なニーズのある子どもたちを対象にした“キャリアデザインワーク”
- ③一般市民や現職教員・指導員を対象にした障がい理解やインクルーシブな地域づくりに関する研修

3-3 暮らしと仕事部門

当活動を再開して3年目となる本年度は、対象エリアを東桂地区とし、地域の暮らしや産業を支える“水”に注目した「都留市を流れる水と暮らしと農のかかわりを探るプロジェクト」を実施している。また、学生を主な対象とした「研修会」や都留市民を主な対象とした「公開講座」を実施した。

- ①都留市十日市場・夏狩地域の湧水調査研究
- ②平成29年度暮らしと仕事部門研修会の開催
(詳細は本誌70頁参照)

4. おわりに

2003年のセンター発足から15年間、当組織の活動を学内外に発信し続けてきた『地域交流センター通信』が今年度をもって幕を閉じることとなった。

当時から一貫して変わらない組織の役割は、広い視野と長い目で見て大学と地域の交流はどうあったらいいか、を考えていくことである。そのために時間をかけて地域の人々と関わったり、暮らしや環境への理解を深めながら継続的に交流を進めてきた。こうした地道な活動を継続しながら、「地域の大学」としての蓄積をもとに、本格的に地域と向き合い、地域との共同的研究・教育や連携協力した活動を進めるための本学の拠点として更に発展させてゆきたい。

一方、COC推進機構は、本学教員が地域をフィールドとして行ってきた様々な個々の研究活動を大学の資源として、研究活動の様子や成果を地域や全国に発信するために学内外の組織や機関と協力・連携しながら諸活動を調整・統括する役割を担ってきたが、両組織の事業内容が混在しているといった指摘もある。また、当センターを長年支えてきた発達援助部門「地域教育相談室」の体制再建も迫られている。こうした課題を踏まえ、地域のニーズを学内に繋げる新たな機構改革を推進していかなければならない。

本学は来年度より2学部・6学科体制となる。これまで当センターが蓄積してきた地域の情報や人間関係を支えにして、本学の多様な学科構成を横断的に、かつ幅広い領域を扱いながら今後、新たな事業を展開したいと考えている。

II. 各部門の活動

II-1. フィールド・ミュージアム部門

担当教員：北垣憲仁

【平成 29 年度の活動概要】

フィールド・ミュージアム部門（以下、「部門」と記す）は、地域全体を生きた博物館と捉え、学生の地域での学びを支援し市民との交流を通して自然との共生や文化のありようなどを探究しようとする取り組みである。またこうした取り組みの成果を大学や地域の共有の財産として蓄積し活用することを目指している。

平成 29 年度は部門の理念を具体化する事業として、授業（「地域交流研究 IV」、「環境科学概論」、「自然環境調査・自然観察実習」、「博物館概論」、「博物館実習」）のほかに、①学科・学年の枠をこえた学生が参加し編集する機関誌『フィールド・ノート』の発行、②部門のこれまでの取り組みの成果を活かした地域の小学校の授業や本学のクロボ活動への参加、③ムササビを学生と市民が現地でじかに観察することで都留の自然の魅力や共生のあり方について考える「ムササビ観察バスツアー」の開催、④富士急行と連携した駅舎での展示及び富士急行と都留市と連携した「駅からハイキング」事業、などを計画した。

今年度企画した事業は予定通り終わることができた。機関誌『フィールド・ノート』は読みたいという希望者が多く、毎号、残部がほとんどない状態が続いている。また「ムササビ観察会」は教員・学生・市民に好評で回数を増やして欲しいという要望もあった。企業・行政との初めての連携事業となった「駅からハイキング」も開催期間中に 200 名を超える参加者があり、本学のフィールド・ミュージアムの活動を市内外の多くの人と共有する契機となった。

【活動の状況】

1. 機関誌『フィールド・ノート』の編集と発行

フィールド・ミュージアム部門では、学生が主体となり編集する部門の機関誌『フィールド・ノート』を発行している。この編集には、本学の学科・学年の枠をこえて多くの学生が参加している。また学生が自ら企画を立て、地域に出て取材をして記事を編集している。さらに週に 1 度、全体での編集会議を行ない、記事の課題などを全員で話し合い校正を繰り返すという過程を経て冊子を完成させる。昨年度も年 4 回、各号 700 部を発行した（ただし 93 号はオープンキャンパス用に 2700 部発行した）。しかし近年、読みたいという希望者が市内外で増えたためどの号も残部がほとんどない状態が続いている。毎年 1 回、読者にはアンケートを実施し読者の声も記事の編集に反映させている。

平成 28 年度の発行月と号は下記の通りである。

93 号：2017 年 6 月発行、2700 部（オープンキャンパス用に 2000 部印刷）

94 号：2017 年 8 月発行、700 部

95 号：2017 年 12 月発行、700 部

96 号：2018 年 3 月発行、700 部

オープンキャンパスでは、2日間にわたり『フィールド・ノート』の編集部の学生がキャンパスツアーに参加し、そのさい参加した高校生に『フィールド・ノート』と都留市の動植物の絵はがきを配布した。これらは高校生や保護者に好評で、平成30年度入学生のなかにもこのキャンパスツアーで『フィールド・ノート』をみて本学に入学し、部門の活動に参加している学生がいる。

本年度、読者から届いた感想として次のようなものがある。

- ・「学生さんたちが地域に生きる人びとにていねいに光を当てている記事を読んでいると“何かとても美しいもの”に出会えた気持ちになります」
- ・「地方大学の一セクションが発行する雑誌としてはボリュームがあり内容も素晴らしい」
- ・「合同庁舎の全職員に回覧しています。都留市内の情報が多くて好評です」
- ・「学生のみなさんが足で稼いだ生の情報発信に努めている姿勢に頭がさがります。私が学生のころ、ここまで地域と向き合っただろうかと思わされます」
- ・「本校は自然体験に力を入れていますので、フィールド・ノートを図書室に置いて子どもたちにも見ることが出来るようにしています」
- ・「都留という地方の一都市だけでこれだけの冊子を発行できている例は少ないと思います」

機関誌発行に参加している学生は、現場で自然や市民と交流することで学びを確かなものにするだけでなく、体験を言語化し発信することで読者から多くの励ましを受けている。その励ましが学生の学びや成長を支えているように感じる。このように『フィールド・ノート』は、単に学生が記事を書くだけでなく、学生の地域での観察や交流の体験を市民と共有することで、学生と市民との学びの場となっており、フィールド・ミュージアムの思想を体現するものである。

2. 附属小学校などへの授業参加及びクロボ活動への参加

大学での研究の成果を教育の現場に活かすこと、また地域の自然を丁寧に観察し親しむというフィールド・ミュージアムの理念に沿ったプログラムを実践するという目的から、地域の小学校の授業や観察会に取り組んだ。また昨年度に引き続き領域をこえた分野との協働を目指してクロボへの活動に参加した。

小学校における授業は次の通りである。

①都留文科大学附属小学校

4年生を対象とした理科授業（5月9日、6月20日、7月6日、9月27日、11月6日、11月21日、2018年2月16日）

②上野原市立島田小学校5年生対象（11月9日）

③上野原市立上野原小学校5年生対象（10月27日）

上記3校ともに1回につき2時限を用い理科教育・環境教育の授業を行なった。附属小学校では、「学校林の動物の暮らし」をテーマにあらかじめ担任と授業内容の打ち合わせをし、野外での観察と室内でのまとめという構成にした。附属小学校の学校林には、ムササビ、リス、野ネズミ、モグラ類が生息しているため、これらの動物の森での暮らしについて生活痕などを観察しながら授業を行なった。

クロボ活動は、昨年に引き続き10月28日に環境学習活動として参加した。学生スタッフは昨年度同様、「フィールド・ノート」から2名が参加した。内容は、自然物を使用した観察と工作を柱としたもので、事前準備に1ヶ月ほどかけて授業の準備をした。事前に学生へのプログラム紹介をする時間があつたため、今年度はスムーズに進行させることができた。この活動への参加は、領域をこえた協働の機会でもあり、フィールド・ミュージアムの理念とも重なることから来年度以降もプログラムを工夫しながら参加していきたい。

3. ムササビ観察バスツアー

ムササビは都留市のシンボルとなる動物であり、幅広い年代層に人気の動物でもある。高尾山をはじめ全国各地で観察会が開催されている。今泉吉晴名誉教授による都留市石船神社におけるムササビ観察は現在の都留フィールド・ミュージアムの原点の一つでもある。この思想を受け継ぎ、地域の自然の魅力や自然との共生のありかたを現場で考えていく事業として、「ムササビ観察バスツアー」を企画した。部門ではこれまでも自然観察会として実施していたことがあつたが、今年度から①バスで移動することで安全面に配慮する、②学生にスタッフとして参加してもらい、教職員・学生・市民参加による観察会にする、③ミニ講座を開催することで交流の場を創る、などを目的とし継続した事業を目指した。

昨年度のムササビ観察バスツアーが好評だったため今年度は春の観察会も企画・実施した。

開催日は次の通りである。教員・学生も参加しやすいように金曜日にも2回、開催した。

①5月19日、②5月27日、③11月10日、④11月18日

参加者から寄せられた感想には次のようなものがあつた。

- ・「近距離で見られたのが感動的でした。地面に寝転がれるようになっていたのが親切でありがたかったです」
- ・「昨年秋にも参加させていただいて、今回は最後にすぐ近くに来てくれてとても感動しました」
- ・「あんなに近くで見たのははじめてです。ムササビ観察会に来て良かったです」
- ・「素直にすごいと思いました」
- ・「初めて見たので感動です。テレビの中でしか会えないと思っていましたので、実際に見る事ができてうれしかったです」

4. 展示・交流事業

地域交流研究センター及び部門の取り組みを広く多くの人びとに知って頂き、交流の輪を広

げる目的で取り組んでいる事業である。今年度は特に富士急行と連携して都留文科大学前駅の駅舎をフィールド・ミュージアムの分館と位置づけた展示活動に力を入れた。また新規事業として、富士急行と都留市と連携した「駅からハイキング」事業も行なった。開催期間中に200名をこえる参加者があり、地域交流研究センター及び部門の活動を市内外の人びとに広く知って頂く契機となった。さらに

①富士急行線の駅舎での展示活動

富士急行線の都留文科大学前駅は、部門の分館として位置づけ展示活動を継続してきた。平成29年は部門の活動を広く市民に知って頂く目的で年4回の展示換えをした。平成29年は、都留文科大学周辺の自然をテーマに展示をした。また本学の華道サークルの協力も得て展示室内に生け花を置き、駅舎の利用者に好評であった。

②富士急行及び都留市と連携した「駅からハイキング」事業

富士急行線の東桂駅から都留市駅までハイキングしながら都留市の自然や文化に触れることを目的に、平成29年10月21日から11月5日まで実施した。またハイキングのルートとポイントを記した地図を作成した。部門では「フィールド・ノート」の学生スタッフと駅舎の展示を見て頂きながら参加者と交流した。台風などの影響があったが開催期間中に200名を超える参加者があり、駅舎での交流は参加者からの評価も高かった。

③見沼フィールド・ミュージアムとの交流

大田堯元学長は、「都留自然博物館構想」を提唱され、現在は「見沼フィールド・ミュージアム構想」の実現に向けて取り組んでおられる。本学の地域交流研究センターとも「積み木広場」や「かすかな光へ」の上映会を通じた交流が続いており、部門でも見沼フィールド・ミュージアムの諸実践に学ぶことをテーマに交流を続けている。本年度は、「埼玉大学で見沼フィールド・スタディーズ特別公開講座」(11月4日、埼玉大学)に参加し、都留フィールド・ミュージアムの現状や『フィールド・ノート』の取り組みについて報告した。

5. 平成30年度の事業に向けて

平成30年度は、本学も2学部6学科となる。各学科や他の部門との連携もはかりながら、都留市をフィールドとして地域の課題と取り組むような事業を展開していきたい。具体的には次のような事業を計画している。

1. 機関誌『フィールド・ノート』の編集・発行：学生が主体となった機関誌の編集は、市民からもまた全国からも注目されつつある。2学部6学科となることからさらに学科・学年の枠を超えて学生を受け入れ、学生が主体的に取り組む環境を整えたい。
2. 地域の小学校の授業への参加及びクロボ活動への参加：今年度の内容を検討し、学生スタッフとともにプログラムを創っていきたい。
3. 富士急行とは沿線をフィールド・ミュージアムとしようという取り組みを始めており、平成30年度も駅や駅舎の展示を中心とした「駅ハイク」の事業に富士急行・市とも継続して取り組んでみたい。

4. 学部横断的に活用できる教育リソースのセンターとしての機能の充実

これまで部門が取り組んできた、地域の写真資料などのデジタル化作業を継続する。さらには地域の自然素材の収集を行ない、それらを本学の教員・学生が教材研究に使用できるよう整理を継続して行ないたい。

5. 【新規事業】環境 ESD プログラムの学生の受け入れによるムササビ観察バスツアー：今年度も好評だったため、平成 30 年度は年 5 回の開催を計画したい。また平成 30 年度からは本学の環境 ESD プログラムとも連携し、学生スタッフを受け入れ（合計 45 時間の指導）、学生・市民の交流により観察会を創る学びの場にしたい。ムササビ観察会は、学生・市民の関心が高い。しかも現場で実物を観察することが自然に親しむ入り口となり自然との共生のあり方を考える交流の場ともなることから、観察会と同時に開催するミニ講座も内容を検討しさらに観察会を充実させたい。

6. 【新規事業】広島県三原市の「ほんごう子ども図書館」との交流事業に新たに取り組みたい。「ほんごう子ども図書館」は大田堯元学長が土地を寄付され民間のかたがたで運営する公設民営の子ども図書館である。大田堯元学長は、都留自然博物館構想の提唱者でもあり、「見沼フィールド・ミュージアム」の構想に取り組んでおられる。また「ほんごう子ども図書館」では、地域と子どもなど部門に欠かせない視点をもった取り組みがなされており、大学を拠点としたフィールド・ミュージアムを構想している部門が学ぶべき点が多い。

7. 【新規事業】都留市周辺の自然を活かした教材化への取り組み

都留周辺の自然を活かした教材化への取り組みとして、これまで部門が記録・収集してきた映像資料や標本資料を整理し、地域の小・中学校の教材化や教材開発に取り組みたい。

(文責：北垣憲仁)

II-2. 発達援助部門

II-2-1. 地域教育相談室

地域教育相談室をベースとした平成 29 年度活動報告

COC 推進機構 品田 笑子

<平成 29 年度活動報告>

1. 活動の概要

地域教育相談室の活動は本年度で 15 年目である。昨年度同様、来室、訪問、電話、ファックス、電子メール等による相談活動、教育委員会等が主催する教職員研修への講師派遣やサポート、校内研究等への講師派遣及び企画・運営のサポート、本相談室主催の公開教育講座の企画・実施、都留市教育研修センターと連携した現職教員学級経営サポートを進めたが、担当者が後期から病気休職し活動を休止。従って、前期の活動について報告する。

(1) 形態別による対応件数

形 態	地域別対応件数			合 計
	北麓・東部	県 内	県 外	
電話 & FAX	8	3	16	27
メ ー ル	44	8	148	200
来 室	2	0	1	3
訪 問	8	2	39	49
合 計	62	13	204	279

(2) 講師派遣先の依頼内容

※複数の内容を依頼されることが多いが、整理を考慮してできるだけ1つにまとめた。1日訪問し分類できる場合には2つに分類したので、訪問数と一致していない。

- ①Q-Uによる学級集団の理解と対応の基礎講座及び事例研究の仕方の研修会 述べ20回
- ②Q-Uの結果に基づく学級コンサルテーション及びスーパーバイズ 述べ15回
- ③構成的グループエンカウンター及びソーシャルスキル教育 述べ15回
- ④その他 2回

(3) 山梨県内の教育委員会及び教育関係団体との主な連携

- ①都留市教育研修センターと連携した現職教員及び市担教員の学級経営・授業サポート1回
- ②南都留教育相談ネットワーク会議1回

(4) 第1回公開講座

※当日の様子及び参加者の感想は地域交流研究センターブログの2017年6月アーカイブ、参加者代表の感想はセンター通信29号に掲載。

日 時：2017年5月20日（金）18:30～ 2号館2101教室

演 題：「子どもが主役の学級づくり～主体的・対話的で深い学びにつながる仕掛け」

講 師：高知大学教育学部附属教育実践総合センター准教授 鹿嶋 真弓（博士・カウンセリング科学）

参加者：学生51名 教育関係者及び一般31名 計82名

2. まとめ

今年度は前期の活動だったため傾向を分析することは難しいが、昨年度と比べると北麓・東部地域との連携が減少したと感じられる。これまでも連携を重ねた担当者が2～3年サイクルで異動すると、人的つながりが変化してきたので、この要因が考えられる。公開講座の参加者についても広報が難しく、参加者の満足感が高くて情報も地域に広がらなかった。地域との連携をどうするか検討していく必要がある。

また、教育現場に訪問すると多忙感は当然であるが、一方で子どもたちに対応するための技術・技能を学びたいという教師が増えていると感じている。昨年度、学級集団を理解し対応し

ていくための道具である「Q-U：楽しい学校生活を送るためのアンケート」について地域交流研究フォーラムで取り上げたが、今年度でもそのニーズは高いと感じた。さらに、県外では若い教師が増えているため、学級で人間関係づくりに活用できる手法として構成的グループエンカウンターやソーシャルスキル教育について関心が高まっていると感じた。このような教育現場の状況を検討すると、今後の活動についてこの領域で貢献できると考えている。

(文責：品田笑子)

Ⅱ-2-2. 地域情報教育

1. 活動指針

2007年度(平成19年度)から地域交流研究センターにおける活動の柱の一つである「発達援助部門」の中の分野の一つとして「地域情報教育」が取り込まれた。

「地域情報教育」における活動の指針として、当初提示されたものからは、周りの環境の変化とともに修正をしつつ、現在は、次の(1)・(2)を掲げているものの、(1)については、今年度はほとんど活動していないが、新しい学習指導要領の発表もあり、次年度以後には情報センターでの新任教員の採用もあり、現場の先生方とも相談して何かしらの活動を行うことを目標としている。(2)については、2011年度から初等教育学科(現・学校教育学科)図工・美術教室の鳥原先生が中心となって活動している、地域への美術教育支援プログラムの中で、都留市内では旭小学校をフィールドとした、図工・美術と情報の連携した新しい図工・美術教育システム作りプロジェクト(たからばこ作戦)を活動の一つとして加えたことによって、引き続き、より注目度の高い活動をしている。

(1) 小中学校への情報教育全般に関する支援

- ・都留市情報教育研究委員会(教育委員会、全小中学校情報教育担当者)への協力
- ・ICTを利用した学校業務に関する研修会の開催
- ・小中学校情報教育への支援
- ・大学と小中学校間での遠隔授業の実施

(2) 図工・美術と情報の連携した教育システム作りプロジェクト(たからばこ作戦)

- ・旭小学校、子どもアトリエ(兵庫県西宮市)を協力校・組織とする。
- ・保護者への説明、作品の撮影及び利用に関する許諾を得る
- ・交流支援

今年度の活動は、昨年度に、旭小学校の子どもたちの図画工作における作品に対して、兵庫県西宮市のこどもアトリエの子どもたちが鑑賞して書いてくれた感想をコメントとして作品映像ファイルに編集し作成したDVDを旭小学校の校長先生をはじめ多くの先生方の協力を頂き、全保護者に配布した活動の逆の取り組み、すなわち「こどもアトリエ」の子どもたちの作品に対して、旭小学校の5年生がその感想をコメントとして書いてくれたものを反映させた映像ファイルの作成を行ったこと。また、旭小学校では移動「デジタルずこうしつ」の初めての取り組みとして、3Dプリンターを持ち込み、子どもたちに直接その状況を観てもらったことも大

きな反響を頂いた活動だった。更に、別途支援を受けている科研費補助事業とも関連させて、これらの関係者が都留市に一堂に集まったカンファレンスを開催できたことである。こうした様々な実践活動により、本プロジェクトが目指す、「ICTを用いた双方向型のコミュニケーション活動を行う」ことにより、図画工作の新たな活動イメージとして「心のコミュニケーション」の実現に向けて大きな一歩を踏み出すことができたと考える。また、「たからばこ作戦」の実践用及び公開用のサイトについてもシステム及びデータの改善作業を続けている。

2. 平成 29 年度の活動

☆平成 29 年 5 月 27 (土) ~28 日 (日) (杉本、鳥原) 西宮市 ギャラリー小さな芽

「子どもアトリエ」の「さつき展 2017」への参加と作品の撮影、旭小学校の子どもたちとの交流プログラム計画、カンファレンスの開催及び今後の活動内容についての打ち合わせ。

☆平成 29 年 6 月 14 日 (水) 16:00 (杉本) 都留市立旭小学校

こどもアトリエの作品 45 枚に対しての交流活動への参加のお願い。

☆平成 29 年 7 月 25 日 (火) 14:00 (杉本、鳥原) 西宮市 こどもアトリエ

「たからばこ作戦」における、新たな一般公開用ミラーサイトを作成することになり、そのスタート画面におけるアイコンの種類やデザイン、そして公開時期や全体構想に向けて打ち合わせを行った。

☆平成 29 年 8 月 8 日 (火) 13:00 (杉本、鳥原、大輪) デジタル図工室

トップ画面に配置する分類アイコンを利用した検索について、分類カテゴリーとして、「テーマの部」は、生き物、植物、食べ物、四季 (春夏秋冬)、人、乗り物、風景の 7 種、そして、色 (黄、青、紫、水色、ピンク、赤、緑) 7 種の 14 個のアイコンからスタートすることにし、全体の配置についての確認を行った。分類できない作品テーマについては、もう少し運用してから検討することを確認した。

☆平成 29 年 8 月 17 日 (木) 10:00 (杉本、浅川校長、雨宮教頭) 都留市立旭小学校

6 月 14 日にお願した「こどもアトリエ」の作品に対する感想コメントを書いてもらうことを正式にお願した。

☆平成 29 年 8 月 24 日 (木) 15:00 (杉本) 都留市立旭小学校

依頼書と一緒に、こどもアトリエの作品 45 枚とコメント用紙を届ける。

☆平成 29 年 9 月 21 日 (木) 16:00 (杉本、鳥原、浅川校長、雨宮教頭) 都留市立旭小学校

コメント作成のお礼と今年度開催予定のカンファレンスへの出席のお願い。

☆平成 29 年 9 月 27 日 (水) ~28 日 (木) 9:00~17:00 (デジタル図工室)

1. データベースシステム「たからばこ」の全登録データの検証と新規項目追加作業

- 参加学生：白井佑美 (英文 4 年)、北原拓真 (社会 3 年)、味戸有紀 (英文 2 年)、浦野茜 (英文 2 年)、宗形星虎 (社会 1 年)、和田吉揮 (国際教育 1 年)
- データベース「たからばこ」への登録作品数：1294 件
- 新規項目として「検索ワード (児童)」のデータ登録
【分類 1】テーマ 10 項目 (既存 7 + 新規 3)
- 乗り物、食べ物、植物、人、生き物、季節、風景、学校でつかう、家でつかう、建物
【分類 2】色 7 項目

・赤、青、黄、ピンク、水色、緑、紫

「分類1」から1、「分類2」から最高2 を選択して登録する。

2. 映像ファイルの作成

・「旭小学校の5年生」が書いてくれたコメントと「こどもアトリエ」の作品45点を基に映像ファイルを作成した。今年度は、DVD スタートメニュー画面で5つのチャプターも表示し詳細化することにより、個々の作品を観易くすることにした。このDVDをこどもアトリエの上田由紀子さん、旭小学校にも届けて感想や要望を聞くことにした。

☆平成29年10月26日(木) 9:00~14:00 3Dプリンターの展示

これまでも旭小学校には図工美術教室との連携による「たからばこ作戦」プロジェクトのフィールドの一つとして積極的な協力を頂いている。そこで、今回は、学校におけるものづくりの現場を映像ではなく、大学のICT機器を使って、子どもたちに直接観てもらうことを企画した。これにより、今後の交流活動や創作体験のプログラム化に展開出来ることを目標としている。

1. プログラム

09:00~09:45	準備	サイコロのプリントスタート(1h)
09:45~10:30	2校時授業	
10:30~10:50	中休み	サイコロの完成、
10:50~11:35	3校時授業	雪だるまプリントのスタート(1h)
11:35~11:40	休憩	雪だるま完成
11:40~12:25	4校時授業	サッカーボールのプリント(1h)
12:25~13:05	昼食	
13:05~13:25	昼休み	サッカーボール完成
13:25~14:00	片づけ	

2. 展示物 場所：一階玄関前廊下周辺

①3Dプリンター

造形物(サイコロ、雪だるま、サッカーボール40mm 1時間程度で完成するもの)
展示物(児童対象に適切なもの数点)

②「こどもアトリエ」の映像展示

こどもアトリエの子どもたちの作品に対して、旭小学校の5年生から寄せられたメッセージを組み込んだ映像ファイルをデジタル・フォト・フレームを使って展示

3. 使用機器類

①MUTOH製3Dプリンター 「MF-500」1台

②ノート型パソコン SONY VAIO 1台

③デジタル・フォト・フレーム SONY RMT-DPF8 1台

4. スタッフ

教員：杉本光司、(鳥原正敏：学外研修プログラムの一環として)

学生：宗形星虎(社会学科1年)

☆平成29年11月19日(日) 13:00~16:00 まちづくり交流センター会議室2

『たからばこ作戦』カンファレンス2017の開催

出席者(学外)：岡田京子先生(文部科学省)、上田由紀子さん(こどもアトリエ主宰者)、

雨宮基弘先生（旭小学校）、國利悦弘先生（旭小学校）、流石先生（本学非常勤講師）、永井孝さん（CMS コミュニケーションズ）

出席者（学内）：鳥原正敏、杉本光司、大輪知穂、加藤萌香（大学院生）

☆平成 30 年 1 月 26 日（金）13:00～16:00（杉本、鳥原）西宮市 こどもアトリエ

平成 29 年 11 月 19 日（日）に開催した「たからばこ作戦に関わるカンファレンス」における発言のテープ起こし原稿が作成され、そのチェックや報告書作成についての話し合い、また今後の活動計画や目標等についての打ち合わせを行った。

☆平成 30 年 3 月 26 日（月）

『たからばこ作戦』と題したカンファレンス 2017 とこれまでの活動を記録した報告書（ページ数 116）を作成した。

3. 平成 30 年度における活動予定

- ①新しいフィールドとして小学校を一枚増やす。
- ②旭小学校へ 3D プリンターや 3D スキャナーを持ち込み、子どもたちとの交流を図る
- ③たからばこ作戦の実践（新しい交流事業の計画）
- ④図画工作以外の科目に対しての支援の可能性を調査する。

（文責：杉本光司）

Ⅱ－2－3. 地域美術教育

【平成 29 年度の活動の振り返りと平成 30 年度の活動に向けて】

大学教員と学生が、都留文科大学周辺地域の多くの方のお力添えを得ることで、この活動を遂行することが出来ました。関係した多くの方々へ心より感謝申し上げますとともに今後も引き続き、地域とよりよい関係を築き、地域教育の可能性を深めてまいります。そしてまた、ご支援ご協力を頂きますと幸いです。

「私たちの考える図工」と「周辺地域」を手がかりに、「都留らしい学びの活動」ができたらと考え、学生とともに進めてきました。特に都留市の子どもたちの素直で活動的な姿勢は我々にとって多くの刺激となり活動の原動力となりました。

都留市保小連携事業「宝保育所造形教室」学生派遣指導では、園児たちに流木を使った造形あそびの活動を行いました。使用した流木は、山梨県大月市七保町にある深代ダム管理事務所の方のご協力によりダムで集めて頂いたものです。園児たちは、何かの生き物に見える流木を数ある流木から選び、それらを組み合わせて制作しました。とても生き生きとした作品制作ができたと思います。それは、水資源豊かで樹木の多い自然環境だからこそ、地域を知ることの出来た活動であったと思います。

図工美術分野は「かたち」や「色」を扱う分野で、モノを創造的に自由に表現します。子どもは、身の回りの出来事や目に映るモノに常に心を動かしています。私たちの関わる活動では、子どもたち自身が創造的にモノを作り出し、更に自身が作り出したモノから楽しさや美しさといった感動を得られるように考えています。そしてまた、活動をともにする他の人の作るモノと自分のモノの出来上がりや感じ取り方などの違いに気づき、互いの価値観を認め合いながら

成長していきます。それは、言葉だけでは感じ取りにくい「かたち」や「色」を通して養える学びであると考えます。

私たち教員も学生とともに、この活動の意義を再確認し今後の活動へとつなげていけるものと考えています。

【活動の状況】

○クロボ（クロスボーダー・プロジェクト） 「アート活動」の指導・運営

4月22日 梱包材とグルーガンを使った造形活動

5月20日 シャボン玉アートにチャレンジ（表現）

12月16日 紙漉き体験

1月27日 デカルコマニー（表現）12月16日に制作した紙を用いた活動

○都留市立旭小学校での出張授業

11月30日 陶芸体験 板づくりマグカップ制作

○都留市保小連携事業「宝保育所造形教室」学生派遣指導

6月16日 流木アート造形活動

6月30日 シャボン玉アート造形活動

11月10日 シャボン玉アート作品展示

※宝地域協働のまちづくり推進会主催「第10回七里まつり」会場：宝小学校

1月19日 陶板レリーフ制作①

2月16日 陶板レリーフ制作②と卒園アルバムの表紙制作

○谷村第二小学校土曜体験学習「陶芸講座」の指導

10月21日 陶芸体験 板づくりマグカップ制作

○都留市教育委員会主催子ども公開講座の指導・運営

7月22日「陶板レリーフづくり」参加者約40名



シャボン玉アート活動の制作



流木アート活動の様子

（文責：青木宏希）

Ⅱ－２－４．地域インクルーシブ教育

1. 地域インクルーシブ教育分野の目的

地域インクルーシブ教育分野は、特別なニーズのある子どもたちへの教育・心理的支援とインクルーシブな地域づくりを推進することを目的としている。この分野の主要な活動は以下である。

- ①特別なニーズのある子どもたちを対象にした地域の居場所づくりの活動“クロボ”
- ②思春期・青年期の特別なニーズのある子どもを対象にした“キャリアデザインワーク”
(※“キャリアデザインワーク”は、クロボのグループ別活動の1つとして展開)
- ③一般市民や現職教員・指導員を対象にした障がい理解やインクルーシブな地域づくりに関する研修

2017年度より特別支援学校教職課程が開設されたことに伴い、初等教育学科の授業と地域インクルーシブ教育分野の事業との連携がはじまった。

2. 活動の内容

2017年度については、①～③について計画どおり展開できた。以下では、個々の活動の内容について簡単に示すことにしたい。

①特別なニーズのある子どもたちを対象にした地域の居場所づくりの活動“クロボ”

これは、「クロスボーダー・プロジェクト (CROBO)」という活動である。「健常者と障害者の境界 (ボーダー) を超える」という意味で名称を「クロスボーダー」とし、かつそのプロセスとして地域の方々と「コラボ (連携)」してやっていきたいという意味で通称を“クロボ”とした。

2017年度は、大学の学期中 (4月～7月、10月～1月) 月1回土曜日に10:00～15:00で実施した。今年度は、4月22日、5月20日、6月17日、7月29日、10月28日、12月16日、1月27日の計7回開催した。参加する知的障害・発達障害のある子どもメンバー (小・中・高生) は基本的に1年間固定で、2017年度は23名が参加してくれた。

活動の中では、口話・手話 (ジェスチャー)・絵カードなどの多様な言語・非言語的コミュニケーションを意識的に使用することで、コミュニケーションをバリアとしない環境づくりをこころがけた。

毎回、平均50名ほどの学生や市民がボランティアとして参加し、のべ人数では、120名を超えるボランティアが関わってくれた。前述したとおり、初等教育学科に特別支援学校教職課程が開設されたことに伴い、2017年度は「特別支援フィールドワーク IA」「特別支援フィールドワーク IB」を受講する学生が、学生ボランティアとして参加した。

4月22日(土) 10:00~15:00:午前 スポーツ、午後 アート
5月20日(土) 10:00~15:00:午前 スポーツ、午後 アート
6月17日(土) 10:00~15:00:午前 スポーツ、午後 ことば
7月29日(土) 10:00~15:00:午前 スポーツ、午後 音楽

<後期>

10月28日(土) 10:00~15:00:午前 スポーツ、午後 環境
12月16日(土) 10:00~15:00:午前 スポーツ、午後 アート/音楽
1月27日(土) 10:00~15:00:午前 スポーツ、午後 アート/ことば

クロボは、午前が全体活動、午後がグループ別活動としている。2017年度の新たな試みとして、グループ別活動として、6月と1月の回に「ことばの活動」、7月と12月の回に「音楽活動」を開催した。

各回の活動の様子については、写真とともに、地域交流研究センターブログに掲載した。

②思春期・青年期の特別なニーズのある子どもを対象にした“キャリアデザインワーク”

□概要

本事業は2015年度からクロボのグループ活動の一つとして開催されてきた。2017年度は特別支援学校教職課程が開設されたことに伴い、当該課程のフィールド科目「特別支援フィールドワークⅡ」(集中講義)として位置付けられ、原まゆみが担当した。受講生は本課程第一期生の3,4年生14名が履修し、発達障害等による特別なニーズのある中高生の将来イメージ形成に寄与するキャリアプログラムとして年間7回実施した。学生は実践のまとめを12月に開催した本学講演会「発達障害と学校教育」において報告した。また1月に行われた山梨大学附属特別支援学校公開研究会に参加しポスター発表を行った。

□参加者及び職場提供者

中高生の当事者7名、地域の専門家による運営委員10名、大学生14名であった。また職場体験にご協力下さる企業等も10社以上あり、今年度はそのうち次の3社で体験させていただいた。

曾雌ニンニク生産協同組合様(都留市)、不二屋東桂店様(都留市)、夢工場びゅあ様(大月市)の深い理解のもとで貴重な体験ができたことを感謝している。

□運営委員(地域の専門家)

天野 徳江(NPO法人おもちゃ図書館はばたき理事長)
山口 裕喜(障がい者就業・生活支援センターありす 就業支援ワーカー)
渡邊 浩太郎(山梨県立ひばりが丘高等学校教諭)
丸山 博稔(山梨県立やまびこ支援学校教諭)
井上 弥生(フリースクール オンリーワン 代表)
福永 美奈(都留市立谷村第一小学校 教諭)

親の会「ぶどうの会」代表者

齋藤 淑子、堤英俊（都留文科大学）事務局：原まゆみ（同）

□ワーク実施内容

目標 ○自分はどんな大人になりたいか、仲間と一緒に考えてみよう。

○どんな仕事に向いているか、職場体験をしてみよう。

○将来の夢や希望をつかみ、今できることに取り組もう。

内容 （場所：3号館 204号室）

No	日程	内 容
1	4月22日(土) 午後13:10～15:00	キャリアデザインワークの説明、 自己紹介、名刺交換ゲーム
2	5月20日(土) 午後13:10～15:00	仲間づくり① 大人になるってどういうこと？ グループ別活動 中：将来イメージを描こう 高：仕事しらべ
3	6月17日(土) 午後13:10～15:00	仲間づくり② 自己紹介シート「マインドマップ」の作成と交換
4	7月29日(土) 午後13:10～15:00	働く上で大切なキーワード「つながり」① ニンニクの生産、販売、消費の仕事のつながりを体験学習
なつやすみ		
5	10月28日(土) 午後13:10～15:00	○働く上で大切なキーワード「つながり」② ニンニクの流通に係る「ことば」に意識を向けて活動 ○仕事体験場所を決めよう
6	11月11日(土) 終日 10:00～15:00	○職場体験 希望の職場で仕事体験をしよう 曾雌ニンニク4人、不二屋東桂店1人、夢工場びゅあ1人 農産物の出荷、販売、装飾品の製造を大学生と一緒に体験した。 高校生は電車を利用して自主通勤のケースもあった。
7	11月12日(日) 終日 10:00～15:00	○職場体験の振り返り 体験報告とまとめシート作成 ○仲間のシートを合本した「つながりブック」作成

□成果と課題

今年度は卒業学年の生徒が3名おり、うち二人は特別支援学校、残りの一人は高校であった。特別支援学校は一人ひとりの特性に応じた進路指導が充実しているため、学校と本人、保護者でスムーズに進路決定が行われていた。高校では卒業時に一般就労は無理があるケースの場合、進路指導の方法は模索の段階である。今回、キャリアデザインワークの縁から高校進路指導主事、担任、養護教諭、就業支援ワーカー、職業センターワーカーという専門家が本人保護者を交えた相談会を設定し、進路選択について検討できた事は成果である。3人とも社会人となったが、来年度も本ワークに参加を希望している。

課題は、企画運営の基盤を整え安定的に継続発展していくこと、保護者の交流機会を設けること、学生の学びを検証すること、こうしたプログラムに関心のある方に情報発信すること、な

ど多くある。2年目に向けて改善充実していきたい。

③一般市民や現職教員・指導員を対象にした障がい理解やインクルーシブな地域づくりに関する研修

2017年度は、以下に示す、3つの研修を、主催・共催の形で実施した。

・「病いの経験と学校—小児がん経験者の「語り」を通して考える—」（主催）

7月4日（火）18：15～19：45に、小児がん経験者（大学生二人）の話を聞くことを通して、重い病いを抱えることで当事者と家族がどのような課題を抱えるのか、またどのような教育支援を必要とするのかについて、参加者と共に考える機会を持つことができた。参加者は、慢性疾患を抱えながら地域の学校に通学している子どもの保護者、特別なニーズを抱えている子どもの保護者、病弱教育に携わる教育関係者、本学の学生および教員等、約70名であった。小児がん経験者（大学生）の語りは、学生にとっては同世代であるだけに大変説得力があり、多くの参加者から「病弱教育や院内学級の役割と重要性を知ることができた」という感想が寄せられた。

・「特別支援教育の子ども理解と授業づくり」（山梨県立やまびこ支援学校との共催）

8月23日（水）13：00～16：00に、中部大学現代教育学部教授の湯浅恭正先生（教育方法学・障害児教育学）を招聘して、自然科学棟S-1教室において公開講演会を実施した。講師の考える「特別支援教育の魅力」の話からはじまり、「大人が（ほどよく）子どもに入り、世界を広げる」という実践への基本姿勢の話、実践資料をもとにした「自己感」「自立」の話など、授業づくりの根幹に関わる内容が話として展開された。やまびこ支援学校の夏季校内研修を兼ねる初めての企画で、当該校の現職教員を含む75名の参加（主に教育関係者）があった。

・「発達障害と学校教育～発達障害児のライフステージを踏まえた支援の在り方、学校教育の役割を考える～」（初等教育学科との共催）

特別支援学校教職課程設置記念講演会として、本田秀夫先生（児童精神科医：信州大学医学部附属病院子どものこころ診療部部長・診療教授、前山梨県立こころの発達支援センター所長）をお招きして、平成29年12月16日（土）16:00～18:00、都留文科大学2号館2101教室において開催した。

本田先生は本県における発達障害支援の先駆者として、診療や療育システムの開発等を牽引され大きな功績を残された方である。多くの患者さんを幼児期から青年期、成人期まで長期に亘って診療されていて、豊かな臨床経験に基づいた貴重な研究成果を著書や講演など様々な場で発表されており、こうした知見から本田先生のお話には、いつも「人が育つことへの温かい信頼」が感じられる。

講演会はこうした本田先生のお話を聴きたいと、県内外から229名もの参加者があり、本学の学生、小、中、高等学校の教師、子育てに心配をお持ちの保護者の方、地域福祉に関わる専門職の方など様々な方で会場は満員御礼となった。

講演では、「目に見えない異常」に気づく大切さ、育児のコツ、本人の主体性を大切に

した「合意」、わが国の学校教育の課題、健康でハッピーな生き方とは、など示唆に富んだ分かりやすいお話で、聞き入っているうちに90分があつという間に過ぎた。たくさんの感想が寄せられ、発達障害等の支援に係る課題が確認された。また、講演の前には特別支援学校教職課程の学生たちが、地域と共に取り組んでいる「キャリアデザインワーク」の報告を行った。

3. 2017年度の活動の総括

2017年度の大きな挑戦は、とにもかくにも、初等教育学科の特別支援学校教職課程との連携をはじめたことである。地域インクルーシブ教育分野の主要な活動である“クロボ”と“キャリアデザインワーク”に「授業」の一環として多くの学生が参加することになった。もともとニーズに基づいた大学の地域貢献としてはじめての活動に、今度は、学生教育の要素を盛り込むことになったのである。

上記の連携により、活動の目的が複雑化したことは事実で、一部混乱も見られたが、地道に省察的实践に取り組む中で、年度末が近づく頃には大分活動が落ち着いていった。こうした2017年度の試行錯誤の成果を、2018年度の活動に生かしていきたい。

(文責：堤英俊、原まゆみ、齋藤淑子)

Ⅱ-3. 暮らしと仕事部門

1. 平成29年度の活動概要

暮らしと仕事部門では都留市の人々の暮らしや産業について、研究や情報交流することを目的に活動している。現在は対象エリアを東桂地区とし、地域の暮らしや産業を支える“水”に注目した「都留市を流れる水と暮らしと農のかかわりを探るプロジェクト」を実施している。平成29年度は社会科学的分野の担当者が不在であったため、自然科学的分野についてのみ現地データの収集・解析を行った。事業としては、学生を主対象とした「研修会」と、都留市民を主対象とした「公開講座」を実施した。以下にその詳細を述べる。

2. 活動の状況

(1) 都留市十日市場・夏狩地域の湧水調査研究

調査地域には、古富士火山が山体崩壊して桂川の河谷に流れ込んだ古富士泥流堆積物の上に、新富士火山初期の活動期に噴出した猿橋溶岩と桂溶岩の2層が分布している。都留市が利用する富士山からの湧水は、後者の桂溶岩中を流動した地下水がその末端崖より湧出している。この湧水に関して、十日市場の永寿院の敷地を借用して、平成27年度から継続して自記水位計による連続水位および連続水温観測と、水位を湧水量に換算するための定期流量測定を実施した。その結果、水温は周期的な年変動をしているが、変動幅は年によって異なっている。また、変動周期の時期は、気温変動よりおよそ3～4ヶ月のタイムラグが生じていることが判明した。湧水量も変動していることが確認できたが、その変動は季節による周期的な変動ではないこと

が明らかとなった。詳細は後述の地域交流研究教育プロジェクト「都留市十日市場・夏狩地区における桂川を中心とした水環境の経年変化の把握」(80p)を参照されたい。また、新規調査として、東桂地区内の湧水・用水・河川水の面的な水質調査を行うため、平成29年8月31日に一斉採水を実施した。これについては、分析・解析中であるため、別の機会を捉えて結果を報告する。

(2) 平成29年度 暮らしと仕事部門研修会

研修会は都留文科大学の学生を主対象として、都留市を中心とした暮らしと仕事についての理解を深めることを目的とした講演会を、年に一度実施している。本年度は平成29年6月23日に本学地域交流研究センターにて実施した。講演は東京から都留市に移住して、都留・水みずたんけん隊の活動をしていらっしゃる賀川一枝さんをお迎えして、「湧水のシンボル、梅花藻と水掛け菜 –都留・水みずたんけん隊の活動を通じて–」をご講演いただいた。参加者は本学学生3人、一般8人の合計11人であった。参加者数が予想していたより少なかったが、その要因として、賀川さんに対する講演依頼は多く、本学の授業でも講師を引き受けていただいたことがあったため、耳にしたことがあると考えた学生がいたことが考えられる。

講演内容は、1) 動機づけ：水文化に関するこれまでに取り組まれた取材活動について、水に関する基礎科学的な説明、2) 健全な水循環：生活排水や農業排水の水環境への影響について、相模川(桂川)・酒匂川流域の水利用について、3) 桂川地域の湧水について、4) 湧水の恵：水掛け菜と梅花藻の紹介がされた。最後に、用水路を代表とした水辺との心理的距離を縮めることで、都留の水を地域で輝く宝にしていきたい、と保全活動への参加呼びかけで締めくくられた。

賀川さんの講演は平易な言葉で分かり易く、とても好評であった。それぞれの質問にも丁寧に答えていただき、会場内でも様々な意見が交わされて盛り上がり、参加者の満足度が高い充実した研修会となった。この場を借りて、改めて謝意を表す。

以下に、講演会後に書いていただいた参加者の感想の一部を紹介する。なお、職業欄が空欄だった参加者は「一般」とした。

アンケート結果

- ◆都留の水について知る目的で来ましたが、どういう状態というのを知ることができました。(本学3年生)
- ◆卒業研究で梅花藻について調べているため、タイトルを見て参加したが、水の役割や重要性など水についても沢山話を聞くことができて良かった。都留市の排水事情も知ることができて良かった。水に対しての意識が高まった。(本学4年生)
- ◆卒論に関するテーマと被る部分があり、参加させていただきました。都留の用水路はとてもきれいに見えるようですが、実は家庭用排水が垂れ流しされている状態に驚きました。下水道の整備も難しいという話も聞き、より水を大切にしていかなければいけないんだと再確認することができました。(本学4年生)
- ◆とても良い研修会なので、何か工夫してもっと市民に広く講演してもらいたい。特に若いお母さんとかにお願いしたい。(会社員)

- ◆水の大切さとか土の性質とかを、勉強させて頂きました。今日は有難うございました。
(主婦)
- ◆水の勉強。大変考えさせられました。水を大切に、水源を汚さない様に気を使いたいと思います。(会社員)
- ◆ありがとうございました。(やっと参加出来ました!)以前から気になりつつも・・・。本日は賀川さんが講演されるという事で、何としても!!久しぶりに基本の学習が出来、思いおこす点が沢山ありました。ず〜っと以前に〈石けん研究会〉で学習した事。今一度、広める活動もしなければですネ。変な方向に進化してしまった慣習を変えるのは大変かもしれませんが、出来ることから。この地域にとっても興味があり、もっともっと知りたいと思います。これからも学習の機会やら、積極的に参加させて頂きたいと思います。(一般)
- ◆植物が好きで、甲府に赴任が決まって即刻、富士川小学校の校長先生だった秋山樹好先生のお宅に伺って弟子入りしました。子育てなどで観察会を休んだ期間は長かったのですが、山梨県植物研究会の一員であり続けています。現在は、絶滅危惧植物調査員の片くれにいます。期待以上の内容を伺い、有難い時間を戴きました。地域の良さを引越してきた方々によって目覚めさせてもらうという形に今までよく出会いました。今日の講義は本当に参加して良かったと痛感しました。(一般)
- ◆勸学院の生徒として、水(湧水)をテーマに研究しています。タイムリーな企画でした。これを機会に参加したいと思います。(一般)
- ◆とても良いお話で良かったです。何か参加出来たらなと思います。(一般)
- ◆大変勉強になりました。(一般)

(3) 平成 29 年度 暮らしと仕事部門 市民公開講座

市民公開講座は都留市民を主対象としたもので、暮らしと仕事部門で実施している調査研究で得られた成果を、地域へ還元する場として位置付けている。本年は、平成 29 年 12 月 20 日に内山が担当して地域交流研究センターで実施した。参加者は 10 人であった。内容は「都留市東桂地区の地層の分布と湧水のはなし」と題して、1) 水循環と地下水についての基礎講座、2) 富士山火山山麓における水循環システムの説明、3) 都留市十日市場・夏狩湧水群の特徴や、地域交流研究教育プロジェクトで実施している十日市場での連続湧水観測結果について発表した。講座では講演の他に市販の硬度の高いフランスの水と十日市場第一水源の水を使用して紅茶を入れ、原水の水質の違いが紅茶の味にどのように影響するのか、味わいを確認していただいた。来場者のアンケートをみると、湧水の面白さや都留の水の豊かさを感じていただけたようである。以下に、講演会後に書いていただいた参加者の感想の主なものを紹介する。

(文責：内山美恵子)

アンケート結果

- ◆湧水について以前から関心をもっていました。友人に勧められ、今回の講座に参加出来ること楽しみにしていました。十日市場、夏狩湧水群も事前に見学してきました。水の湧く所を実際に見ると、新鮮な気持ちになり、元気をもらうような気がしました。自分

の足で歩いてきたおかげで、内山先生のお話が、身近なものとなったようで大変勉強になりました。これかれも、他の地域も自分の足で歩いてみようと思っています。貴重なご講演ありがとうございました。(無職)

- ◆地下水や「水」の仕組みなどついて、よく分かった。都留の湧水群の成り立ちが良く分かった。(公務員)
- ◆水について、基礎的な知識を学ぶことができ、勉強になりました。軟水と硬水の紅茶の味が全然違い、驚きました。降水量と湧水量の関係は興味深いため、説明していただきたいと思いました。(公務員)
- ◆湧水という言葉にワクワク感があり、参加してみました。三分一や柿田の湧水も見学したことがあります。今日もさっそく実地見聞して講座に臨みました。今日はよろしくお願ひ致します。興味があった降水量と湧水の関係について説明がお聞きできてよかったです。(非常勤講師)
- ◆市の地下水保全条例作成のために地下水について少し調査したことがあったため、参加しました。都留市の大切な資源である地下水について、市民の皆様にもっと意識してもらえるように研修会を開催してもらいたいです。(大学職員)
- ◆十日市場の湧水地の近くに住んでいる者として、幼い頃から慣れ親しんでいる湧水の神秘性に触れることが出来ました。感謝しています。今後も観測を続けられることと思いますが、結果をお話し頂く機会を作っていただく事をお願いします。(大学教員)
- ◆8月、10月の大雨の影響についての解説があり、たいへんためになった。(大学教員)

Ⅲ. インターフェイスとメディアの活動

Ⅲ－１. 第13回地域交流研究フォーラム

第13回地域交流研究フォーラム『平成26(2014)年山梨県大雪をふりかえる』

○日 時：平成30年2月24日(土) 13:30～16:00

会 場：5号館101教室

話題提供者：益子邦子氏(都留市在住教員)

山口哲央氏(都留市役所企画課長)

解 説：山口博史(都留文科大学COC推進機構准教授)

※なお、当日の様子については当年報前半部分に報告掲載しています。

(文責：事務局)

Ⅲ－２. 各種講座の開催

(1) 都留文科大学現職教員教育講座

〈講座の趣旨〉

例年の通り、都留文科大学夏季集中講座として「現職教職員教育講座」を『教師の子ども理解と学習指導』というテーマで開催いたしました。

現在、日本の子どもたちの学力をめぐるのは、さまざまな角度から「問題」とされており、子どもの読解力をどうつけるのか、などのテーマが議論の中心になっているとあってよいと思います。しかし、残念なことに、このようなテーマを十分に研究・検討する前に、それぞれの学校や教師に「学力向上対策」が求められているのが現状だといわざるを得ません。

以上を踏まえて、本講座では一人ひとりの子どもを理解することをベースに、子どもの思考や感情・感覚に即した学習のあり方を探ることとしたいと思います。特に、学校での生活の大部分を占める授業の場面で、子どもを支える学習指導のあり方を深めていくことを追究したいと思います。

日 時：平成29年7月24日(月) 7月25日(火)

場 所：都留文科大学1号館3階302教室

主 催：都留文科大学地域交流研究センター

日程と内容

【第一日目】7月24日（月）

会場：1号館3階302教室

9時30分～ 10時00分	受 講 受 付
10時00分～ 12時00分	『いじめ指導の方向転換』 講師：宮下 聡（都留文科大学 教職支援センター特任教授） 内容：いじめ防止対策推進法は発効したが、いじめによる不幸な事件は後を絶っていません。「どこにでも起きるいじめ」を取り返しのつかない「重大事態」にしないために教育現場は何ができるか、法律や制度ではなく教育実践の問題として考えます。
12時00分～ 13時00分	休 憩（昼 食）
13時00分～ 15時00分	『教科に関する研究講座Ⅰ』－子どもがわかる授業を作る・国語－ 講師：春日 由香（都留文科大学 初等教育学科准教授） 内容：国語の授業創り（アクティブ・ラーニング）のために必要な、「国語の能力（指導事項）」「教材」「言語活動」という三つの事柄について、「模擬授業」を体験しながら学びます。

【第二日目】7月25日（火）

会場：1号館3階302教室

9時45分～ 10時00分	受 講 受 付（本学1号館）
10時00分～ 12時00分	『子ども理解と学習指導』 講師：山崎 隆夫（都留文科大学 教職支援センター特任教授） 内容：今日の教室は、生きづらさを抱え、攻撃的な言動や心を閉ざす子どもたちが存在し、学習指導を成立させることに困難が生じている。今日の子どもをどう見るか。あたたかな関係性を築きながら、楽しく豊かな学びを創り出すことをどのように展開するか考えたい。
12時00分～ 13時00分	休 憩（昼 食）
13時00分～ 15時00分	『教科に関する研究講座Ⅱ』－英語を楽しむ子どもを育てる授業づくり－ 講師：上原 明子（都留文科大学 初等教育学科准教授） 内容：本講座では、小学校教員を対象とし、意味のやりとりを重視した単元構成や活動例、教材の工夫等について具体的に紹介します。また、新学習指導要領の文字指導に対応した指導法も紹介します。

（文責 事務局）

（2）都留文科大学子ども公開講座

都留市教育委員会の「放課後子ども教室」事業と本学の市民公開講座を連携させた「子ども公開講座」は平成25年度から本格的に開始された。対象となるのは、放課後子ども教室に参加している小学生で、夏休みや冬休みに、主に大学内で開催されている。

平成29年度は5つの講座を開催した。その開催状況は次の通りである。

平成 29 年度子ども公開講座参加人数一覧

※参加者数には、保護者・留学生を含む

日 程	講座タイトル	講師名	実施場所	参加者数
7月22日(土) 10:00~11:30	「陶レリーフ製作」	布山先生 青木先生 竹下先生	美術棟	29名
7月27日(木) 13:30~15:00	試験管の中に虹っぽいものや雪っぽいものを作ろう	山森先生	自然科学棟	27名
8月5日(土) 9:30~11:00	読書の楽しさを知る	日向先生	大学図書館	15名
8月7日(月) 10:00~11:30	英語を使って遊ぼう!	上原先生	3号館ホール	34名
11月11日(土) 9:30~12:00	森の木の実を集めよう!	北垣先生	大学周辺の森	

来年度も都留市教育委員会からの要望に応じて、様々な講座を開催する予定である。

(文責：事務局)

(3) 県民コミュニティーカレッジ講座

日本映画の歴史と美学

都留文科大学国際教育学科 ノルドストロム・ヨハン

講座概要：日本の映画史に様々な視点からアプローチして、第1回から第3回までは昭和モダンの無声映画からトーキー映画に至る歴史と美学に焦点を当てる。第四回は戦後日本の1950年代の映画産業史を再考しながら様々な作品とジャンルに渡って当時の映像文化の特徴を明らかにする。映画は娯楽であると同時に、その時代の社会と風俗の写し鏡でもあります。いくつかの作品を観ながら、日本の映画史を楽しみながら学んだ。

第1回 日本無声映画

主なポイント：初期無声映画時期（リュミエール兄弟のシネマトグラフによるスクリーン）

1910年代の日本無声映画の特徴について

純映画劇運動と関東大震災

1920年代の日本無声映画の特徴について

第2回 日本の音楽映画

主なポイント：様々な音楽映画（音楽映画、音楽喜劇映画、オペレッタ映画、トーキーオペレッタ、ミュージカル・トーキー、レビュー映画、ロマンス・レビュー映画）
レビュー世界から映画へ：『エノケンの青春酔虎伝』（山本嘉次郎、1934年）、

『踊り子日記』（矢倉茂雄、1934年）

第3回 1930年代のトーキー映画

主なポイント：邦画トーキー製作へ（1927～1935/36）

日本初のサウンド・オン・フィルムトーキー『黎明』（1927年、小山内薫）

初成功した本格的トーキー『マダムと女房』（松竹キネマ、五所平之助）

成功したパート・トーキー『藤原義江のふるさと』（1930年、溝口健二）

第4回 1950年代の映画産業：第二黄金時代

主なポイント：戦後のアメリカ占領下時代の影響

日本映画の量産体制固まる

日本映画の国際的評価も上昇

（文責：ノルドストロム・ヨハン）

Ⅲ－3. 『地域交流センター通信』の発行〔第29号〕

1. 本年度の概要

本年度の『地域交流センター通信』〔29号〕は、最終号として「『地域交流センター通信』を振り返る」というタイトルで編集し、2018年3月15日に発行した。本年度の概要をまとめる前にこれまでの発行の経緯を記しておく。

『地域交流センター通信』は、地域交流研究センター（以下、「センター」と記す）が発足した2003年に機関誌として創刊号を発行した（2003年5月）。この通信を発行することで、①センターの諸実践を多くの人びとと共有する、②本学の地域交流の事業に参加した教職員や学生・市民に紙面づくりに参加していただくことで交流の場を創りセンター活動への関心の輪を広げる、③本学の地域交流の諸実践を記録として残し大学・地域の共有の財産とする、といったセンターの理念を具体化する機能を果たしてきた。冊子のタイトルは、本来なら『地域交流研究センター通信』とすべきだが、短いタイトルで分かりやすく伝えたいということもあり『地域交流センター通信』とした経緯がある。

長くこの機関誌の編集長を務めてこられた畑潤氏（本学名誉教授）は、『地域交流センター通信』の3・4号合併号（2004年3月24日発行）の編集後記で、「この〈通信〉は、地域交流研究センターの生命というべきものです。その編集をとおして、地域と大学、学生と教職員、専門諸科学、都留文科大学と全国各地あるいは世界、など多面的な質の交流・共同を生まだしていこうと志しています。」と記している。これは本センターの理念に通底するものであり、今後、機関誌のかたちが変わっても私たちが受け継いでいくべき重要な課題であろう。

この機関誌には執筆者だけでなくさまざまなかたにご協力いただいた。題字は当時社会学科事務室の職員だった黒部行子氏にお願いした。また表紙等の絵は、本学比較文化学科卒業生の成瀬洋平氏に描いていただいた。成瀬氏の絵には、「温かい絵で表紙にふさわしい」、「心が温かくなる」、「原画展を開催して欲しい」などの声が寄せられた。発行にあたっての編集作業には、

当時の『フィールド・ノート』の学生がかかわり、特に清水亮氏（本学比較文化学科卒業生）にはレイアウト作業などを担っていただいた。創刊号から誌面作りにかかわってこられた三氏にはこの場を借りて深くお礼を申し上げたい。

最終号では、創刊号から 28 号までの見出しを整理し、執筆者と頁を記した。併せて表紙写真を誌面に配置した。さらに著者一覧として執筆者名と所属、掲載号を整理した。本機関誌の発行当時から、センターの活動が目指すものをまとめて特集として表現してきたため巻末には「特集一覧」を掲載した。これらのデータの整理は、本センターの職員である巖岩亜紀氏に担当して頂いた。心よりお礼申し上げたい。品田笑子先生の「地域教育相談室」の活動については、本センターの多彩な活動の一部をご紹介しますという趣旨から「トピックス」として掲載した。

2. 体裁

本誌は、A4 版、48 頁で 4000 部発行した。2017 年度の卒業生および 2018 年度の入学生にも配付した。またセンターの事業に関連した講座やイベントでも配付した。2017 年度の配付先は次の通りである。

地域交流研究センター通信配布先

第 29 号

H29 年度 2018.00.00 発行

配布先	部数	配布先	部数	配布先	部数
執筆者	5	都留市役所	80	センター事業協力者及び団体	80
都留市議会事務局	20	大学内	224	都留市内施設	252
教職員	307	県内施設（県立図書館）	2	卒業生	729
県内教育委員会(28市町村)	56	県外施設(ONRY FREE PAPER)	5	東部富士地域小中学校	67
名誉教授	47	入学生・国際交流会館	830	同窓会	100
県内支援学校	12	県内高校	42	県内大学	21
大田先生	20	畑先生	2	フィールドノート同梱用	200
山梨ことぶき観学院	50	各公立大学 地域交流センター	83	南都留地域教育推進連絡協議会	170
県外学校法人	1	来校者及び希望者配布用	2	その他	593
					4,000

3. 今後の展望と課題

地域交流研究センターが発足して 15 年が経過した。『地域交流センター通信』もセンターと歩みを共にしてきた。本センターの諸実践がいかに多くのかたがたに支えられてきたかは、『地域交流センター通信 29 号』に整理した各号の見出しと執筆者一覧から見て取ることができる。また 15 年間の本センターの活動の記録だけではなく、地域の自然や文化の記録ともなっている。

現在、地域交流研究センターでは、本学のホームページやブログ、年報などさまざまな媒体を使い情報を発信している。竹下勝雄センター長が『地域交流センター通信 29 号』の編集後記で「本学が今春より 2 学部・6 学科体制となるのを機に、センターではこれまで蓄積してきた地域の情報や人間関係を支えにして、本学の多様な学科構成を横断的にかつ幅広い領域を扱

いながら第一歩を踏み出したいと考えております」と記したように、これまでの機関誌発行で深めてきた地域とのつながりや理念、財産を受け継ぎ、今後は新しいかたちの発行物としてセンターの情報を発信していきたいと考えている。

この機関誌の創刊号から第29号まで、延べ540名のかたに執筆していただいた。執筆者はもとより機関誌発行にかかわっていただいた多くみなさまに心よりお礼を申し上げたい。

(文責：北垣 憲仁)

Ⅲ－４．学部共通科目の開講

(1) 地域交流研究Ⅰ：「この場合には、こうする」を超えて

「この場合には、こうする」という決めごとがあるのは、仕事を進めるにあたってある意味で気楽なものである。しかし、「この場合」ではない事態に直面したときはどうだろうか。当然ながらその決めごとでは対応できない。他の人に対しているときであれば「どうすればよいか教えよ」と具体的状況に即して指示を待つことはできても、である。そして、指示待ちというのは必ずしも一般に歓迎される対応ではないことも確かだ。未知の状況に対したときに、どう対応するかを考えるのはいつの時代もとても大切なことだろう。

地域交流研究Ⅰの授業は、地域交流の現場で出会う現象について、基本的な説明を行なうことがスタートになっている。地域で生じる様々な現象を「いつものことか」と流してしまわずに立ち止まってしっかり理解することを通して「この場合」以外であっても状況を把握する助けになることをねらいとするからだ。地域交流活動にあたって、いつでもマニュアル通りのことばかり生じるとは限らない。実際の活動を行なうにあたり、マニュアルにない切っ掛けを捨てるばかりの対応では十分とは言えないだろう。そうしたなかでも（もちろん既存の知識・知見に限界はあるにせよ）状況の把握にたどり着くことができれば、その後の対応についてある程度見通しをつけられるのではないかという期待を持ってないだろうか。

この授業はコミュニティ、まちづくり、町内会・自治会、NPOといった地域に関する用語解説を行なう基礎編をまず核にする。その後、無尽 (rotating credit association) やネットワーク、コモンズなど、地域に関わるなかで出会うであろうやや発展的な内容も扱う。

授業を通じて、日本の目の前のことだけを例にとるのではなく、アジア、アフリカ、欧州、北米など世界の様々な地域の事例を取り上げ、日本の事例との比較を試みている。日本にとどまることなく、世界各地の事例にまで目を向けるのは、私たちの目の前にあることがらが、目の前だけで終わるものではなく、遠く離れた場所にも通ずる面があることを知ることにつながるからだ。身近なことでいえば、ありふれた「納豆」も世界的に見たその分布の広がりには相当のものがある（詳しくは横山智『納豆の起源』（2014年刊・NHKブックス）などを参照）。「餃子」の仲間も名前を変えてユーラシア各地に分布している。日本の地域社会でみられる現象もそれと似たところがある。無尽などはその例であろうが、ある現象が日本の一地方だけに限定されたものでないことは少なくない。地域交流を行なうにあたり、目の前の現象が世界とつながっているかもしれないことはもっと意識されてもよいのではないだろうか。

そして、地域というごく限られた空間的範囲のことを扱うものととらえる向きもある。し

かし筆者は、個々の事例の理解を限られた空間的範囲と過剰に（註）結びつけてしまう立場とは距離を置きたいと思っている。それは結局「この場合には、こうする」という狭い立場に近いものかと思えるからだ。反対に、一つの実例をとりまく社会的背景がいかなるものかを抽象的な水準でも理解することが、事例に関する知識の多方面への応用につながりうるものかと考えている。

また、授業の内容をふまえ、様々な事例についても話す機会を設けた。地域特性と災害の問題、あるいはまちづくりの話題、富士山に関わる話題、また地域の情報を統計から明らかにすることについて、受講者と対話を行ないながら説明・指導に取り組んだ。加えて授業の内容をふまえた小レポートを随時課し、寄せられたレポート内容を添削して返却することで受講者がさらに学習を進められるよう計らっている。受講者にとっては、様々な課題をこなしていくのは大変だったと思う。ただアウトプットを意識することで、授業内容とそれぞれが取り組む学習の成果を感じることができたのではないかと期待するものである。

註 もちろん、「あくまでも」の話である。それをとりまく具体的状況と関連させなければ、事例の理解はなかなか進むものではない。

（文責：山口 博史）

（２）「地域交流研究Ⅱ」－生きもの地図をつくる－

地域交流研究Ⅱでは、2011年より前期に「生きもの地図を作る」をテーマに、身近に見られる生きものの分布調査を実施している。定量的な調査をおこなうことで、季節の変化にともなう生きものの動態を把握し、ここで得られた情報を地域に公開する手法を学び、生きもの地図が地域交流に果たす役割を考察することが授業の目的である。

2017年も受講生の人数調整を行ない、30名ほどでツバメ、イワツバメ、ハルゼミ、カエル類の調査を実施した。6班（1班は3～7名ほど）にわかれて調査をするが、例年、事前に用意した簡易図鑑を配布し、生きものに詳しくない学生にもデータが取れるように配慮している。生きもの地図を作るにあたっては、対象とした種の識別とその生きものがいつ、どこに、どのくらいいたのかを把握することが重要になる。種名が不確かで数量的な記録を伴わないデータは情報量が乏しい。そのため、調査対象の種を正確に識別し、個体数を記録することが重要である。

この授業では野外に出て調査をすることに重きを置いている。生きものに関する知識は、本やインターネットを介して、室内に居ながらにして触れることができるが、自分の足を使って得た情報はとても大事で、直接的な多くの学びはこのような経験のなかにあると考えるからである。受講した学生には、大学周辺の身近な自然に触れ、その意味を考える時間を持ってもらいたいと願っている。

班ごとに調査を行なった後はまとめをして、各班1枚のパネルを作製する。ここで作製したパネルは、都留文科大学前駅の待合室に展示し、その成果を広く公開することに努めている。調査、まとめ、パネル作製という一連の作業をこなすことで、調査対象を知り、調査結果から明らかになったことを理解し、その成果を公開することには、どのような意味があるのだろうか。

自分たちが行なった調査から得られた情報を多くの人々に知ってもらうための工夫の仕方、その楽しさ、重要さに気づいていただけたら幸いである。

2017年はカエル類の調査が3年目ということもあり、大学周辺での生息状況がわかってきた。この3年間にアマガエルやトノサマガエルの分布に大きな変化はなかった。トノサマガエルは個体数の減少が著しい種であり、環境省と山梨県のレッドデータブックでは準絶滅危惧種となっている。これまでの調査により、水田環境や農業形態が現状のまま続くことがトノサマガエルの個体数を維持することに繋がると考えられた。今後はさらに詳細な調査を実施し、どのような条件の場所にトノサマガエルが多く生息するのかを明らかにする必要がある。

希少種や外来種の分布状況についても調査を行ない、その結果を学内はもとより都留市内にも広く公開していきたいと考えている。

(文責：西 教生)

(3)地域交流研究Ⅲ：山梨を「聞いて」「歩く」ことと読書をつなげる

かつて、国立民族学博物館で館長を務めた梅棹忠夫氏が、著書『日本探検』の中で述べている。

なんにも知らないことはよいことだ。自分の足であるき、自分の目でみて、その経験から、自由にかんがえを發展させることができるからだ。知識は、あるきながらえられる。あるきながら本をよみ、よみながらかんがえ、かんがえながらあるく。これはいちばんよい勉強の方法だと、私はかんがえている。

(梅棹忠夫, 2014, 『日本探検』, 講談社, p.21.)

筆者は、読書することを述べた後半部分に力点を置いてこの一節を理解している。もちろん、各地を歩くことなしに、あるいは地域に関わる人の話を聞くことなしに、それぞれの地方に関する知識の手がかりを得るのは簡単ではない。かつて、米国に一度も行ったことがないのに、米国の事情に非常に詳しい人の話を耳にしたことがあるけれども、例外的な存在であろう。しかし、歩いただけでは、ざっと状況を耳にただけでは、よほどの特殊能力の持ち主でなければ、その地方の特性を見ぬくことは難しいと思う。

筆者は、方々を歩いた後、そこで目にしたことについて、読書を深めることをねらいとしてこの授業を進めてきた。個別の地域事情について、いきなり本を読んで知識を得ようとしても実感がわかないこともあって必ずしも容易ではない。しかし、一度話を聞いたり、現地まで行ったりしたのであれば、事情がある程度わかり、また「親近感」がわくこともあってその後の読書の能率が段違いによくなる場合が少なくない。今後も「歩く」ことから、受講者それぞれの関心に応じたより深い知識を得るための読書への接続について考えていきたい。

この授業は外部の講師による座学と実際に各地を回って山梨県の実情に触れるフィールドワークからなっている。座学で取り上げられたテーマは次のようなものであった。

山梨県の概要と観光振興(山梨県観光部)／山梨の歴史／山梨と富士山／郡内織物の新しい挑

戦／地域活性／都留市の魅力／県内のワイナリーの状況と酒税法の改正／宝飾品に関する内容／交通と観光について／山梨の方言（『Can you speak 甲州弁？』）

また2回行われたフィールドワークは次の場所をめぐるものであった。

11/18（土）（郡内方面） 道の駅・甲斐大和、談合坂サービスエリア、道の駅・都留、道の駅・富士吉田、道の駅・鳴沢

12/2（土）（国中方面） 釈迦堂遺跡博物館、メルシャンワイン資料館、笛吹川フルーツ公園、山梨県立博物館、ジュエリーミュージアム

（文責：山口博史）

（4）「地域交流研究Ⅳ」― 地域の交流誌をつくる ―

1. 授業の概要

「地域交流研究Ⅳ」は、学生が地域を歩き自然や人びとの暮らしに直にふれ、体験を言語化し学びあうことを目標としている。本授業では、地域交流研究センターのフィールド・ミュージアム部門が取り組んでいる『フィールド・ノート』の実践を参考にしている。本年度で11年目となる半期の授業である。

本授業は地域に出て直に観察をしたり取材をしたりするため、きめ細かな指導が必要となる。そのためシラバスにはあらかじめ少数で開講する旨を記している。本年度は全学科から23名の受講者があり、また留学生の受講も多かった。

『フィールド・ノート』では、フィールド・ミュージアム部門の機関誌で、参加する学生が自ら主体的に企画を立て地域の自然や文化をテーマとして記事を書く。この過程で学生は地域を歩きじかに自然や人びとの暮らしに触れる体験をする。体験を言語化し学生のあいだで何度も読みあい校正作業を重ねることで他者の経験を共有することができる。『フィールド・ノート』では、冊子という形で地域の読者に届けることで学生と市民との交流が生まれ、大学での学びと自分の経験を絶えず重ね合わせることで学びが深まってゆく過程を大切にしている。

このフィールド・ミュージアム部門の機関誌の実践を参考に、本授業では、学生が自ら地域に出て、取材をし、記事を書くという一連の編集作業に加えて、書いた記事を読みあい校正をする授業にも取り組んでいる。そして最終的に全員で仕上げて記事を小冊子にして取材先など関係者に配付している。本来なら授業の最後に小冊子を受け取ったかたの感想も踏まえて半期の授業のまとめができるのが理想ではあるが、上記のような一連の編集作業には、取材先を選ぶ方法など受講者一人一人に細かな指導をする必要があるため半期の授業では対応が難しかった。しかし授業終了時には、取材や校正作業が楽しく、冊子の完成に達成感をいだくことができたなどの感想が寄せられた。

2. 授業の感想

授業を終えて次のような感想が寄せられた。

○「これからの学生生活においても、どう相手にうまく自分の考えや伝えたいことを伝えるこ

とができるのか、を考えながらさらにいろいろな言葉に出会いたいし、また記事を書いてみたいと思った。記事を書かせていただいたお店のかたに、自分の思いが伝わって喜んでもらえたら嬉しい」

- 「自分が書きたい、伝えたい、と思ったことを他人に上手に文章で伝えることがいかに難しいかを再確認できました。完成した冊子をもって、自分の書いた記事が一冊の形になって嬉しかったです。達成感もあり授業を楽しみに受けることができました」
- 「校正は文章の改善点を見つけるだけでなく、良いところを知ることができたり、もっと良くするためのヒントを発見したり、想像していたよりずっと楽しい作業でした」
- 「冊子を完成させるという達成感があり、他の授業にはない特別な時間だった。みなで仕上げた冊子が完成したときには言いしれぬ感情になった」
- 「私は留学生として日本の記事を書いたことがとてもうれしかった。もし日本で就職したら記事を書く仕事もいいと思う。今回の授業のおかげで自分の将来にひとつの選択肢が増えた。ありがとうございました」

3. 今後の授業の展開について

本授業は、地域に出て体験を言語化することで自ら考えるという姿勢を大切にしている。地域での取材一つをとっても丁寧な指導が必要となってくるため少人数での開講にならざるを得ない。今後もできる限りその点をシラバスやガイダンスで伝えていきたい。受講した学生からは冊子を完成させる達成感があったという評価が多い。授業の最後で製作する冊子をどのような形で完成させるかなど、今後検討していきたい。

(文責：北垣 憲仁)

IV. 地域貢献活動

IV-1. 山梨県南都留地域教育フォーラム

概要

南都留地域教育フォーラムは「地域の子どもたちは、地域で育てる」という基本理念のもと、『連携活動』『交流活動』を軸に平成10年度の講演会及びパネルディスカッションから始まり、平成12年度から3分科会での実践活動報告による討論会となり、平成14年度は5分科会、平成15年度は6分科会、平成16年度は現在の7分科会で行われるようになった。

平成29年度の南都留地域教育フォーラムは、11月2日に富士吉田市立下吉田中学校を会場にして行われた。南都留地域教育フォーラムは本年で20回を数える、この地域の教育関係者一堂に集まり、報告される各事例について意見を述べあう会合である。教育委員会、校長会、教頭会のほか、各学校・幼稚園・保育園やPTA及びPTA連絡協議会、保育所保護者会、青年会議所、商工会議所、商工会など数多くの団体の参加があった。

表 第20回南都留地域教育フォーラム分科会内容

分科会名	分科会テーマ	助言者
幼稚園・保育園・小学校部会	子どもの育ちと学びをつなぐ	都留文科大学・教職支援センター 筒井 順子
小学校・中学校部会	なめらかな連携・接続	都留文科大学・教職支援センター 金山 光一
中学校・高校部会	連携が成長につながる	都留文科大学・教職支援センター 宮下 聡
小・中・高児童生徒部会	地域でともに学びともに歩む	都留文科大学・情報センター 相澤 崇
行政・諸団体・学校部会	地域でともに育てる	都留文科大学・初等教育学科 西本 勝美
PTA部会	地域とつなぐ連携で育む	都留文科大学・教育支援センター 亀田 孝夫

参加者は200以上の団体から300名を超え、様々な立場からの意見交換によって今日的な課題への対応や解決を目指す機会となり、「全体会」と「分科会」で構成され、「全体会」では開会行事やアトラクション（地域の子どもたちの音楽活動の紹介など）を行った。「分科会」では『連携活動』『交流活動』をキーワードとする実践活動報告の発表を基に研究討議を行った。各分科会では2人の講演者が配置されており、都留文科大学の教員が各1名ずつ助言者を担当して行われた。

(文責：事務局)

IV－2. 都留市放課後子ども教室事業

1. 「都留市放課後子ども教室」事業について

本事業は、文部科学省の「子どもの居場所づくり事業」（平成16年度）および「地域教育力再生プラン」（平成17・18年度）を発展的に引き継ぎ、都留市子ども協育連絡協議会を推進主体として、都留市教育委員会生涯学習課が事務局を担って実施している事業である。平成29年度は6つの小学校区（東桂、宝、谷村第二、旭、禾生第二、禾生第一）を中心に、学校の体育館やグラウンド、図書室等に安全・安心に活動できる拠点を設け、地域の住民、大学生、社会教育関係者などを活動指導員として配置し、放課後や週末などにおける遊び、スポーツ、体験活動、学習支援などの活動を行っている。

2. 今年度の活動状況

地域交流研究センターでは、教育委員会からの依頼を受けて、活動指導員として協力してくれる学生を募集している。一昨年度までは、学生が希望する活動に申し込む方法だったが、この方法では申し込みの多い活動とまったくない活動に分かれてしまい調整が難しかった。そこで、昨年度からは、まずセンターが活動指導員として参加できる学生を募集し、教育委員会が募集の際に確認した特技や趣味から適する活動に参加をお願いする方法を取ることになった。

今年度は延べ124名の学生が活動指導員として子ども教室事業に参加し、36の活動で子どもたちをサポートした。

平成29年度放課後子ども教室学生参加活動一覧

No.	開催日	活 動 内 容	活 動 場 所	参加学生数
1	6/28(水)	せっけん作り	与縄営農指導センター	3
2	7/12(水)	将棋 駒の名前と動かし方を覚えよう	東桂小学童教室	1
3	7/19(水)	風鈴を作ろう！	谷二小図工室	3
4	7/20(木)	水てっぼう、シャボン玉、スイカ割りをしよう	与縄営農指導センター	2
5	7/22(土)	文大講座 陶芸レリーフ制作	都留文科大学	15
6	7/26(水)	料理 おにぎり&ジャガイモガレット&春雨スープ	宝小調理室	2
7	7/27(木)	文大講座 試験管で虹っぽいのを作ろう！	都留文科大学	10
8	7/5(水)	外で思いっきり遊ぼう	谷二小校庭	1
9	8/9(水)	絵画 増田誠展に向けた絵画の制作	東桂コミュニティ	3
10	8/18(金)	絵画 増田誠展に向けた絵画の制作	東桂コミュニティ	3
11	8/2(水)	ゆめいろランプを作ろう	盛里公民館	1
12	8/21(月)	せっけんを作ろう！	谷二小図工室	3
13	8/22(火)	ものづくり せっけんを作ろう	東桂コミュニティ	1
14	8/4(金)	アート 木片で作る生命のかたち	宝小体育館	1
15	8/4(金)	ゆめいろランプを作ろう	盛里公民館	4
16	8/5(土)	文大講座 読書の楽しさを知ろう！	都留文科大学	5
17	8/7(月)	つるっ子体験！	戸沢公園	17
18	8/7(月)	文大講座 英語で遊ぼう！	都留文科大学	9
19	9/14(木)	道の駅に行こう	道の駅	3
20	9/19(土)	山歩き！虫や植物の観察	谷二小～都留カントリー	3
21	10/4(水)	ものづくり ビーズ小物作り	多目的ホール	1
22	11/13(月)	ものづくり ティッシュケースを縫おう	多目的ホール	2
23	11/15(水)	さつまいも掘り！	畑	2
24	11/22(水)	収穫したさつまいもでスイートポテトを作ろう！	谷二小家庭科室	4
25	11/29(水)	スイートポテト作り！	盛里営農指導センター	1
26	11/30(木)	遊び 宝の山の番長とたき火	宝小グラウンド	1
27	11/7(火)	ドッジボール、バレーで遊ぼう	谷二小体育館	1
28	12/14(木)	番長と火おこしをして焼きいもを食べよう！	谷二小校庭	3
29	12/20(水)	クリスマスツリーを作ろう！	谷二小家庭科室	4
30	12/25(月)	クリスマス会をしよう！	盛里営農指導センター	2
31	12/8(金)	昔の遊び、都留市俳句かるた	多目的ホール	2
32	1/10(水)	番長と遊ぼう(ご飯・豚汁・ドッジボール大会)	旭小校庭	1
33	1/30(火)	雪合戦又は室内遊び	体育館	3
34	1/31(水)	バレンタイン・チョコレートパフェを作ろう！	盛里コミュニティセンター	2
35	2/7(水)	バレンタイン・チョコレートパフェを作ろう！	谷二小家庭科室	4
36	2/7(水)	プラバン工作！	谷二小家庭科室	4
合 計				124

(文責：事務局)

IV-3. 文大ボランティアひろば

1. 文大ボランティアひろばとは

文大ボランティアひろば³（通称：ぼらひろ）とは、地域交流研究センターと都留市社会福祉協議会との話し合いの中から生まれた「ボランティアをとおして交流できる場」のことである。平成20年度から1カ月に1回のペースで開かれており、本学のボランティアサークルを中心に、地域交流研究センターと社会福祉協議会の職員やボランティアの協力を呼びかけたい地域の方が参加して、緩やかな連絡協議会的な会合を行っている。

会合の内容は、前回の会合以降の各サークルからの活動報告、地域交流研究センターや社会福祉協議会からのボランティアニーズの情報提供、各団体からの協力呼びかけや新事業の提案、地域の方からの直接のボランティア募集の告知などが中心である。社会福祉協議会にとっては、とりわけ大学生対象のボランティアニーズを持ち込む「窓口」ができたことが大きく、各サークルにとっては、相互の活動に触れて刺激を受け合えることや、これらを通じて活動が活性化されることが大きい。ただし、ボランティアを行う際には次の点に気を付けなければならない。

- ①ボランティアはあくまで自発的なものでなければならず、大学やセンターが押し付けるものではない。
- ②それぞれのサークルの個性や独自性を最大限に尊重し、新たな負担をかけない。
- ③活動の蓄積のある既存サークルこそが新しい取り組みの中核である。

平成29年度の文大ボランティアひろばは、8月・9月・2月・3月を除く計8回開催した。

2. 学生サークルについて

ぼらひろには、「ボランティアサークルつくしの会」、「Σソサエティー」、「いこいのひろば支援サークルIKI」の3つの学生サークルが参加しており、各サークルの主な活動は次の通りである。

つくしの会では、障がい者施設の訪問や献血推進活動などの福祉系のボランティアを中心に、地域に根ざした活動をしている。Σソサエティーでは、文大周辺の道路・ゴミ捨て場で朝のゴミ拾い活動を定期的に行っている。IKIは、いこいのひろば3を支援するサークルで、障がいのある方や地域の方との交流を深める場を企画・運営している。いこいのひろばは、文大ボランティアひろばの中で、福祉施設の職員の方から「障害のある方が学生や市民と交流できる機会をつくってほしい」との声をを受けて平成22年10月にできた交流の場である。

これらの学生サークルは個々の活動以外に、協働で取り組む活動も行っている。それが世界の子どもたちにワクチンを届けるためのペットボトルキャップの回収である。大学内には回収ボックスが設置されており、各サークルが当番で回収し、ぼらひろ開催時に都留市社会福祉協議会の職員に渡している。

3 文大ボランティアひろば及びいこいのひろばについては、地域交流研究年報第7号に詳しく掲載されている。

3. 地域交流研究センターにおけるボランティア募集

地域交流研究センターでは、主にサテライトを窓口としたボランティア募集も行っている。今年度は、地域の子どもたちへの学習支援などの依頼が計2件あり、学内の掲示板・学内サイト・ぼらひろを中心に参加したい学生を募集してきた。人の出入りが多い1号館に、ボランティア告知用の掲示板を設置したことで、ぼらひろに参加していない学生にも周知することができた。

4. 今後の課題

ぼらひろは、平成20年度から継続して開催されているが、毎回参加している団体のほかに、参加者がほとんどいないのが現状である。学生サークルが持ち回りで開催案内のポスターを学内に掲示しているが、参加者の増加にはつながっていない。また、参加団体の中でも年度が変わるたびに引継ぎが十分に行われず担当者が活動を把握していない、という問題がおこることもあり、参加団体の中でもぼらひろに対しての意識が薄い面もある。

学内での認知度を高め、参加者を増やし、ボランティア活動の活発化につなげるために、今後の周知方法を検討していく必要がある。

(文責：事務局)

IV-4. 地域交流研究センターサテライト

1. 地域交流研究センターサテライトについて

平成25年度に都留市まちづくり交流センター内に設置された都留文科大学地域交流研究センターのサテライト（分室）である。サテライトでは地域の方々に大学をより身近に感じてもらうことや、大学と市民との交流促進を図ることを目的に活動している。

2. 今年度の活動状況

大学と地域をつなぐ窓口として、ボランティアの募集や地域の講演会への講師派遣依頼、学生のイベント開催の支援などを行っている。平成29年度は、谷村地域協働のまちづくり推進会の要望を受けた、かるたサークルあまつかぜ及び落語研究会と地域住民との交流会の開催や、開地学童とまとクラブから天文サークルへ講師の依頼の取り次ぎ、中国人留学生の公民館学級への参加依頼、また、フィールド・ミュージアム部門の写真展を道の駅つるで開催するなど、多くの活動を行った。また、まちづくり交流センターで開催している「暮らしに役立つみんなの広場」では、本学の学生に講師として協力してもらった。

今年度も引き続き、地域交流研究センターブログにおいて、地域のイベントに参加する学生たちの活動を取材し掲載した。じょいつる市場やみんなの広場、各部活動の地域での活動の様子は、このブログで紹介されている。このほかにも大学を市民に周知するための活動として、大学のイベントの案内やポスターをまちづくり交流センターに掲示し、地域交流センター通信、

フィールド・ノート、大学案内の配架を行った。

3. 来年度の活動について

サテライトの存在をもっと多くの方に知ってもらい、広く活用してもらうために、引き続きサテライトの周知活動を行なう。また、学生・市民から寄せられる相談・依頼への柔軟な対応を目指し、学生と市民との交流の場を増やす活動を行なう。さらに、公民館及びまちづくり交流センターでの活動に活発に参加してもらうために、活動参加者を学内で募集する予定である。

(文責：事務局)

IV-5. 文大名画座

文大名画座は、平成 18 年度から地域貢献活動の一環として実施しており、本学教員を広く市民の皆様に紹介するとともに、その教員がおすすめる映画を本人の解説を踏まえて行う上映会のことである。開催状況は次の通りである。

平成 29 年度第 1 回文大名画座 『シラノ・ド・ベルジュラック』上映会 (桂川祭と同時上映)

日 時：平成 29 年 11 月 3 日 (金) 11:00～13:30

場 所：1 号館 1403 教室

上映作品：『シラノ・ド・ベルジュラック』

解説教員：COC 推進機構 山口博史准教授

参加者：4 名

平成 29 年度第 2 回文大名画座 『浮草物語』・『逆流』上映会

日 時：平成 29 年 11 月 14 日 (火) 18:30～21:00

場 所：2 号館 2101 教室

上映作品：『浮草物語』・『逆流』

解説教員：国際教育学科 ノルドストロム・ヨハン専任講師

弁士：片岡一郎氏

参加者：126 名

※なお、第 2 回文大名画座については、当日の様子が地域交流研究センターブログで紹介されている

(文責：事務局)

Ⅳ－6．学級づくりの向上をめざす実践講座の活動報告

平成 29 年度は 6 回にわたって開催された。

- ・第 1 回 5 月 27 日（土）渡辺恭子（下吉田中学校教諭）
話し合い活動を通して民主的で一人ひとりを主役にするシステム
- ・第 2 回 6 月 24 日（土）小澤香也（上野原小学校教諭）
できることを少しずつ～大学では習えなかった学級経営だから箱
- ・第 3 回 7 月 22 日（土）渡辺幸之助（河口湖北中学校校長）
早く知りたかった！学級づくりの基礎・基本、ここからがスタート
- ・第 4 回 9 月 23 日（土）染矢晋太郎（小菅中学校教諭）
総合・教科からのアプローチ！言語活動を武器に学級をつくる！
- ・第 5 回 10 月 21 日（土）小俣善美（禾生第一小学校教諭）
子どもが教室を「自分の居場所」と感じられる学級づくり
- ・第 6 回 11 月 25 日（土）雨宮勇人（一宮西小学校教諭）
共通の目標に向かう学年・学級～評価言の生かし方で変わる集団

毎回、現職の教員のみならず、本学の学生も参加している。学生にとっては、大学の講義だけでは分からない学級づくりの具体的な方法や事例を学べるだけでなく、現職の先生方とも身近に交流できるということが魅力となっている。平成 29 年度も、初等教育学科の 1 年生から臨床教育実践学専攻や国文学専攻の大学院生まで幅広い層の参加があった。

平成 30 年度は 6 回にわたって開催される。

- ・第 1 回 4 月 28 日（土）金勝武鑑（富士学苑中学校講師）
渡辺幸之助（河口湖北中学校校長）
いじめに挑む学級づくり～金勝先生とみんなで考えよう！いじめを乗り越えられる子どもの集団を育てる（座談会）～
- ・第 2 回 5 月 26 日（土）渡辺克吉（小立小学校教諭）
クラスみんなが主人公！子どもの願いと要求を実現する学級
- ・第 3 回 6 月 23 日（土）浅川早苗（旭小学校校長）
Q－Uを生かした学級づくりを進める考え方と具体的な方法
- ・第 4 回 7 月 28 日（土）長田絵美（双葉中学校教諭）
願いをもった合唱・演劇などの文化活動を生かした集団づくり
- ・第 5 回 9 月 29 日（土）小山博史（小菅小学校教頭）
授業、日記、学級通信でつなぐみんなの心
- ・第 6 回 11 月 24 日（土）深沢羊子（若草中学校教諭）
本音もぶつけ合える話し合い活動で中学生を一步大人にする

（文責：鶴田清司）

V. 地域交流研究教育プロジェクト

V-1. 田んぼクラブ～稲作体験実習の取り組み～

プロジェクトメンバー 西本 勝美 (代表・本学初等教育学科)
別宮有紀子 (本学初等教育学科)

1. 本活動の経過と活動概要について

「田んぼクラブ」は、都留市職員の勧誘・仲介を受けて、都留市農業委員会および山梨県富士・東部農務事務所の協力のもとに2005年4月に始まった活動で、本学近くの水田(約6畝・大学から徒歩5分)で学生と教員の有志が稲作に取り組む、今年度(2017年度)で13年目となる活動である。

当初の2005年度～2007年度の3年間は農務事務所のはからいで山梨県の「ふるさと水と土基金」の助成を受け、続く2008年度・2009年度の2年間は「環境教育GP」の一環に位置付けられ、活動が大いに発展した。そして、2010年度からは、本学の「環境ESDプログラム」との関連(実習系への位置づけ)もあり、本学地域交流研究センターの「地域交流研究教育プロジェクト」に申請し採択されている。今年度は、プロジェクトとしての第3期2年目(通算8年目)となる。

2008年度以降は農業委員会から自立し、「基本的にはすべての作業を自分たちでやる」ことを目標として、それまで市役所の農業リーダーや農業委員会に一任していた種籾の消毒・催芽といったところから、播種、田植え準備、水入れ、田植え、除草、稲刈り、はぎ掛けはもちろん、夏期休業中の水見も当番制でやり切っている(代掻き等のトラクター作業はJAに委託、脱穀・精米は毎年工夫して市民等の協力を得ておこなっている)。無農薬・有機質肥料の使用による有機栽培米への挑戦も一つの目的としている。なお、2010年度からは「学生主体」の運営が目指され、ほとんどの作業を学生のリーダーシップで進めることができるようになってきている。

2. 今年度(2017年度)の活動について

活動開始から13年目、プロジェクト通算8年目となる今年度(2017年度)の活動であるが、この数年、学生組織が弱体化し、今年度の活動継続が危ぶまれる事態となっていた。そこで、教員のほうでもテコ入れをすべく、私自身はもとより、北垣憲仁先生、別宮有紀子先生、西教生先生にも声かけをしていただき、ある程度の人数的新規参加者を得て活動を開始することができた。六代目となる新学生代表のユニークなキャラクターも相乗効果をもたらし、播種、田植え準備、田植えまでは順調に進めることができた。

本活動の大きな特色としては、2011年度から「水苗代」と「疎植一本植え」に取り組んでいることが挙げられる。これは2011年度当初に、一代目の学生代表を中心とする学生メンバーからの発案がきっかけとなり、学生数名と私とで長野県の農家に研修に行き、ノウハウを教わったうえでの取り組みである。

「水苗代」は、田の一角に周囲を堀で囲った床をつくり、直に種籾をまいて苗を育てる育苗法で、農村でもほとんど見られなくなった古い方法であるが、これに取り組むことで米づくりの

全行程をクリアし、発芽や苗の生長のようす、稲の旺盛な生命力を実感することができる。2013年度からは、この水苗代の改良型として、木枠とブルーシートで浅いプールを作り、その中に播種した育苗箱を並べる方法（プール苗代）を試みている。これは育苗中の雑草対策と、水管理の合理化のための改良であったが、水の不足や温度の過上昇が一気に致命的なダメージとなること、プール内の水質が悪くなることなど、思いがけない困難も生じ、土（自然）と切り離れた環境で苗を育てる難しさを痛感することにもなっている（土とつながっていれば、さまざまな変化が緩衝される）。苗づくりには毎年、苦労が絶えないのであるが、今年度は特に悪条件が重なり、初期から中期にかけての生長が極めて悪く、一時は全滅かと心配するような状態になった。中盤以降に施したいくつかの対策が功を奏し、なんとか1週間遅れて田植えにこぎ着けることができたが、苗の量が足らなくなってしまった。ここで学生代表が、地域活動で知り合った市民から苗を分けてもらう段取りを付け、無事に田植えを済ませることができた。学生たちの市民とのつながりの強さを改めて実感するエピソードであった。

田植えは、上述のように2011年度から、田植機の場合よりも大きく育てた苗を、縦・横30cm間隔（尺植え）で1本だけ植える「疎植一本植え」という方法でおこなっている。稲は1本だけ植えても根元から分けつして20~30本に増える。通常の植え方（3~5本くらいを一個所に植える）ではわかりにくい、「一本植え」では1本が20本に、また「一粒が千粒」になると言われている稲の生態をはっきりとつかむことができる（一本植えを始めた当初、実際に収穫時に数えて「一粒が千粒以上」になることを確かめた）。これらの取り組みは、米づくりの工夫を知るといっても、稲という作物を深く知るといっても大きな成果を挙げている。

さて今年度は、田植えの後、特に夏休みに入ってから大きな試練に直面することになった。というのは、六代目の学生代表が、本活動のほかにも各種の地域活動に携わっていたことなどが負担となったのか、思うように動けなくなり、後期に入ってから私との意思疎通もままならないような状態になってしまった。その結果、毎日の水見は学生たちの当番制でなんとか継続できたが、草取りは最初の1回しか実施できず、収穫期を迎えても稲刈りの目処が立たずに長らく放置せざるをえないという状況になってしまった。一時は、私自身はJAに依頼してコンバインで刈り取ってもらおうかと真剣に考える局面に至った。

もちろん、学生代表本人の状態も大いに心配されたが、本活動に関わりのある複数の学生やOBがさまざまに働きかけるなかで、徐々に前向きな気持ちを取り戻し、私との応答もできるようになり、稲刈りにはまだ顔を出せなかったが、その後の脱穀や精米、分配などでは率先して動けるようになった。今回の件では、学生たちの「仲間力」というべきか、仲間を癒やし、エンカレッジする力量の大きさに感嘆し、また感謝するしかなかった。

学生代表の回復・復帰は喜ばしいことであったが、上述のような状況から、二つの問題が生じた。一つは、稲刈りの適期を大幅に過ぎ、また倒伏した稲も長らく放置せざるをえなかったため、養分の再吸収と過乾燥によってパサパサの米になってしまった。しかしこれは、学生代表の回復・復活と、それを支えた学生たちに免じて大目に見るべきであろう。もう一つは、一昨年度・昨年度も学生組織の弱体化に伴って草取りが甘くなっていたうえに、今年度は1回しか実施できなかったため、ほぼ押さえ込んでいたノビエが大量に復活し、稲の生長を阻害するとともに、倒伏の原因ともなった（「疎植一本植え」は茎が太く丈夫に育つため、通常は倒伏しにくいのであるが）。おびただしい種がまき散らされ、来年度の雑草対策の大変さが思いやられる事態となった。

稲刈り、はぎ掛け（天日乾燥）に続く脱穀は毎年の大きな課題であるが、今年度は、田植え時に苗を分けていただいた市民の方に学生代表が相談したところ、自家用の脱穀機を田んぼクラブの田まで運んで脱穀していただけるという、ありがたいご厚意を得ることができた。学生代表の面目躍如であった。

なお、2012年度から本学の「環境 ESD プログラム」の「実習系」活動の履修（2年次～）が開始され、「田んぼクラブ」は同プログラムの「ナチュラルライフコース」の選択履修対象に位置づけられているが、今年度は該当者がいなかった。

3. 来年度（2018）年度の活動に向けて

七代目の学生代表のなり手がいないなかで、上述の六代目学生代表が挽回を期して、引き続き学生代表を務める形で活動を開始した（事実上の副代表の学生もいる）。私としては、頑張りすぎてまた動けなくなったりしないように気遣いながら声かけをし、見守っている次第である。苗づくりも比較的うまくいき、若干の新規参加者を得て田植えも首尾よく終わり、この報告を書いている時点で1回目の草取りを終えた段階であるが、ここまでは順調に進んでいる。

ただ、予想通り、ノビエが大発生してきており、今夏は雑草との格闘になりそうである。

（文責・西本勝美）

V-2. 食育つる推進プラン

学校教育学科 平 和香子

【2017 年度活動報告】

「食育つる推進市民会議実施計画案」Ⅰ～Ⅴに基づき、以下の活動を実施した。

題材名：「都留市食生活改善推進員が教える大学生を対象とした減塩料理教室」

・日 時：2017年12月6日（水）

場 所：調理実習室

対 象：大学生

参加人数：38名（学生25名、市役所2名、都留市食生活改善推進員10名、教員1名）

内 容：昨年度から始まった、都留市の食生活改善推進員の方々による減塩を意識した料理教室が今年度も開催された。実習前に、食生活改善推進員の方々より減塩指導の講義があり、食塩過多による健康への影響や、若者世代の食生活の問題点を挙げ改善しなければいけない理由やアドバイスをいただいた。実習時は、班ごとに食生活改善推進員がつく形で、調理技能を教えてもらいながら、ミートボール、パプリカのマリネ、じゃがいもと大豆のチキンスープ、水かけ菜のおひたしご飯、の計5品目を調理した。今回の体験を通し、減塩意識について、事前事後調査を行った所、減塩の大切さや生活改善、病気予防について意識が高まったことが明らかとなった。

題材名：「たべたあとはきちんとみがこう！はみがききょうしつ」

- ・日 時：2017年12月20日（水）
- 場 所：さくら保育園（都留市田野倉）
- 対 象：園児40名（0～5歳）
- 学生参加：16名
- 内 容：歌・踊り遊び、模型やパネルシアターなどを取り入れながら、正しい歯磨きの仕方について、学生が実例を見せながら実践し、楽しみながら理解できるよう努めた。

題材名：「都留子ども食堂」

- ・日 時：2017年4月22日（土）、5月20日（土）、6月17日（土）、7月15日（土）、8月26日（土）、10月22日（土）、11月25日（土）
- 場 所：いきいきプラザ都留、耕雲院（都留市夏狩1884）
- 対 象：乳幼児、小学生・保護者、地域の方々
- 学生参加：5～20名
- 内 容：学生や地域ボランティアの方々と共に、都留市近郊に住む子ども達へ、カレーライスなど昼食提供と学習支援や遊びの居場所作りを行った。
(文責：平和香子)

V-3. 都留市十日市場・夏狩地区における桂川を中心とした水環境の経年変化の把握

プロジェクトメンバー 初等教育学科 教 授 内山美恵子（代表者）
同 特任教授 中井 均

1. はじめに

本研究は都留文科大学地域交流研究センターが設置する地域交流研究教育プロジェクトの一つであり、2015～2017年度実施分として採択された。

都留市十日市場周辺は富士山に育まれた清涼な湧水が生じる地域として知られ、本地域では古来よりその恵みを受けた生活を営んできた。しかしながら、地層中のどのような経路を通じて地下水が湧水しているのか、基盤岩と溶岩中の地下水の混合があるのか、1年を通じて湧水量や水質がどのような変化をするのか、気象に連動してどの程度水環境が変動するのか、など不明な点が多い。そこで本プロジェクトでは、湧水の年単位の水環境の変化を捉えることにより十日市場・夏狩湧水群の将来予測を行うための基礎資料を得ることを目的として、十日市場・夏狩地区の湧水量観測を実施した。本論では、プロジェクト研究で得られた2015年～2018年の観測結果の概要を報告する。なお、結果の詳細は別途報告する準備中である。

2. 研究方法

湧水は新富士火山富士宮期(津屋(1968)の新富士旧期溶岩)の噴出物である桂溶岩流(高田ほか, 2014)の末端において、古富士泥流と溶岩との境界部から湧出している。湧水地点は十日市場・夏狩地区を中心に数多く存在しており、2008年6月に環境省より平成名水百選の一つとして認定された。調査地点は、常に湧水があつて涸れないこと、大雨などによって観測施設が流されないこと、湧水量が多すぎず計測するのに適切な量であること、観測地点にアクセスしやすいこと、などを考慮して、十日市場にある永寿院さんにご協力をいただき、2015年10月より流量連続観測を継続的に実施した(図1)。

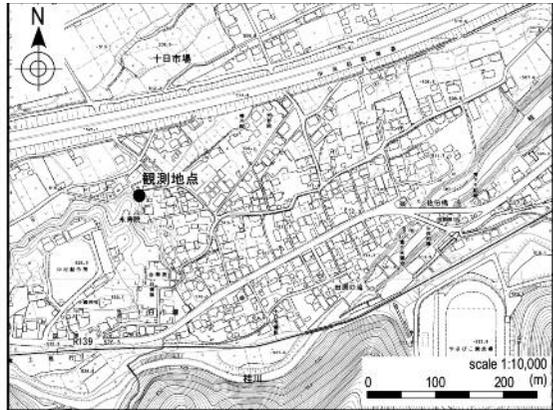


図1. 観測地点位置図(都留市都市計画基本図1・4を使用)

観測は自記水位計にて河川水位の連続観測を実施し、流量の実測から水位流量曲線を求めて、水位を流量に換算する。観測システムは永寿院のお堂の裏の流路に有孔塩ビ管を固定し、その中に水圧式自記水位計を設置して(図2)、2015年10月9日から測定を開始した。測定間隔は2015年10月9日～2016年4月6日までは10分間隔、それ以降は60分間隔である。流量は当初、建設省河川局が定める浮子測法(社団法人日本河川協会編, 2004)にて観測していたが、風などによる観測結果への影響が大きく精度が低かったため、2017年11月より流速計を用いて流速断面法を用いて計測した。流速系はKENEK社のLR-101を使用した。流量観測は月に1～2回の頻度で実施した。また、あわせて簡易水質(水温・水素イオン濃度指数・電気伝導率)の現地観測と、水質分析用の試料を採取している。

3. 観測結果

3-1. 2017年度の観測結果

本地点ではおよそ16m区間の桂溶岩流から湧出している湧水を観測している。2017年4月～2018年3月の湧水量は、暫定換算流量で482～631 L/min(平均521 L/min)であった。湧水量の変動は4月から6月にかけて約520 L/minから約485 L/minへと減少し、6月から8月末まで低湧水量を維持、9月から11月まで緩やかに湧水量が増加して11月から2月半ばまで約540 L/min程度を維持してそれ以降急激に増加した。

湧水の水温は12.3～13.5℃の間で変動し、4月～5月中旬が最も低く、9月中旬～11月中旬が最も高くなり、緩やかなカーブを描きながら変動した。



図2. 水圧式自記水位計設置状況

3-2. プロジェクト研究期間中の観測結果

2015年10月から2018年3月までの長期的な湧水量ならびに水温の変動傾向は次のようであった。観測期間中には、夏季の7月～10月頃にかけて湧水量が少なく、冬季の11月～2月にかけて湧水量が多い傾向が認められた。しかしその量は一定ではなく、2016年11月以降、湧水量が徐々に増加していることが確認できた。

水温はおよそ12～13.6°Cの間で毎年リズムカルに変動を繰り返し、4～5月に低く10～11月に高い傾向が認められた。しかし高温期と低温期の具体的な水温は年により多少異なることが判明した。例えば、2016年は高温期が13.6°C、低温期が12.0°Cに対して、2017年は高温期が13.3°C、低温期が12.5°Cである。水温と気温を比較すると、およそ3ヶ月程度の位相差が認められた。

4. 考察

地下水の一般的な水収支は次の式で表される。

$$P=D+E \quad \dots (1)$$

ここで、P：降水量，D：流出量，E：蒸発散量。

流出量は地表水流出量、湧水量、地下水流出量（より深層の地下水として域外に流出する量）に細分できる。更に、人の活動が活発な地域では、井戸からの揚水量も流出量としてカウントされる。

地下水の水温は、浸透域の降水の水温を反映していることが知られている。研究プロジェクトの観測により、十日市場湧水として湧出している地下水は、気温変化と水温変化の位相がずれていること、気温の振幅が観測期間中ほぼ同じであるのに対して水温の振幅には変動が認められることから、地層中を長距離流動している地下水であることが判明した。一方で湧水量は近年増加傾向にある可能性が認められた。湧水量が増加する要因は（1）式より、a) 気象現象として降水量が増大する、b) 気温変化により蒸発散量が減少する、c) 人の活動による揚水量が減少する、の3点が考えられる。要因を特定するために、広範囲の気象データや地下水利用量データの収集をして、詳細に検討する必要があると考えられる。

5. まとめと今後の予定

都留市十日市場地区において湧水量の連続観測を行った。その結果、湧水期である冬季でも安定した湧水が認められるが、その湧水量は時期により変動することが判明した。また、湧水量が増加傾向にある可能性が認められた。

今回の研究プロジェクトによって、2015年10月から2年半の湧水の傾向が把握できた。しかし、湧水量は様々な要因で細かな増減を繰り返しながら変動するので、より長期的に監視をする必要がある。今後は地域交流研究センター暮らしと仕事部門の研究事業として、湧水量観測を継続していく。

謝 辞

本研究を実施するにあたり、永寿院の水庭次男氏には観測場所を提供していただいた。湧水量観測には、都留文科大学初等教育学科自然環境科学系地学ゼミの卒業生・在学生の佐々木優衣さん、杉山 圭さん、竹川貴裕さん、田村弥咲さん、福永遼太郎さん、佐々木さくらさん、長岡直哉さんに手伝っていただいた。ここに記して謝意を表します。

なお、本研究には、都留文科大学地域交流研究センターの地域交流研究教育プロジェクトの予算を使用した。

引用文献

- 社団法人日本河川協会編(2006) 第3章 流量調査. 改訂新版 建設省河川砂防技術基準(案) 同解説・調査編, 山海堂, 35-60, 591pp.
- 高田 亮・山元孝広・石塚吉浩・中野 俊(2014) 富士火山地質図 第2版(Ver.1). 地質調査総合センター研究資料集, no.592, 産総研地質調査総合センター.
- 津屋弘道(1968) 富士山地質図(5万分の1), 富士山の地質(英文概略), 地質調査所, 24p.
- 内山美恵子・中井 均(2016) V-3. 都留市十日市場・夏狩地区における桂川を中心とした水環境の経年変化の把握. 地域交流研究 2015年度年報, 都留文科大学地域交流研究センター, vol.12, 78-80.
- 内山美恵子・中井 均(2017) V-3. 都留市十日市場・夏狩地区における桂川を中心とした水環境の経年変化の把握. 地域交流研究 2016年度年報, 都留文科大学地域交流研究センター, vol.13, 76-78.

(文責: 内山美恵子)

V-4. 谷^やニラボ

～小学校教員志望学生の科学実験に関する実力向上と 小学生の科学への興味喚起の機会としての放課後実験教室～

申請代表者: 初等教育学科 准教授 山森美穂
協力者: 初等教育学科 准教授 平和香子

【目的】

①小学校教員をめざす学生が指導的立場で小学生とともに実験をする経験を積むこと、②学生が実験内容の選定から安全な実験教室の運営までを行う経験を積むこと、③学生の自然科学の素養を高めること、④理科実験教室への参加が子どもの理科への興味を高める効果を検討することである。

【概要】

谷村第二小学校で放課後に小学生を対象とした理科実験教室（通称「谷二ラボ」）を平成 23 年度からはじめた（27 年度は山森の学外研究のため休止）。実験教室の内容選定や準備、当日の進行は学生が中心になって行い、上記目的①～③の達成を目指す。参加した小学生を対象に、アンケートやインタビューを行い、理科実験教室への継続的参加が子どもの理科への興味を高める効果を検討する（目的④）。同時に、指導的立場で参加した学生に対する効果も検討する。

【平成 29 年度の報告】

谷村第二小学校で、放課後に小学生を対象とした理科実験教室を行った。

- ・第 1 回：5 月 31 日 「振るとどうなる？色が変わる水の不思議」

参加者：小学生 53 名、大学生 9 名。

- ・第 2 回：12 月 4 日 「フィルムケースロケットをとばそう」

参加者：小学生 33 名、大学生 6 名。

第 1 回は、酸化状態で色が変わる物質を用いて、色の変化を楽しめる実験を行った。一つは、青から透明になる反応で、もう一つは黄→緑→赤→黄になる反応である。薬品は直接接触すると危険があることと、これまでで最多の参加児童数であったため、低学年と高学年で部屋を別にし、内容も学年に応じたものとした。低学年の子どもたちはシンプルに「容器を振ると中の液体の色が変わり、しばらくするともとの色に戻る」という過程を楽しんだ。高学年の部では、薬品のはかり取り作業の一部を自分で行うことと、原理の説明を追加した。なお、この回の様子や参加学生のインタビューが朝日新聞記事広告紙面と AERA ムック「国公立大学 2018」の大学の記事に掲載された。

第 2 回では、フィルムケースの中で気体を発生させ、内部の気圧が高まるとふたが外れるとともにケースが勢いよく飛び上がるという実験を行った。エンジンの擦りおろしとオキシドールをフィルムケースに入れ、ふたをして床においたら離れて待つというある意味とても単純な内容であったが、児童たちは繰り返して実験をし、盛り上がっていた。

今年度はじめての取り組みとして、申込用紙に前回の実験の解説の掲載を試みた。その場で高学年向きには原理の解説も行っているが、時間をおいて振り返る効果と、参加しなかった児童にも内容に興味をもってもらえることを狙ったものである。小学校高学年児童や保護者に、しくみがわかるような説明を改めて考えることは、学生にとって意義があることであった。

【平成 30 年度に向けて】

平成 29 年度は 3 学期に学校側と当方の都合が合わせることができず、2 回しか実施できなかった。1,2 月は大学も小学校も多忙であり、できれば 1 学期に 1 回、2 学期に 2 回行えればと考えている。

VI, COC 推進機構

1. 「あかでみあ・ふじやま」について

都留文科大学の学生および日本の他大学に留学している外国人の学生を対象に教育交流プログラム「あかでみあ・ふじやま」(AFP (Academia Fujiyama Program))を行なった。期間は2017年8月25日～9月1日までであった。

このプログラムは大学でみられる国際教育交流のうち、これまでにあまり例がないパターンのもを提供している。すなわち、日本の大学では大学間での交換留学(国境を越えるパターン、ここでは「ロング・レンジ」としておこう)、また日本の大学に留学してきている留学生と彼らが所属する大学の日本人学生の教育交流プログラム(学内での国際交流、ここでは「ショート・レンジ」としておきたい)が主流である。本プログラムは、他大学の留学生と本学学生の交流をめざすという、いわば「ミドル・レンジ」を志向した。本学学生にとってはふだん交流機会が必ずしも多くない国々の学生とふれあい、直接に対話を行なうことで視野を広げることができる。また日本で学ぶ留学生にとっては、日本語の運用機会が得られ、日本の地域に関する学びと一定の視点の獲得および日本の地域的多様性、他大の学生との交流、そしてフィールドワークから得られる多様な学習に向けたきっかけ作りなど、少なからずメリットがある⁴。

参加学生は文大生2名、他大学生9名の合計11名であった(一部のプログラムのみの参加者を含む)。また企画の提供について本学教員(内山COC推進機構特任教授(当時))本学学生2名のサポートを得た。

AFPは、上述のように文大生に他国の学生との交流機会を提供すること、また他国の学生には都留を中心とする地域の事情や富士山に関する歴史、文化、自然について実地での体験を通じて学んでもらおうという意図で行なわれている。また「あかでみあ・ふじやま」という聞きなれない名称が付されているが、実情としては6日間(到着日・出発日を入れると8日間)連続で若者向けの公開講座を行なうこととほぼ同義である。プログラムの内容は下記のようなものであった。

第1日(8/25)

到着・登録

第2日(8/26)

オリエンテーションおよび都留と富士北麓地域の生活について

夕方 富士吉田火祭(於・富士吉田市) フィールドワーク

第3日(8/27)

山梨県立博物館でのセミナー(於・笛吹市)

第4日(8/28)

フィールドワーク(浅間神社・富士山五合目・河口湖など)

第5日(8/29)

山梨の織物体験会(於・都留文科大学4号館)

第6日(8/30)

1 これは日本の学生についてもあるていどあてはまることだろう。

都留と富士山の湧水に関連したフィールドワーク（都留市内、内山特任教授）

第7日（8/31）

勝沼・シャトーメルシャン・ワイン資料館でセミナー（於・甲州市）

夕方 八朔祭フィールドワーク（都留市内）

第8日（9/1）

出発準備

プログラムはおおむね好評であった。他大からの参加者の一人は、出身国で日本の神話に関する学習を深く行っており、関係する場所に実際に足を運び、また同地の民俗にふれられたことについて大変良い機会であった旨を述べている。またセミナーを通して歴史や地域特性についての理解が深まったことを述べている⁵。また、本人の日本理解についても実地に学ぶことで大きな成果を得たことが述べられている。

・・・「あかみあ・ふじやま」に参加して、日本人の信仰についてより深い理解に達したのではないかと感じている。母語では信仰というのはより思想的、哲学的な意味合いの強い言葉だ。これに対し、日本語では信仰というのは「習慣」とよばれるものに近い意味があることがわかった。たとえば、富士吉田の御師は神との関係を確かに強く帯びているけれども、同時に世俗的な職業の性格も濃厚だ。日本での信仰や宗教というものについて、「あかみあ・ふじやま」に参加したことで、このような具体的なイメージを持つことができ、理解が深まったと思う。・・・⁶

プログラムに参加した日本人学生についても貴重な交流機会となったようである。当該学生のプログラムについてのコメントを引用し、この稿を閉じたい。

・あかみあ・ふじやまに参加することができて良かったです。私にとっても素敵な経験となりました。皆とても良い人ばかりで、国が違ってもこんなに笑いあえるんだなと嬉しく思いました。（都留文科大学・学生からの AFP についてのコメントより）

（文責：山口博史）

2 2017年12月9日インタビュー（愛知県内の参加者所属大学で聞き取り）。

3 同上。

(付) 2017 (H29) 年度 地域交流研究センター担当教員

竹下 勝雄	初等教育学科教授	地域交流研究センター長 地域美術教育担当
北垣 憲仁	COC推進機構特任教授	フィールド・ミュージアム部門担当 地域交流センター通信編集長
品田 笑子	COC推進機構特任教授	地域教育相談室担当
杉本 光司	情報センター特任教授	地域情報教育担当
堤 英俊	初等教育学科講師	地域インクルーシブ教育担当
加藤 優	初等教育学科教授	地域インクルーシブ教育担当
福島 万紀	社会学科講師	暮らしと仕事部門担当
内山美恵子	COC推進機構特任教授	暮らしと仕事部門担当
山口 博史	COC推進機構准教授	COC推進機構担当

2017 (H29) 年度 地域交流研究センター運営委員会委員

古川 裕佳	広報委員長	上原 明子	初等教育学科
田口 麻奈	国文学科	Hywel Evans	英文学科
両角 政彦	社会学科	水野 光朗	比較文化学科
別宮 有紀子	環境ESDプログラム 運営委員会	齋藤 浩稔	経営企画課長
平井 勝典	市民代表 (都留市まちづくり支援センター長)		

2018年11月2日 発行

編集者 都留文科大学地域交流研究センター

発行者 都留文科大学
〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1
電話 0554-43-4341

印刷所 有限会社 印刷エトリ
〒402-0052 山梨県都留市中央2-7-24
電話 0554-43-3451
